
キングダムハーツ～剣の御遣い?の戦士～

高祖 天

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キングダムハーツ 剣の御遣い？の戦士

【Nコード】

N9496T

【作者名】

高祖 天

【あらすじ】

紅魔館に支えていた一人の青年がいた。

その者は、自分の能力故に現実世界から紫に飛ばされ、東方の紅魔館におとされる。

だが、彼は強すぎる故に、またイレギュラー故に東方の世界に拒まれて異世界に飛ばされる。

そして青年はキングダムハーツの世界にとばされる。

彼はどのような生を過ごすか。その彼の物語。

はい！これ注意事項ですよ！

・この作品は不定期に投稿されます。

・作者がゴミなので、「は！？なんだこれ！？消え去れ！！」ってな部分があると思います。

プロローグ

……ん？

ここは何処だ？

まずは自己紹介をしよう。

俺の名前は岸昏零斗^{きしがみれいと}、紅魔館のフランドール・スカーレットにつかえている従者だ。ま、主に遊び相手（戦闘相手）が中心だった。そのおかげで弾幕は扱えるようにはなった。ま、滅多に使わないがな。

そして俺は元々現実世界にいた。だが、八雲紫^{やくもかり}にスキマで東方の世界に無理矢理おとされた。何故その言い方かというと彼女の能力は“境界を操る程度の能力”の持ち主だからだ。つまり、その境界でスキマというまあ回路みたいなものを開き、俺を無理矢理東方の世界におとした。

落ちた場所が最悪で紅魔館の主、レミリア・スカーレットの玉座だった。マジで最悪だった。

あ、スカーレット姉妹は吸血鬼でフランドールが妹でレミリアが姉だ。

とにかく大変だった。色々と説明したら一応納得してくれた。そこで紫が登場して、俺はただの人間ではないと…つまり能力を持った特別な存在だったことがわかる。その俺の能力が…

“ 剣を司る程度の能力 ”

化け物だ…一言でのべればそれしかない。もはや俺は人ではなくなっていたらしい。剣が存在する限り滅びず、そして死なない。無限に本物に近く、性能は本物と同じ物をつくれる。空は何故か飛べた。もはや人間じゃない…なんか危なく思えてきた。

レミリアにつかえないかと誘われたが、俺は化け物を側におくのは危ないだろと言って断った。だが彼女はただついてこいしか言わなかった。そこで出会ったのがフランドール・スカーレットだ。

彼女はいずれ俺が支える者だ。なぜ支える気になったのかというと彼女の能力に理由があった。彼女は存在するもの全てを破壊出来る。(多分)だから彼女は地下に閉じ込められた。

そして俺は知った。彼女を支えたい…聞けば聞くほど支えたくなくなる。495年閉じ込められていたらしい。そして俺は支えることにした。そして俺はフランドールに支えていたが、それが寝て起きたら現在に至る。

また紫の仕業か？

いや、違うな。

誰だ!!

私は神だ。

何処の神だよ…あつちの世界には神は何故か山ほどいるんでわから

ないがな。

この世界を作り出した神だ。

成程、それでなんの用だ？

お前は強すぎる。私とお前が戦ったらまず私は負けるだろう。だが、お前に頼みたい事がある。

断る。直ちに元の世界に戻せ。

いや、お前はあの世界ではかなり強い。故にあの世界からイレギユラーであるお前はあの世界から拒まれた。

…え！？

衝撃的な言葉だった。この力故に孤独になる…支えるものも、支えてくれるものもいなくなる…

で、お前はとうしたい？俺を消滅させるのか？

いや、違うな。

ではなんだ？

異世界に行き、生きてもらう。

その言葉に疑問が絶えない。

何故危ないといっときながら俺はまた異世界にとばさらなければならぬ？

能力故に孤独になるのか？

異世界に行く？嫌われるに決まっている。

何故？

何故？

何故？

疑問が俺の頭を渦巻き、そしてだんだん意識が失ってく。何故俺は

苦しまなくてはならない？

俺の意識はここで途絶えた。

主人公設定

名前：岸帛きしがみ 零斗れいと

身長：177cm

体重：70kg

能力：剣を司る程度の能力

性格

冷静ながらもさりげないムードメーカーみたいな雰囲気。とにかく戦いとなると冷静になる。

趣味：鍛練、音楽

苦手なもの：説教

技

・『重なりし絶望』
剣を一本相手に投げつける。だがその剣はとんでいる途中で二倍に増えていく。つまり、最初は一本、次は二本、そして二つの剣が二倍になるから四本、そして次は八本………というぐわいで相手を追い詰める。飛ばしている剣の方向を操ることは可能。

・『ブレードマスター』

大量の剣をはどうほうの如くに発射させる。この技はマスタースパークを元にして作った。

顔だち：自然体の髪。色は銀色。

服装

何故か無駄に黒が好きで、黒い半袖と半ズボンを来ている。腰には常に長いフード着きのジャンパーを巻いている。零斗曰く「寒くなったら着れるだろ。」だそうです。とにかく特定の服しか着ないそうです。なのでいつも同じ格好でいる。変だねwww

零「あ？###」

「ご、ごめんなさ」「重なりし絶望」「ぎゃあああああああああああ
ああ！！」

零「これから本編が始まる。楽しみにしてくれ。」

零斗………許すまじ……ガクッ

旅立ちの地（前書き）

うん、俺負けない。

訂正したんだぜ

旅立ちの地

「?????side」

俺はいつも通りキープレードの鍛練をしている。

俺の名前はヴェントウス。旅立ちの地でキープレードマスターを目指して修行してる。

??「よし、これにて今日の鍛練は終わりだ。各自、解散してよい。」

この人はエラクウス。俺達の師匠でもありキープレードマスターでもある人。俺達って言った理由は…

??「どうした?もうへばってるのか?」

今話しかけたのはテラ。俺の友達だ。あ、俺は皆からヴェンって呼ばれてる。テラもキープレードの使い手だ。

ヴ「そのくらい、平気だ。」

??「ふふふ…そのわりには随分息があがってるわね。」

彼女はアクア。俺の友達で彼女もキープレードマスターを目指している。

というか、俺ら三人全員目指していることは同じなんだけどな。

ヴ「う、五月蠅いな…ん？」

俺はたまたま空を見たら流れ星があった。けどおかしい…

テ「ん？どうした？」

ヴ「あれを見て。」

俺は流れ星の方を指差した。

ア「流れ星ね。」

ヴ「けどおかしくないか？流れ星にしてはゆっくりすぎるし、それにいつまでたっても消えない。」

テ「確かにな…」

不思議だなあ程度にしか見ていなかったが、だんだんその流れ星が大きくなっていく…

ヴ「ん？テラ！アクア！あの流れ星こっちに落ちてきてないか！？」

テ「た、確かにそうだな。…おいヴェン！アクア！流れ星が丘に落ちたぞ！！」

なんか興味わいてくるな…

ア「わ、私はマスターエラクウスを呼んでくるわ！」

俺は興味をもち、流れ星が落ちた場所へ駆け出した。

テ「ヴェン！くっ！俺はヴェンを追う！マスターエラクウスを頼む！」

（ヴェントsend）

…知らない天井だ…いや、知らない空だというべきか？

俺は気絶から目を覚まし、辺りを見回す。

というか、俺どうなってんの？もしかして…落ちた？

何故か俺は何かが落ちた後のようなクレーターの中で倒れていた。

うん、絶対落ちたな。

だって服に土がつきまくりだ。

??「なあ、大丈夫…か？」

上を見上げれば金髪のツンツン頭の少年…いや、ぎりぎり少年がいた。

零「あ、ああ。」

とりあえず返答した。

とにかくこの無駄に深いクレーターから出るか。

俺はジャンプしてその少年のところに行った。

だが……

??「ヴェン!!!」

謎のでかい鍵をもった男が俺に斬りかかってきた。

見切れない程のスピードではないな。ただ攻撃力は高いな。

俺は攻撃を避けた。

しかしあの少年はヴェンと言うのか……ヴェン?そして…鍵?あ、この世界はキングダムハーツの世界か。てことはあの鍵はキーブレードか。

てことはあいつはテラだな。そしてヴェンはヴェントウスの事だろう。

テ「ヴェン!大丈夫か?」

ヴ「テ、テラ!?ちが!」

テ「貴様…よくも!」

…なにもしてねえよ…てか、ヴェントウスが止めようとしてるのに…何故気づかない?

ま、危険視するのは分かる…はあ、結構傷つくな…

零「俺は何もしていない。そもそも「黙れ!!」…話しても無駄か…。」

テラ「ってこんなに猪だったか？ま、いいか。」

零「後悔はするなよ？」

俺は空中に浮き、戦闘体制をとる。

テ「な!？」

ヴ「え!？」

…空中に浮くのがそんなに珍しいのか？ゼムナスとか普通に浮いてるじゃん。あとザルディンだったっけ？それもよく見れば浮いてるじゃん。あ、そっか。あれは例外か。

零「…弾幕勝負開催だ。」

俺は空中から黒い弾幕を放つ。正直に言おう。俺は弾幕より剣を投げつける方が威力も量も上だ。しかも弾幕は広範囲攻撃てるが、一直線しか飛ばない。悲しいほど隙がある。だが…

テ「うおおおお！」

苦戦してる？苦戦してるの？嘘でしょ？ソラなら簡単にかわせるよ。(多分)なのに苦戦？あ、多分戦い方が違うから苦戦してるんだろ

う。うん、そつだと信じよう。

テ「そこだ!!」

嘘でしょ!? もう馴れたの!? やっぱり強いな…。

俺は振り下ろされるキープレードをかわし、地上に降りた。

零「…やるな。だがこれ以上止めないか?俺はお前を傷つけない。」「

テ「なんだと!?それだと俺の方が弱いということか!!」

零「違う。お前は強い。だが、俺はお前と戦う理由がない。」「

テ「お前には無くても俺にはある!!」

ち!仕方ない…気絶させる。

てかさっきの攻撃、どうやった?俺空中に浮いてたよ?空飛んでたよ?なんで地上からキープレードで戦えるの?てか、もしかしてさっきの攻撃、ジャンプしたの?神じゃね?

零「…慌てる…奥義『重なりし絶望』」

俺は普通の剣を投げつける。あ、普通の剣だけど堅さはかなり堅いぞ。魔法と打ち合っても負けないぐらいだな。

剣を操り、テラの目の前で剣を二つに分けさせる。そして段々剣が増えていき、テラが混乱してる。

テ「なんなんだこれは…なんだこれはー!!」

零「爆発しろ…」

ポカーン!!

俺の放った剣が全て爆発する。けど威力はないよ。証拠にクレータ
ーすらできてないよ。いくつかは目眩まし程度の爆発。頭の上にあ
るものは少し打撃を与えた程度のものだ。

ヴ「テラ!!」

ヴェントウスがテラを心配する。

零「気にする必要はない。気絶させたただけだ。理由すら聞かない奴
にはこれくらいはしとかなくては話をききやしないからな。」

ヴ「ふう…よかった…それにしても強いな。俺はヴェントス。皆
からヴェンって呼ばれてる。」

俺は驚いた。大抵のやつは俺の力を恐ろしく思い逃げる。人間でこ
んな接し方されるのは初めてだ。

ヴ「ん?どうしたの?」

零「(。(。口。(。)」

ヴ「おゝい。」

零「…いや、なんでもない。ここでは珍しいかな?俺は岸帛零斗だ。

「

ヴ「キシガミレイト？変な名前だな。」

零「発音が違うぞ。岸帛零斗だ。」

ヴ「キシガミレイト？」

零「だから…もういいよ、これからは零斗と呼んでくれ。」

ヴ「わかった、レイト。」

零「…もう俺は気にしないぞ…気にしない、気にしないぞ。」

仕方ないか。この世界ではこんな名前の奴はいない。いたら見てみたいぐらいだ。

零「さてと…そいつを気絶させたのは俺だ。俺が背負うからこいつの家まで案内してくれ。」

ヴ「わかった。」

俺はテラを背負う。ん？何故知らないふりをするかつて？異世界からきたとしてもなんかこの物語全てを知っていたらなんか天の御遣いだのと勘違いされるだろ。それだけはやだな。

零「…意外と重いな。凄い鍛えてるな、こいつは。」

ヴ「そりゃね。テラは努力家だからよく一人でも鍛練してるよ。」

ほう？それなら強いのも頷けるな。

??「テラ！ヴェン！」

??「む？そこの君は誰だ？」

歩いているとアクアとエラクウスと遭遇。

ヴ「あ、アクアとマスターエラクウク。流れ星が落ちた場所に向かったらいまテラを担いでる人が倒れていたんだ。俺が助けようとしたら…」

零「テラとか言ったな。テラが俺を妖怪かなんかと思って攻撃してきた。何度か俺は理由を説明しようとした。だけどテラが黙れ！！とか言つてでかい鍵で斬りかかってきた。だから俺は仕方なしに気絶させた。テラは完全に俺を殺しにかかってたからな。」

エ「そうか、すまなかった。我が弟子がそのようなことを…」

零「いや、別にいい。誰だつて見ず知らずの危険人物を見たらそうなるよ。」

俺は鼻で笑った。凄く悲しい。何故俺はあの世界で生きられない…

何故俺を拒んだ…ただ俺は孤独で温もりを知らない少女を少しでも救おうとしただけなのに…彼女も俺に心を許してきて、破壊本能を制御出来るようになってやっと孤独の壁をぶち壊したのに…何故？俺は何をしたんだ？

エ「私はエラクウス。とにかくいろいろ聞きたいことがあるからついてきてくれ。」

零「わかった。俺は岸帛零斗だ。零斗って呼んでくれ。」

ア「レイト？不思議な名前ですね。私はアクアともうします。」

零「発音が…いいや。それと敬語は止めてくれ。」

ア「いや、しかし…」

零「ア〜ク〜ア〜？」

ア「…わかりました。いや、わかったわ。宜しく、零斗。」

零「ああ、そっちの方がいいな。」

エ「レイトとやら、ついてきてるか？」

意外と心配症なんだな…

零「平気だったの。」

俺はエラクウスの後ろをついていった。

目的地に到着した。けど…

零「広いな、よく迷子にならないよな…」

今俺は客室に案内された。テラはヴェンがみていてくれている。ここにはアクアとエラクウスがいる。

零「それで、話とは？」

エ「それは、先程レイトは自分の事を危険と言っていたな。それは何故？」

その話か…

零「その話をするためには条件がある。まず、どんなあり得ない話をしても信じることだ。いいな？アクアも。」

エ「わかった。」

ア「それで、その理由は？」

零「それは…」

くアクア side

私は不思議な人と出会った。テラを担いでる彼、名前はキシガミレイトという不思議な名前だった。それとテラを気絶させるほどの力…

彼は危険だと思う。けど、彼は話している時にもの凄く悲しい目をする。

彼は何かを抱えている…私はそれを知りたい。すると彼は話す条件としてどんなあり得ない話でも信じろといってきた。どんな話だろう…

零「まず俺はこの世界の住民ではない。」

それはだいたいわかる。流れ星みたいに落ちてきたのだもの…あまり驚かない。

零「だが、その意味は他の星からきたとかなんちゃらじゃない。」

え？そういう意味じゃないとしたら、どういう意味？

零「俺はもはや違う次元から来ている。だからどの星を探しても俺の住んでいた世界は見つからない。」

次元？どういう意味？

エ「つまりそれはどういう意味なのだ？」

私が思った事をマスターが述べた。

零「つまり世界そのもの…つまり君達の星全て何もかも違う世界から来たとして考えればいい。」

意味はよく分からないけど、とにかくこの世界に存在しない世界から来たということね…やっぱり分かりにくい…

零「まだこれからだ。これからが本題だ。」

つまりこれよりまだ有り得ない話がある…こんがらなければいいけど…

くアクアendく

さて、俺が異世界から来たのはわかってもらえたかな。ま、いいだろう。

ボタンッ

…テラとヴェントウスが入ってきた。

テ「…先程はすまなかった。ヴェンから聞いた。」

零「いや、いいんだ。それより、ちょうどいいときに来た。重用な話がある。あ、君の名前はもう聞いてるから自己紹介はいい。俺は岸帛零斗だ。零斗って呼んでくれ。」

テ「レイト？不思議な名前だな。」

やっぱり発音が違う…畜生。

零「それより、まずは俺の話を聞いてくれ。」

ヴ「ええっと、つまり俺らの世界には存在しない世界から来たの？」

成程…そういう捉え方が…ま、間違っではないが、ややこしい考えだな。

零「ああ、そうだ。だがまだこれからが本題だ。」

テ「今のよりこんがらがる話か？」

何故そう思う…絶対単純だ。

ヴ「(？)―(？)」

零「あ、さっきのよりも単純だ。」

ヴ「ふう〜…もう頭が…」

なんか凄い考えてるね、この子…

零「とにかく、話すぞ。その世界は、人だけが存在する世界ではない。妖怪や鬼、神が共存（？）している世界だ。」

エ「妖怪…」

ア「鬼…」

テ「神…」

ヴ「……。」

零「そこはまず、普通では考えられない力を持つ。まずは能力だ。ほら、君達はさっきのテラみたいに鍵をだせる？」

エ「キーブレードのことか。」

しかしキーブレードって強いよな…だいたいわかるけど心に攻撃…なんかすげえ…

零「つまり、君達はキーブレードを出現させたり消滅させたり、必要な時に自分のがだせるように、こつちの世界では能力という力を持つ者がいる。」

エ「能力…」

零「その能力を持つ者は、はっきりいって大抵な奴は死なない。」

ア「…死なない？」

あら、やっぱりいくつくよな。ま、考えられないよな。人間は生を受けると歳をとり、死ぬ。刺されても死ぬ。なのにまず死なない存在がいる…その時点で可笑しいとおもっただろう…

零「あ、一言いうぞ。死なないって言っても寿命がないだけの奴が多いぞ。」

エ「すまぬが、ひとつ聞きたい。」

零「どうした？」

エ「レイトよ、お主いくつだ？」

零「ああ、俺は440歳だぞ。」

エ「…真か？」

零「真だ。」

エ「……。(。；)(う、羨ましい…歳をとらないと…)」

ア「(まさか、見た目は普通なのに440歳!?これで師匠よりも歳上!?)」

テ「(師匠羨ましそうに驚いたな…眼福。)」

ヴ「(てことは、また更に何百年何千年たとうがこの姿のまま!?)」

こいつら、絶対なんか思ってるな…

零「まあ、とにかく話の続きだ。その能力はこの世界よりも強力だったり、弱かったりだな。」

テ「その能力とは例えばどんなものがあるんだ？（キラキラ）」

ちよつと！なぜそこでくいつく！キャラ違うだろ！

零「そうだな：俺が見たなかで強かったのは“境界を操る程度の能力”“ありとあらゆるものを破壊する程度の能力”だな。」

はあ、本当に悲しくなってくる…

テ「：破壊の方はわかった。だが境界とは？」

零「そうだな。つまり、大抵のことは思い通りでことが運ぶって感じ。」

エ「そのような奴がいたとは…」

テ「まさしく、有り得ない…」

ま、そうだろうな。みんなは能力の話でカポーンとしてるが、俺は話を続けることにした。

零「俺はその能力のせいで、俺はその世界から拒まれた。そして現在にいたる。」

ア「つまり、貴方の能力が強すぎてその世界が貴方の存在を拒み、そして私達の世界にとばしたと…」

凄い推察力だな…

零「ああ。そして、俺の能力は“剣を司る程度の能力”だ。」

…皆が沈黙した。

零「司る…すなわち支配…俺は剣の存在がなくならない限り俺はよみがえる。」

はつきりいおう。皆信じられない的な目で見てくる。

零「あと剣の事だが、偽物にはかわりはないが本物に近い、いや、たまにそれ以上の物をだせる。そうだな…テラ、さっきのキーブレード、俺が出現させよう。」

そう言い、俺は立ち上がった。そして、俺は両手にキーブレードを出現させる。

エ「…選ばれし者しか持てないキーブレードを両手に持つとは…」

零「だから偽物だって。だが、量で勝つ。さらに俺は剣を支配しているからその能力も扱える。」

皆がポカーンとしている。

零「…以上が俺の話だ。すなわち、その能力で俺は世界に拒まれ、俺はここにいる。」

零「所詮、俺は孤独を生きなければならぬ存在…危険な能力のせいで…」

俺は…

零「あつちの世界で支えるべき存在があるのに…仲間がいたのに…」

何故…

零「…その能力故に世界に拒絶され…制御できるのに…とばされて…」

何故世界は俺を拒んだ…ただ仲間、友と時を過ごしていただけなのに…

何故！何故…俺がこんなに苦しい思いをしなければならぬ…くそ！

俺は気づかぬ内に涙を流していた。

もう、戻れない…奪われた…時間を、友を、支えるものも…全て！
今俺に残っているのは苦しみ、孤独…

ア「マスター…」

テ「俺からも、宜しくお願いします。」

ヴ「マスター、頼みます。」

エ「うむ…レイトよ、我らの元にこないか？」

…え？

零「……何故？俺は、いつ暴れだすか分からない……テラ、知っていただけろ……あれで俺は本気なんて出していなかったことを……俺の力に……呑まれないのか？破壊されたいのか？」

ア「それは違う。レイト、確かに貴方は危険。だけど、それは心に空いた穴のせい。」

……心？

心……俺にそんなもの……もう存在するはずない……

零「……もう、心は捨てた。」

ア「違うわ。貴方に心がないはずはない。貴方はその証拠に涙を流せる……現に自分は危険だなんて言って私達の安全のために遠ざけようとしたじゃない。」

……

ア「それに、貴方は自分一人で全てを抱え込んで。人を頼る事も必用よ。貴方にも支えていた人がいたように、私達が貴方を支えちゃ駄目？」

支えられる……か。

なんか変な感じだな。400年以上支えていたんだから支えられる感情を忘れてるのかな……

零「……」。

俯き、涙を流していた顔を、涙を止めて顔を上げる。

零「では、世話になることにしよう。テラ、ヴェン、アクア、そして…エラクウスと呼んでよい。」…エラクウス、宜しくな。」

俺は満面の笑み、今までにこんなに本当に、自然に出た笑顔は久しぶりだ。笑みを浮かべた。

エ「うむ。」

ヴ「宜しくな。」

テ「修行の相手を頼むぞ。」

…最後のは聞かなかったことにしよう。

俺はアクアの目の前に立つ。

零「アクア、君には本当に感謝する。心のそこから笑えたのは君のおかげだ。」

ナデナデ

俺はアクアの頭を撫でた。

ア「な！な！／／／」

零「有り難う、アクア。（ニコッ）」

ア「／／／／／」

アクアは顔を俯せた。

照れてるのかな？ああ…スカーレット家に支えていたときもこうしてスカーレット姉妹を撫でたもんだなあ…なんか咲夜と居眠り門番は羨ましそうに、こあ（小悪魔）やパチュリーは撫でてや撫でなさいなど頼んできてたなあ…

テ「……アクア、おちたな…（ヒソヒソ）」

ヴ「アクア、あんなに顔赤くして…（ヒソヒソ）」

テ「だけどレイトも鈍感だな…（ヒソヒソ）」

ヴ「そうだな…（ヒソヒソ）」

なんか二人で話してる…なんか俺を可哀想な目で見てない？なんで？

パッ

俺は撫でるのを止めた。

ア「あ………」

なぜ残念そうな顔するの？ま、いいか。

エ「レイトよ、部屋は私が用意しよう。今から案内する。」

零「ああ、有り難う。」

そして俺は部屋に案内され、今日の終わりをつけた。

旅立ちの地におりた俺は、これから何が待ち受けるのか…そういえば、原作を思い出したらゼアノートとヴァニタスがいたよな…いずれ戦うから気を付けるか。

エラクウスvs零斗(前書き)

っしゃ〜!!かいた〜!!

超生暖かい目で見てください。

エラクウスvs零斗

チュンチュン

ん？朝か…

俺は部屋に案内されたあと、ま、疲れていたためかすぐに寝た。

ってか、あの昨日のテラの猪っぷりってなんだったんだ？

あと、この部屋は意外に便利だ。原作は少し知ってるんだが、部屋の中までは知らない。日常的に使うもの、水道やトイレ、更に風呂場まであった。歯ブラシもあり、本当に充実し過ぎだ。けっこう驚いた。特に風呂場。便所と風呂場は別になっているし、本当に都合良すぎないかと心配してしまう程だ。あと、何故風呂場があるんだ？シャワールーム程度だと思っていたんだが…気にしたら負けだ。

家具は仕方ない。はつきり言ってベットとクローゼットしかない。中を覗いたらタンスがある。しかも小さい。俺の身長半分以下ぐらいだな。タンスを覗いたら俺のお気に入りのお黒い半袖半ズボンが三着ずつ、そして長く黒いフード着きのジャンパーは二着入っていた。

ジャンパーはまずいだろと愚痴りながら見ていたら紙が入っていた。内容は…

“零斗へ

異世界の移動の事はすまなかった。私が謝ることではないが、代わりに私が謝罪しよう。

せめてもの贈り物だ。お前の服を送ってやった。大切に使いよ。

神より

追伸

たまには他の服も着たらどうだ？”

あの手紙は余計だった。特に追伸。別に良いじゃないか。好みは人それぞれさ。な？皆もそう思うだろ？いつも同じ服でも普通だよな？

な？な？？な？？？

おっと、つい昨日の出来事を振り返っていたら興奮しちゃった。

ベットからおりて、朝の便所へ…何故か俺の朝はいつも便所で踏ん張る事から始まる。

ジャ〜

ふ〜スッキリした。さてと…って、流石に着替えるか。なんか汗が服についてるしな。

クローゼットに行き、服を選び（全部同じだが…）、そしていつもの服に着替えようと上着をぬいで「レイト〜？朝食で…」……

零「……………」。

最悪だ…

てかノックもせずに入ってくるって…ノックぐらいは知ってるよね？しかも入ってきた人物が…

アクアだった…

ア「……………き／／／」

零「……………この…」

ア「キヤアアアアアア！！／／／」

零「変態がああああああああ！！！！ノックぐらいしろおおおお！！！！」

ア「ご、御免なさい／＼／」

ヴ「…アクアに男の着替えを覗く趣味があったなんて…」

テ「違うだろ。どちらかと言えば襲うだろ。」

ア「そんな趣味ないわよ!!!／＼／」

ヴ「レイトだからなあ…あっても可笑しくないような…」

テ「だろ？」

ア「どういう意味よ!!!／＼／」

あの後全員集まって結構処理が大変だった。今は食堂らしきところで飯を食ってる。

…こいつら、本当にいずれのあの勇者三人組なのか？特にアクア…お前いずれキーブレードマスターになるやつだろ？大丈夫か？

零「あ、そういえばエラクウス、ちょっと相談事があるんだが…」

エ「うん？どうした？」

零「どうやらこの世界と俺のいた世界では魔法が随分ちがうみたいなんだ。」

俺は弾幕だな。特に量を中心とした戦い方。そして相手をピチューンさせるんだけど、こっちはほぼ一撃一撃を強くしている魔法の率の方が高い。あと魔法覚えといた方が便利じゃん。

あの究極魔法の『アルテマ』も使えたりするかもしれないからな。
なんか雰囲気的にも覚えておきたいしな。

零「そんなことだからさ、魔法を教えて貰いたいんだよ。」

ア「それなら私にやらせてくださいー！」

…アクア、なんか怖い。

なぜそこまでくいつく？ある意味恐怖なんですが…

零「んじゃ、お願いするかな。宜しくな、アクア。（ニコッ）」

ア「／／はい。／／／」

テ「本当はレイトと会える時間を増やしたいだけだよ…」（ヒソヒソ）
「」

ヴ「アクア、どこまでほれてんだよ…」（ヒソヒソ）
「」

あ、またなんか二人で話し会ってる。なに話してんだろう…

ア「…」（ギロッ！）
「」

ヴ・テ「…」（ビクッ！）
「」

…今、アクアが物凄い殺気を出してなかったか？

エ「うむ。ではレイト、その代わりってのはなんだが、私と一つ、

手合わせ願いたいのだが、宜しいかな？」

ふうん…教えて貰う変わりに手合わせか…悪くない条件だって、言えるかー！

零「ちょっと待て！あのな！キーブレードマスターの奴とたたかえだ？ムリムリ！絶対無理！死ぬー！」

エ「安心なさい。手加減は…」

良かった…なら平気だ。

エ「せずに本気で殺るから。」

…ちょっと待て待て待て待て待て待て！馬鹿馬鹿！そこは手加減してやるだろ！？しかも字が危ない！不味いつて！これはヤバイ！

テ「マスターとレイトとの戦いか…これは見逃せないな。」

ヴ「これは楽しみだなあ。」

ア「これは学習になる…」

…マジで？断れない雰囲気じゃねえか？

まさか、これは畏か！？

畏だ…これは畏だ！

エ「では行こうか。」

俺は引きずられて鍛練場へ連れていかれた。

鍛練場にて

エ「さあ何処からでもかかって来い！」

いやあんたねえ…俺の意見は無視というか、話すら聞いてないよな…
…まったく…
…ってか、キーブレードマスターだろ？どう見たって死亡フラグだろ？死ぬよ？マジでわたっちゃいけない川わたりにいつちまうぜ？いや、逝つちまうぜ？

ア「レイト…！頑張つてね〜！」

テ「さて、マスター相手にどれだけいけるか…」

ヴ「レイト！頑張れ！！！」

うわぁ〜…なんか応援されちゃってるよ…畜生。

死亡フラグ回避不可能。

溜め息を吐き、エラクウスに顔を向けた。

ま、当然キープレードを構えてるわな。仕方ない…

右手に俺の作り出した見た目普通の剣を出現させた。

エ「では…参ろうか!!」

零「弹幕勝負(?)の開幕だ!!」

魔力(?)を集中させて空中にわずかに浮く。

両者にらみ合い、先手を打ったのはエラクウスの方だ。

エ「ふん!!」

エラクウスは素早く俺の懐に踏み込み、キープレードをふりおろす。だが、俺は飛んでいることを忘れずに。

普通に俺はエラクウスの攻撃を紙一重でかわし、空中に浮いた。

エ「あまい!!」

エラクウスは俺にホーリーらしき魔法を放つ。

それを俺は持っている剣で斬り裂き、攻撃を防いだ。

エ「どうした?防いでばっかりでは私に攻撃できないぞ?」

挑発のつもりか？それとも誘いか？まあどちらにせよ…

零「その誘い…のるぜ！」

黒い弾幕をエラクウスに放つ。対してエラクウスは当然のように防ぐ。上等…いいぜ。これから貴様に敗北の二文字を送ろう。

俺は一気に急降下し、エラクウスに勢いを武器に剣をふりおろす。

エラクウスはかわせないと見たか、キープレードでそれを防ぐ。

だが、力勝負では勝利は目に見えていた。

エラクウスは反動で後ろへ吹き飛び、足で踏ん張り倒れるのを抑えた。

もう隙だらけだ。当然のように俺は追撃をかける。

が…

そこにはエラクウスはいなかった。

エ「油断は禁物だ！」

後ろか…

エラクウスはキープレードをふりおろすが、左手に剣を出現させ、防いだ。

殺気をエラクウスに飛ばし、エラクウスを威圧する。

不味いと判断したのか、エラクウスは大きく後ろに跳んだ。

零「…やるね。」

エ「レイトもな…」

まさか、人間相手にこれ程までもつとは思っていなかった。

まあ当然か。マスターだし。とにかく確認出来たのが死亡フラグではなさそうだ。最初はビビったけど戦ってみると意外にも普通だった。

けど、これで終わりだな。

零「だが、俺の方が強い。」

ア「!!!? (マスターと対等に戦ってる様には見えるが、実際マスターが押されている。しかも、マスターは肩で息をしているのにレイトは汗すらかいてない!?!しかもあの発言…まさかあれは手加減して戦っていたとでも言うの!?!?)」

テ「!?!? (まさか…俺はあんな化け物を相手していたとは…負ける筈だ。今なら分かる…勝てる訳がないと感じてしまう…)」

ヴ「あ…ああ… (あり得ない…レイト、君ってもしかしてキープレイドマスター?)」

さて、そろそろ始めるか。

この俺の能力の力…

“ 剣を司る程度の能力 ”

一見別に強くもなければ弱くもないと見えるが、俺は操るじゃない。司るだ。この能力の恐怖を教えてやるっ…。

殺気を解放し、俺はざっと十本の剣を背中に浮かせた。

くエラクウス side く

信じられない…

その言葉しか浮かばない。

私は、これ程の強敵と手合わせしているのか…

やはり何処かで慢心していたのか？

私はキープレードマスターだ。

その言葉が原因で相手の強さも見切れぬ者になってしまったとは…

これはあくまでも手合わせ。本場ではない。まず死ぬことはないが、頭の中ではこのことばが流れている。

奴には勝てない

確実に殺される

今すぐ逃げろ

彼には失礼だが、世界が拒んだ理由が頷ける。

本当に化け物ではないか…。

彼は剣を左手に一本、右手に一本、そして新たに出現させ、背中に剣が浮いていた。計、十二本の剣があった。

まったく、恐ろしい。

私はキープレードを構え、戦闘体制をとる。

くエラクウスendく

さあ、どこまで耐えられるかな？

エラクウスは戦闘体制をとっている。へえく？あの殺気に耐えたんだ。

じゃあそう簡単に壊れないよな。

先手は俺がうった。

エ「!?!」

一撃目は防いだ。が、防がれたと同時に蹴りを放つ。

エ「グハツ!?!」

エラクウスは吹き飛び、なんとか着地は成功。

俺は追撃はかけず、背中に浮いている剣を操り、エラクウスに向けて放つ。

エ「なんの…まだ!!」

キープレードで剣を弾く。だが、これが運のつき。弾いて剣に意識が向いたときに俺は全力でエラクウスに駆け、エラクウスの首筋に剣を構える。

それと同時にエラクウスに弾かれた剣もエラクウスの周りを囲むように刃をエラクウスに向けていた。

…やっちゃった…畜生。能力の影響で若干フランドール化しちまったよ…はあ…

エ「…私の負けだ。」

白黒は見ての通りだ。

エラクウスはキープレードをしまった。

俺もいい加減剣をしまつか。

零「いや、能力の持たない人間にここまで戦えるとは…正直ビックリしたわ。」

エ「私も、まだまだ強くならねばならないな。マスターとして、弟子たちを導く力を持たなくてはな。」

ヴ・テ・ア「マスター…」

へえ？結構言うじゃんか。普通なら負け惜しみとか言つものについて、エラクウスはそんなキャラじゃないか。

さて、本題へ入るか。

零「それで、魔法の事なだけど…」

エ「ああ、いいぞ。…アクア。」

ア「はい。」

エ「レイトに魔法を教える事だが、修行後でいいか？」

ア「はい、お任せください。」

エ「では頼んだぞ。」

零「改めて宜しくな、アクア。(ニコッ)」

ア「／／／」

さて、これで魔法は大丈「レイトよ、そしてもう一つ頼みがあるの
だが…」

エラクウスめ…条件を付け足すとは…

エ「ついでに弟子達に稽古つけてやってくれないか？私の出す修行
でレイトとの勝負も入れようかと思うのだが…」

…へ？

エ「よし、決まりだ。」

決まってねー！ー！ー！

マジで！？

あの勇者三人に修行相手をメニューに出す！？死ぬ！死亡フラグだ
！！（当然、死亡フラグでは無いことが修行時に分かる。）

もう、どうにでもなれ！

零「よ、宜しくな、三人とも。（二、ニコツ？）」

ア「／／／」

ヴ「どこまでほれてんだよ…」（ヒソヒソ）「

テ「今のは確実に疑問系の笑顔だったぞ？…」（ヒソヒソ）「

なに話してるんだろっ...

それで、結局修行のメニューを引き受けることになった。

ゼアノートと御対面（前書き）

私は神となった…そう、私は誤字の頂点に君臨したのだ！

ゼアノートと御対面

ア「そう！レイトはやっぱり凄いよ！」

はい、零斗です。

エラクスとの勝負からはや一週間たった。

魔法もだいぶ出来るようになった。

アクアも教えて良かった的なことを言いながら教えてくれる。

今放てる魔法がファイア系の上級魔法まで放て、ブリザド系は上級、サンダー系はサンダラ“なら”放てる。

何故かサンダーは放てず、サンダラは放てる。可笑しすぎるよな。

回復魔法はケアル系が上級までいける。

そしてなんとか無理矢理頑張ったのはファイガを応用してフレアを放とうと自主トレで頑張ったらできた。

まあそのぐらいだ。ん？なんで全部魔法放てないのか？無理言うな！いくら魔力はあろうとあっちの世界とは別な魔法なんだよ！無理に決まってるだろ！

ま、それはさておき、何故かアクアは魔法を放つたんびに…

ア「じゃあ次はこれを…」

零「…さてアクア。顔が非常に近いぞ。」

ア「べ、別にいいじゃない。／＼／＼そっちの方が教えてやすいんだから。／＼／」

何故か最近話したんびに、または教えるたんびに顔を近づけてくる。つてか近い。マジで近い。吐息が…つて

零「な、なな何してててんだだよ！！／＼／」

耳にフア〜つてする風が…体がゾワゾワつてしてウヒヤッ！つてなつて…

ア「ふふふ…」

やべーアクアこんなに積極的だったか！？原作さっそく崩壊してんのか！？テラといいアクアといいエラクウスといい…無事なのがヴェンだけが…。

ん〜…そろそろ終わりかな。もう眠くなってきたしな。

零「今日はこんくらいで終わりにしないか？ちよつと眠くなってきた…ふあ〜…」

ア「ふふ…そうね。それじゃあ今日はここまでね。」

零「ああ、おやすみ。」

ア「おやすみ。」

こうして俺とアクアはそれぞれ部屋に戻り、平和な1日が終わりを
つけた。

B a d e n d

つてなるわけないよ。
なんで嫌な終わりがたなの！？つてか、まだ終わってないわ！！

ぶるるるあああああああ！！！！！

ガバツ！！

…夢…かな？

今凄い共演を見た気がする。

夢の内容は…

あのドラ○ンボールのセ○とあの恋○十無双のあの魔神さんとの世界のゼムナスさんが共演してた…

恐かった…いや、マジで…本気で恐かった…。

ベットから降りて毎朝恒例の便所へ行き、しばらく踏ん張る。

ジャ〜

うん、今日は長かった。長い長い永い永井名我る戦いだつた。

そして、俺はいつも通り着替え…と、ここで俺はドアに…

ボタン

ア「レイ>ボタン！<ちよっ！レイト！！」

アクアがドアを開けてきたと同時に俺はドアを閉めた。

何故かいつもアクアが朝食の知らせにくる。それはいい。いいのだが…

ア「ちよっと！なんでいきなり閉めるのよ！早く開けなさい！」

零「無理言つな！！今俺がどういう状況なのか分かるのか？着替えてる真つ最中だぞ！」

ア「そ、それなら早く言いなさいよ！／＼／＼」

零「ってかなんでいきなり入ってくる！そして言ったよな！？入る前にノックをしろと！ここ最近全てノックせずに入ってそして着替えてる姿を見られてしま…というより、なんでいつも着替えてる時に入ってくるの！？あり得ないでしょ！なんかストーリーカー行為でもしてるのか！？」

そうなんです。

今の会話のようにいつもいつもこのタイミングでしかも“必ず”入ってくるんだよ…“偶然”から“必ず”に変わるよ…いつもやられちゃってるから…そして俺は防衛が成功した。

ボタン！！

テ「…ついに襲いにかかったか…(ヒソヒソ)」

ヴ「アクア、多分心の準備が出来てなかったから襲わず叫んだんだと思う…(ヒソヒソ)」

ア「聞こえてるわよ！／＼わざとじゃないんだからしょうがないじゃない！／＼／」

今は朝食タイムです。

またいつものメンバーで食事を楽しんでいます。

てか、アクアが地獄耳になってきてるな。俺にはあの二人のヒソヒソ話が聞こえない。ただわかったことがアクアと騒ぎがあった時に良く話してる。ま、多分馬鹿にしていることじゃないし、アクアをおちよくってるかなんかだろう。あれ？けどそれならなんで面と向かって話さないんだ？

けどアクアの反応をみるかぎりおちよくられてるように見えるが…。

エ「レイトよ。」

そこでエラクウスが話しかけてくる。アクア達はギャーピーーギャーピーー騒いでる。きにしないで良いな。

零「ん？どした？」

エ「ラクウスは口を静かに開く。」

エ「すまないが、少し頼み事がある。」

またか。どうせ勝負とかなんちゃらだろ？

エ「いや、今回は違う。私はそのような戦い好きではない。」

零「いや、戦い好きだろ。というか、人の心をよむなよ……」

エ「それで今回は……」

しかとですか。はい、そうですね。所詮俺はこんなもんですよ。(

……)

エ「客人が来る。その目的はレイトと話がしたいそうだ。」

なんだ、そんなもんか。

このときはまだわからなかった。それが素晴らしい死亡フラグ(？)が立つことを。

零「で、そいつはだれ？」

エ「……マスター・ゼアノートだ。」

……。

零「……………」

エ「……………」

虚しい沈黙が続き、それをかちわるかのように俺は……

零「人生オ〜ワ〜タ〜 \ (^ o ^) /」

…狂いました。

流石のアクア、テラ、ヴェントスも零斗を止めにかかる。

しかし

エ「どうしたのだ！？しっかりするのだ！」

零「かるかるかるかるかる…」

ヴ「レイト！レイト！！」

零「Summerはグリコに限る。(・・・)(+」

ア「レイト！目を覚まして！」

零「ペポラピプバペ！」

悲しいことに誰も俺を止められなかった。

さらに

??「…僕にあうのがそんなに嫌じゃったか？」

そこにはマスター・ゼアノートが既にいた。

ゼア「…エラクウスよ、さすがに傷つくぞ。」

エ「レイトー!!」

一時間経過。

やっと俺の暴走がおさまった。ゼアノートも俺の暴走をおさえるのに手を貸したらしい。

そして皆は鍛練を始めていて邪魔にならないように俺とゼアノートは場所を移動して庭にいる。

零「それで、お前がゼアノートか。先程はすまない。」

ゼア「いや、いいのだ。そもそもここに異世界とやらから来た者がおると聞いて会いにきたのは僕のほう。それに、こちらが悪かった。」

正直、あまり話したくはない。どうせ、闇がなんちゃらで印象を良くしようとかなんちゃらだろうな。

会話はちゃんと答えている様で実は余り良く思っていない話し方で対応した。

（ゼアノートside）

…不思議な奴…

その言葉一言で言い表せる。

レイトとか言った。そいつは普通に会話しているように見えて事実、僕を嫌っている。

やつの瞳は、まるでこれからおこる“全て”を知っているようだ。

更に付け加えれば奴の心が不気味だ。

奴は、奴の心は“一般的”な心だ。

光もあり、闇もある。だが、大抵の奴は闇にうぼれたりする。怒り、憎しみ、欲望…そして人はそれが徐々に大きくなり、闇にのまれる。

だが、奴は違う。一般的だが一般的ではない。

光と闇の両立、まさにこの光と闇の関係が崩れることがないかのような心…

その気になれば闇にのまれることもなく、闇を扱えるかもしれない。あと一つ、奴しか持っていないものがある。奴は本当に人か？何故かやつを見ているとそう思う。

何百年も行き続けている様な存在だ。歳を重ねる程力をつけてくる。そんな感じがする。

…とりあえず試すか。

（ゼアノートend）

…何かの力を感じる。

ゼアノートからか？多分奴は俺を試す気だろうな。

この闇の力…成る程、ハートレスか。

闇の心に染まった存在ってどこか。

闇を操れるのならばハートレスを操れて当然か。

いいだろう。俺の力、“剣を司る程度の能力”を見て絶望するがい。

すると黒く、小さい四本足で歩く？ハートレス、シャドウが出現した。

ゼア「!？」

ゼアノートは驚いたようなふりをする。演技は完璧だな。普通に見たら誰だって奴は怪しいとすら思わないだろうな。

俺は剣を出現させる。

零「…弾幕勝負の始まりだ。」

雑魚の集いだけあって群れでこつこつするんだな。呆れた。

先手をとつたのは俺だ。

零「…雑魚は何匹集まっても所詮雑魚。」

剣をシャドウの群れに次々にふりおろす。

斬られたハートレスは消滅していく。

零「悪いが、貴様らには俺の練習相手になってもらつ。」

この世界で習った魔法を使う。

零「…『フレア』。」

すると巨大な赤い弾幕が飛んでいき、シャドウの群れにあたる。爆発した反動にて周りのシャドウも消滅していく。

零「…終わったのか？」

剣をおさめようとした時、またゼアノートから闇の魔力が感じられた。

すると、現れたのは俺の影だった。

あの戦闘をしていた時の武器を構えていた。

零「…少し抵抗感があるが、やるか。」

そして俺は本格的に戦闘を行うことにした。

零「…さあ、避けられるか？」

俺は空中に浮く。

すると影も浮いてくる。うざったい。

魔法の練習をしていたので弾幕も上手く使えるかもしれない。

俺は黒い弾幕を放つ。

ここに来た時より断然良かった。隙はなくすることはできていた。

が、影は避けている。うざったい、ああうざったい。

影は俺に近づき、無理矢理剣を俺にふりおろした。

当然の如く攻撃を防いだら。どうやら俺の力を三割…二割程度真似ているのだろう。

避けるのは随分出来ている。ならば…

俺は影を弾きとばし、距離をおく。

零「…慌てる、『重なりし絶望』。」

剣を一本投げつける。そして俺の剣は、二本、四本、八本…と増えていき、相手を追い込む。

影は焦っているのか、だが避けていることは避けている。

剣を消滅させ、背後に移動する。あれは見せかけで、別に当てても良かったが、なんとなくあれが出したい気分だった。

零「…おもしろい、『ブレードマスター』。」

手をかざすと一直線に大量の剣が出現し、影に当たる。

影は剣によって遠くへ押されてそして地面に倒れた。そして追い討ちの如く一直線につながっている剣を操り、影へ飛ばす。

俺の能力で剣をあやつり、影にぶつかる剣が爆発していく。

影は倒せたが、向こう側をみると巨大クレーターが…やっちゃった。

ゼア「(。(。:(」

ゼアノートは果てしなくびびっていた。

零「ゼアノート？終わったぞ。」

ゼア「(。(。:(」

…駄目だこりゃ。

ゼア「はっ!?!」

やっと意識が戻ったゼアノート。少しビビらせるつもりだったんだがな…。

ゼア「い、いやぁ実に素晴らしい戦い…儂の手を出す前にかたずいてしまった…。」

絶対嘘だ。もう嘘とわかりきっているがとりあえずわからなさそうに対応するか。

零「そりゃどうも。で、用とはなんだ？」

ゼア「いや、異世界から来た奴はどんな奴か見たかったただけだ。今日は帰らせてもらおう。」

ゼアノートが階段を降りていく。俺はゼアノートにぎりぎり聞こえる程度に話す。

零「…余計なことはするなよ。」

ゼア「!?!」

ゼアノートは振り向いてきたが、俺の方から今度は去るようつにエラクウスの元に去った。

絆、結ばれる（前書き）

更新遅くなりました。すんません。あまり自信ありませんが、ご覧
ください。

絆、結ばれる

零「……………」。

俺は今、ベッドの上に寝転がっている。窓から夜空を見ている。

零「……………フラン。」

ポオーツとしているとどうしても前の世界の事を思い出してしまう。

フレンドール・スカーレット、今の俺なら少し、君の気持ちがわかる気がする。

俺は彼女と同じで、能力故に拒まれた。だが、俺はまだましな方だな。

彼女は俺と違って閉じ込められていた。まだ俺は幸せな方だな。

…止めよう、前の世界の事を考えるのは止めよう。だが、なんだか気持ちもやもやするな。

……………。

雲ひとつなく、星が数倍輝いて見える。

ん？流れ星か…。

丁度いいや。気晴らしだ。外にでて流れ星でも見に行くか。

すこし風通しがいいな。結構涼しい。

丘に向かおうと階段をおりていったらヴェンが走って更に下の階段を駆けおりていくのが見えた。

多分ヴェンも流れ星かな。

しかし流れ星多すぎない？綺麗だから許すけど…やっぱり不思議だな。

階段をおりていき、遊び場らしき広場を空を眺めながらゆっくり歩いて目的地へ向かった。

目的地についたら既に先客がいた。ヴェンは勿論、テラもアクアもいた。

3人は夜空を見上げており、俺の存在に気付いていないみたいだった。

零「三人も夜空が目的かい？」

三人は座っており、その後ろに俺は立ち止まり、声をかけた。

ヴ「あ、レイト。レイトも流れ星を見に来たのか？」

三人は振り向いてきた。

零「ああ、まあな。窓を眺めてたら丁度流れ星が見えたからな。」

ア「どう？この世界の星空は。」

アクアが聞いてくる。

零「こんな星空は初めてだな。とくに流れ星が。」

ア「ふふふ。」

アクアが軽く微笑む。本当にアクアってこんなキャラだったか？

ヴ「いよいよ明日だね。」

明日？なんかの集会か？

零「なあ、明日ってなんかあったっけ？」

テ「レイト知らなかったのか？明日は俺とアクアのキーブレードマスターの承認試験だ。」

あ！忘れてた。そうだったそうだった。

零「ごめん、忘れてたわ。じゃあ見に行かなくちゃな。」

ヴ「じゃあ一緒に応援しに行こうか！」

零「そうだな。特にテラ、お前はうからなくちゃだめだぞ！なんつったってうかってもらわなくちゃ俺が教えたかいが無いからな！期待してるぞ！！」

テ「ああ、任せろ！！」

しばらく俺達の雑談が続いた。

この時間、凄く楽しいな。本当に何年ぶりだ？ただの（？）人間と話したのはな。もやもやが消えるというか…人間に恐れられないなんてな。

ア「そうだ。忘れちゃいけないから…。」

アクアがいきなり立ち上がり、ポケットをあさる。

ア「さっき話したように明日はテラと私の承認試験でしょ？」

そして取り出したのが…

ア「お守り作ってきたの。」

四つの星の形をした…なんだろう、花？いや、やっぱり星であってるのか？

その飾り物らしき物は青、緑、オレンジ…かな？そして…銀色。

そしてテラ、ヴェン、俺という順番で立ち上がる。

テラにオレンジ色、ヴェンには緑色が渡された。

ヴ「俺にもくれるの？」

ヴェンは驚いてアクアに聞く。

ア「勿論。それと、レイトにも。」

俺は銀色が渡された。このかざりは…たしか…

零「アクア、俺にもか？」

ア「うふふ…当然よ。貴方だけ渡さないなんて何処の意地悪さんよ。」

笑いながらアクアは答える。結構嬉しいな。

本当に感謝の気持ちをこめて

零「アクア、ありがとう」ニコッ。

満面の笑みで答える。

ア「…／／／」

アクアが赤い顔をして俯く。照れてるのかな？

零「とりあえず、みんなおそろいだな。」

銀色の飾り物を手に持って前にだす。

ヴェン、テラ、アクアもそれと同時にそれぞれの飾り物を前にだす。

零「…こうして改めて見ると本当に綺麗だな。」

テ「そうだな。…くく。」

テラが笑いを堪えながら話す。

零「ちょっと待てよ！なんで笑い堪えてんだよ！」

テ「だってな…くく…レイトの口からその…綺麗だななんて…」

ヴ「確かに…はははは。」

それにつられてヴェンも笑いだす。おい、結構傷つくぞ。

零「それよりさ、なんでこの形にしたんだ？」

話をそらさせ、アクアにたずねた。

ア「それは、この世界の何処かに星形の実をつける木があって、その実はつながりの契りになるんだって。そして、その実を貝殻で模したお守りを持っていると、例え離ればなれになっても必ず再会できるらしいの。」

成る程、つまりパオプの実に似せて作ったんだな。

ア「本物の材料は手に入らないからそれっぽく作ってみただけなんだけどね。」

へえ？しかしいいきだな。パオプの実よりもこっちの方が俺はいいいな。

テ「そういうところは女の子なんだな。」

からかいなのか、ま、そうでなきゃあり得ないな。ってか、そういうところって、こっちはまだ可愛い方じゃん。あっちなんて戦える奴がたいてい女だぞ？あ、あっちって東方の世界のことだぞ。

ア「そういつとこってなんなのよ？ねえ、レイトは違つよね？」

零「俺は普通に可愛い女の子に見えるが。」

ア「か、可愛い…／＼／」

ありゃ、俯いちゃった。そんなに嬉しかったか？

テ「レイトって本当に鈍感だな。はっはっはっは。」

笑いながら俺に話してくる。鈍感？別に鈍くないぞ、俺は。いつも鍛えてるし。

ヴ「…本物じゃないと効果ないの？」

ヴェンが話しかけてくる。不安そうに。

ア「うーん、効果はまだわからないけど魔法をかけておいたよ。」

ヴ「え！？どんな？」

ヴェンがくいついてくる。まったく、俺は一応わかったぞ。その魔法。

ア・零「「繋がり」だよ（だろ）。」「

俺とアクアの声が重なる。テラはよくわかったなって顔で見ってくる。

そしてしばらく俺らはそれぞれのお守りを見つめ、沈黙の時間が続

く。

そこを割るように俺は語り始める。

零「繋がりか…ってことは、“繋がりのお守り”だな。」

ア「そうね。…うん、いい名前だね。」

テ「名前つけるセンスもあつたんだな。」

ヴ「繋がり、か。」

アクア、テラ、ヴェンと続く。おいちよつとまで、テラさんよ、何故そこまで意外そうな顔してんだよ。

零「あ、そういえばこの形の木の実は、一応知ってるぞ。」

ヴ「え！？どんな実なの！？」

ア「私も気になる。」

テ「で、どんな実なんだ？」

約一名、かぶりつき度がハンパないな。

零「その木の実はパオプの実って言って、その木の実はアクアの言つた様に星形なんだ。その実を二人で食べあわせると、その二人は例えどんなに離れていてもいつか必ず結ばれる。そんな感じだな。」

ヴ「へ？さつき言ってた二人って…。」

零「ああ、正解。恋人同士が食べさせあったりするな。」

ア「こ、恋人…／＼／」

ほら、アクアってこんなに女らしい。恋人に憧れて頼った真っ赤にして俯いてる。

零「な？アクアも女の子だろ？」

テ「…どこまで鈍感なんだよ…。」

呆れてなんか言うテラ。別に気にしないけどな。

ヴ「だったら、このお守りの意味も少し違ってくるんじゃないか？」

零「そんなことはない。アクアが俺達の心の絆、親友の証として作ってくれたんだから。」

ヴェンの質問に答える。

テ「親友、か。そうだな。俺達は親友だな。」

ア「うふふ、そうね。」

零「まさに“繋がりのお守り”だな。」

俺は銀色に輝くお守りを上に掲げる。

それに続き、ヴェン、テラ、アクアもお守りを上に掲げる。

この瞬間、俺はこの世界で初めての親友ができたのであった。

おまけ

部屋に戻り、今とても大変な戦いを繰り広げている。

トイレで。

零「ううううう…腹冷えた…畜生。」

グギユルギユル

零「うう…!?マジで危ない…なにか食ったわけでもないのに…出

すもん全て出したのにまだ腹いてえ……てか、何故腹鳴る？おっと、今はそんなこと……」

グギユルギユル

零「うっうっうっ！！」

旅立ち（前書き）

最後の方が少し雑になってしまったと思いますが、ご覧ください。

旅立ち

朝日が窓からさしこんでくる。

目が覚め、ベッドからおきる。

さて、今日も素晴らしい一日が始まる。今日もいつちよ頑張るか。

とその前に、朝の始まりはいつも…

トイレから。

ジャ〜

やっぱり爽やかな俺は無理だな。どうやっても朝の爽やかさを出してもトイレで全てがぶち壊れる。はあ、やっぱり向いてないのかね。うん、俺は気にしないがな。うん、気にしない。

さて、今日は遂にあの二人のマスター承認試験だな。原作だとアクアのみだが、俺が稽古つけてやったから多分大丈夫だろう。

そして試験会場（？）へとむかった。

なんかスキップしすぎだな、今回。

只今ヴェンと一緒に試験会場らしい、玉座…っていうのかな？とにかく、それがあある部屋の隅っこに立って、その中央にテラとアクアがいる。

玉座（？）にはエラクウスとゼアノートが座っている。俺は一応原

作知ってるが、俺というイレギュラーがいるからどうなるかわからない。多分俺が加わって原作にはそるようになってると思うが…。

ヴ「レイト、テラとアクア大丈夫かな？」

ヴェンがソワソワしながら俺に話しかけてくる。余程心配なんだろうな。ってか、普通逆じゃね？テラとアクアが普通ソワソワする方じゃね？ま、そんなことじゃ試験うけるまえから悲しい結果になるのはわかってるんだろうけどな。

零「ヴェン、あのふたりなら大丈夫だ。俺達で修行したじゃんかな。」

ヴ「…ああ、そうだよな。そうだよな。そうだよな？」

…：「どれだけ心配なんだよ…繰り返し言葉を使うし、最後までなぜ疑問？」

零「ほら、始まるぞ。」

エ「ラクウスが玉座(?)から立ち上がり、テラ、アクアに近づく。」

エ「…これより、マスター承認試験を行う。」

玉座の近くには三段程度のわずかな段差がある。アクア、テラは上にいるエラクウスを軽く見上げてこれから言うことの話しを真剣に聞く。

エ「此度は候補者が二人であるが、いずれかの優劣を問うものに非ず。」

……ん？あ！マジか！？今思い出した！俺のやり方はただ単に強さを上げるだけだった！そうだった！

あるえ？てことは俺が二人とやった稽古って…無価値？いや、価値はあるだろうな。けど、あまり必要じゃないだけだ。マスターになったら強さは必要だからな。うん、そうだ。無価値はない。

エ「キーブレードに選ばれし者としての心のありようが試されるものである。この久しい若きマスターの誕生に際し、幸いな事に遠方よりマスター・ゼアノートが足を運んでくれた。」

幸い？不幸の間違いだろ？原作知識という言葉は何回も使いたくないが、これでゼアノートがいるいる邪魔すんだよな。いや、邪魔っていうのかな？ま、とにかく邪魔してくるんだ。

ゼアノートが軽くお辞儀をする。そして、本当に軽くだが俺のことをチラッと見た。

俺って魅力的？

いや、冗談はよそう。多分警戒かなんかだろう。あんなこと言ったんだかな。

エ「二人とも心して臨むように。」

テ・ア「はい。」

これは緊張するな。今ならヴェンの気持ちも分かる気がする。

エ「では始めるとしよう。」

エラクウスはキーブレードを出現させ、構える。

そしてキーブレードに魔力を送り、光の玉をいくつか出す。

テラとアクアもそれぞれのキーブレードを構え、戦闘体勢をとる。
というか、なんで三人は武器を自分の体より後ろで構えるんだろう
…テラとアクアは構えが似ている。というか、三人の中で計算して
戦うってアクアしかないかも。

それとヴェンってなんで逆手持ち？いや、別にいいんだけどせめて
体より前に構えればいいのになんで後ろ？隙がありすぎだよな。

さて、俺の感想はともかく、試験が始まった。

しかし、やはりと言うべきか、ゼアノートから魔力が感じられる。
部類は闇。闇の魔力を光に送り込んでるのがわかる。

さてさて、どうなるか…。

光の玉が暴走を始める。

テラとアクアは一瞬戸惑ったが、光の玉をそれぞれまず一つと撃破
する。

すると光の玉が俺とヴェンにも向かってくる。

ア・テ「ヴェン！レイト！」

ヴェンもキーブレードを構える。さて、俺もいつも使っている剣を

ですか。つつても、普通の剣がな。いや、今回は長剣にしよう。

俺は右手に深紅に染まった長剣を出現させた。

ヴ「はあああ！」

向かってくる光の玉をヴェンも撃破する。

零「…雑魚。」

俺は素早く動き、とりあえずヴェンと俺に集まってきた光の玉を撃破させる。

ヴ「俺達の事なら大丈夫。」

本当に大丈夫か？

零「テラ、アクア。今は試験中だぜ？とにかくヴェンは俺が守るから平気だ。」

ア「でも、ここにいたら危ないわ！部屋に戻って待ってて！」

はあ、俺って意外に弱い様に見られてる？いや、それはないな。

ヴ「嫌だ！俺は楽しみにしてたんだぞ！テラとアクアがマスターになるのを、この目で見届けたいんだ！」

まあまあだな。なかなかいい台詞だったぞ。

テ「ヴェンなら大丈夫だ。俺達と一緒に修行してきたんだからな。」

ヴ「うん！」

テラとヴェンの会話：そして、俺が出てこない。畜生。いつそのこと、この光の玉全部俺が殺ろうか？いや、駄目だな。止めとこご。

零「大丈夫だっていったろ？それとも、俺の言った言葉、嘘に聞こえたか？」

テ「そうだな。ヴェンは確実に言って良いほど安全だったことを忘れてたな。」

テラは若干笑いながら俺に話す。

零「さあ、お喋りはここまでだ。くるぞ！」

それと同時に光の玉が襲いかかる。

テラとアクアは光をほぼ順調に倒していく。

問題は…

ヴ「あああ！うりやあああ！」

ヴェンだ。いくらなんでも突っ込み過ぎだ。キーブレードを振り回し。光の玉を切り裂いてく。一応技と速さがうりなヴェン。だが、やっぱりまだまだ未熟。

ヴ「うわっ！？」

どうやらステップ踏むときにちょっとつまずいたらしい。ヴェンはこけて、それを好機と言わんばかりに突っ込む光の玉。

零「ヴェンに触れるなよ？」

ヴェンを囲んだ光の玉を斬り裂く。手応え無さすぎる。抵抗を見せるよ。

零「突っ込み過ぎだ、少しは自重しろ。」

ヴ「ご、ごめん。」

ヴェンは俯き、自分の失態にきずいたようだ。

俺は手をさしのべる。

零「ほら、早く立て。試験、最後まで見たいんだろ？」

ヴ「ああ。」

ヴェンは俺の手を素直に受け取る。立ち上がり、そして光の玉とまた戦った。

あれから数十分経過、光の玉は完全に無くなった。

俺とヴェンは元の配置き戻って、テラとアクアを見る。

テラとアクアも元の配置に戻り、次の指示を待つ。

するとエラクウスが話し始める。

エ「不測の事態であったが、いかなる状況においても心を平穩に保てるかを試すいい機会であった故、あえて止めなかった。…試験を続けるでしょう。」

エラクウス、結構考えてるな。さて、次はなんなのかな？

エラクウスは配置を指示し、次の試験の説明をする。

エ「次に、テラ、アクアの二人の立候補者同士の模擬戦を見せてもらう。勝敗は問わず。能力がきつ抗する相手と相対した時こそ、心は浮き彫りになるのだ。」

テラとアクアは互いに構える。

エ「…始め！」

二人は一気に駆け出し、キープレードを交える。

テラはどちらかと言うと野生本能的な戦い方をする。とにかく、強大な力でねじ伏せる。

一方アクアは相手の動きを読み、力が無い分、勢いを利用して戦ったりさせる。つまり、今やりあっている戦いは空手と合気道が戦ってる様なもの。

確かにテラは強い。だが、強いだけだ。本当に力任せの戦いなら多分勝てるだろう。

そして今の状況はテラが連撃を出す、アクアは避けたり勢いをそよぶような感じで防ぐ。そしてわずかな隙をつく。

今度はテラが押され始める。

テ「ぐ！」

アクアは勢いにのり、ヴェン程ではないが素早い動きでテラに攻める。

そしてこれは無理だと判断したのか、いったん距離をとる。

少し焦ったのか、テラは自分の拳を少し見て、再びアクアとぶつかる。

しかし何故拳を？あ、心がなんちゃらってやつか。ついつい俺は戦いに夢中になっちまってそこをよむのを忘れてた。

しばらくし、そして試験が終了した。

少し訂正があった。先程の空手と合気道ってやつ、流石に言い過ぎた。

そしてまた再びテラ、アクアは元の配置に戻り、結果を待つ。

エ「承認試験の結果を伝える。」

この瞬間、なんか静電気が身体にはしつたような、ピリピリした感覚が…。

エ「テラ、アクアともに優秀であったが、此度は、アクアをマスタ―として承認する。」

ガビン！まではいかないか。まあ驚き程度だろう。テラは悔しいのか悲しいのかわからない顔をしている。

エ「テラは心の闇を制御する力が不十分であると判断した。」

成程、あの模擬戦でテラのとつた不思議な行動（つっても自分の拳を見ただけだが…）が闇がどうたらこうたらだったのか。

エ「更なる修行と精進に期待する、以上だ。」

テラ、多分相当心に傷ついた様だな。

エ「アクアはキーブレードマスターとしての心得を伝える故、しばしここで待つように。」

マスターの二人が去っていく。

それと同時に俺、ヴェン、アクアがテラに駆け寄る。

ア「テラ…。」

ヴ「俺は、テラも…。」

零「……。」

話せない、今では何を言ってもテラの心に傷つけるだけだ。

テ「俺の心に…闇…。」

しばらく沈黙が続く。

そして…

テ「すまない、一人にしてくれ。」

テラはこの場を去った。

ア「………。」

ヴ「………。」

こちらもこちらでなんか嫌な空気が流れる。

零「アクア、まずは試験合格おめでとう。」

ア「…私一人がなっても……。」

だよなあ。仕方がない事なんだが…。

アクアの肩に手をおく。

零「まずは自分の事に集中しろ。アクア、テラは俺が何とかする。」

そついい、テラが向かった庭へと駆け出した。

〈テラ side〉

…俺の心に闇があるだと？

俺はマスター承認試験のあと、ついムカツときてしまい、今、庭の階段に腰を下ろしている。

…闇がある、だからなんだっていうんだ！

俺は異世界からきたとても強い親友、レイトからにも戦い方を教わってきた…

テ「…俺には心の闇に負けない力がある。」

??「そつだ。」

声に軽く出してしまった。だが、それに反応する様に…

マスター・ゼアノートが返答してきた。

振り向き、マスター・ゼアノートを見る。

ゼア「お前には力がある。」

マスター・ゼアノートが階段をおりてきて、俺のところにくる。

ゼア「闇を恐れる必要はない。」

テ「マスター・ゼアノート…。」

改めて認識し、声に出してしまった。

ゼア「だが、エラクウスは決して闇を認めない。」

確かに…そうだ。

ゼア「このままエラクウスの元で修行を続けてもマスターになれるかどうか…。」

テ「教えて下さい！マスター・ゼアノート！俺は何を学べば良いのですか？」

声を出してしまった。俺は感じた。この人は、俺の力をどう扱えば良いか知っている。そう感じた。だから俺は知りたくなり、マスター・ゼアノートにたずねた。

ゼア「…そのままが良い。」

だが、返ってきたのはこの言葉。俺が期待していた言葉と全く違った。

ゼア「心の闇を消すのではなく、力で制するのだ。」

マスター・ゼアノートは俺のもとを通りすぎ、歩きながらも話す。

テ「はい、マスター・ゼアノート。」

それと同時に鐘が鳴った。なにがあったのかと急いで俺は城へ戻った。

〈テラend〉

……ゼアノート、あれほど余計なことするなと言ったのに……。

俺はテラを追い、外にでたらテラとゼアノートがいた。そして話し終わった後、鐘が鳴った。テラは階段をかけたのぼり、ゼアノートは闇の空間を開いて去っていった。

はあ、便利そうだね、それ。確か闇の回路とかいったかな。

テ「!? レイト!?!」

テラは俺の存在に気付きつついうか、隣にいるんだけどね。

テ「なにかあったのか!?!」

多分鐘のことかな。

零「さあ、わからん。とりあえず中に行こうか。」

そして俺とテラは城の中に入っていった。

試験会場だった場所にアクアがいた。

俺達はアクアにかけより、聞く。

零「なにかあったのか？」

ア「わからない…。」

はい、即答。こん畜生。

ア「…ヴェンは何をしているの？」

あれ？確かにいないな。どうしたんだろう…。

エ「では、私の弟子達を調査に向かわせましょう。」

エラクウスは玉座の後ろで壁と話している。遂に頭が逝ったか？いや、それはないな。多分誰かと話してるんだろうな。

エ「うむ、承知いたしました。失礼する。」

どうやら話がすんだようだ。

エラクウスが俺らのところにくる。

エ「：私の古い友人、イエン・シッドはマスターからも身を退いた後も、絶えず光と闇の動向に目を向け、我々キーブレードの使い手の進むべき道に標を与えてくれている。」

イエン・シッドって誰だっけ？ま、いつか。とりあえずそのイエン・シッドとかいう奴がいるということにしとこう。

エ「そのイエン・シッドからの報告では、光のプリンセスに脅威が迫りつつあるという。」

光のプリンセス？どこぞのハオー・ポツオーだよ…。え？聞き違い？あ、本当だ。プリンセスだった。

エ「しかも、その脅威は闇だけに非ず。言うなれば、負の感情にのみ芽生え溢れだす存在、イエン・シッドは此を生命に精通しない者、“アンヴァース”と称した。」

…動き出したか、ゼアノート。俺も旅時かな？

エ「キーブレードの使い手として、光に侵食し闇との均衡を崩そうとする脅威、アンヴァースを放つてはおけない。また、この凶事を伝えようとしたが、マスター・ゼアノートとの連絡が途絶えた。この事態と無関係だとは思いますが、嫌な予感がする。」

ゼアノート、か。あれ？結構昔にやったから忘れたよ…なんかゼアノートに引っ付いてた奴、いたよな？誰だっけ…ってか、記憶を本当に頑張っつて探ってるぞ。正直きつい。

零「つまり、俺達にこの事態の収拾に努めてもらいたい、と？」

エ「うむ。だがレイトよ、お前にも行ってもらいたいが、他の世界に行く手段がない…。」

…確かに。

零「まあ何とかなる。俺はこれでも長年生きているから闇にのまれるなんてことはないから。あと、空も一応飛べるんだぜ？だから、その手段をこの二人に…いや、見てできると思う。」

エ「…本当に大丈夫か？」

零「ああ、大丈夫だ。」

心配するのも無理はない。だって仕方ないよな。

まあ、闇の回路…想像で任せてできるかな？

確かゼアノートは魔力を集中さすてる感じがした…そして手をかざ

す。

すると、あら不思議。闇の回路ではなく、異空の回路が扱えた。

ア・テ・エ「……。」「」

まあびびるよな。そりゃ、誰にも教えてもらってないからな。え？
なんで異空の回路だつてわかったかって？なんか原作知識がだんだ
んよみがえってきたんだ。

零「ゼアノート搜索と、アンヴァース討伐だな？」

エ「あ、ああ。」

零「わかった。じゃあ行ってくる。」

そして異空の回路に足を踏み入れた。

さて、旅立ちの始まりだな。

ドワーフ・ウィンドレンド (前書き)

フラグ(?)がたったぜ!さあ、今回はちょっと…てな場面がある
かもしれないが、ご覧ください!

ドワーフ・ウッドランド

…旅立ちの地を出た俺は、今…物凄く困ってます。

はい、ちゃんとね、他の世界に着いたんだけどね、え？どうやって来たんだって？俺、一応空飛べるんだぜ？さらに異空の回路をわたったんだけど、あんまりたいしたことなかったぜ？

おっと、それはさておき、今、何故困っているかということ…。

??「あら？目が覚めた？」

…いや、何故？

俺は、誰だかわからない女の人に、膝枕してもらってます。

それも、気が付いたらですよ。

はい、はい。どうやら俺は異空の回路から出てくる時に、丁度ね、岩の目の前だったんです。

俺の飛んでる体制がね、たまたま愛と勇気だけしか友達がない孤独な孤独なア○パ○マ○の形になっていたわけで、それでね、いちよゴチーン！っと頭ぶつけてね、それで目をあけたら、ね。いや、違うんだよ。もっと早く気絶から回復してたんだよ。けどね、あまりにも気持ちよくて…って何言わすんだよ！

そんで目をあけたらね。

零「あゝ…貴女は誰でしゅか…／＼／」

か、噛んだ…恥ずかしい。畜生、一生の不覚！

??「ふふふ…私は白雪、宜しくね。」

はい、白雪…え？白雪姫??あ、そつか。キン八の世界じゃ当たり前か。

ってそこじゃねえ！

零「いやいや！あのさ、なんでこの状況なのさ!？」

白「え？貴女が気絶しているところを助けたんだけど…。」

零「いやいやいやいや！そこじゃない！今の状況だよ！ってか、貴女って、俺女じゃねえ！」

なに!?!?なんなのこの子!?!天然!?!天然なの!?!やだ!?!危ない!

白「それより、貴方は？」

零「ああ、俺は岸帛零斗だ。零斗と呼んでくれ。って違うだろ。」

白「レイト?変わった名前ね。」

零「いや違う。発音が…ってそれも違う。もう、いいや。」

はい、俺の心が折れました。

我が心が闇に…つてならないよ。

とりあえず、膝枕の状態から起き上がり、そして立ち上がる。

零「とにかく、気絶してるところを助けてくれたんだよね、有り難う。(ニコッ)」

白「…/ / /」

…何故か俺が微笑むと顔を俯くんだよ…アクアもそうだったし…。

零「さて、ねえ白雪さん、まずはここが何処か教えてくれる？」

白「あ、ここは…」

白雪さんが話そうとしていると…。

テ「レイト!？」

テラがきた…。

なんだ?なんだあの箱は?

まで、箱になにか描かれている…ハートの絵?そのハートがなにかに貫かれている…気にしても仕方ないか。

白「? レイトのお友達?」

俺がそうだと肯定しようとしたとき、俺の後ろに何かの気配…。

テ「アンヴァース!!」

テラがキープレードを出現させた。

白「きゃああああ!!」

テラの行動に白雪が驚いて、襲われるのかと思ったのか、何故か俺に抱きついてきた。

いや、白雪さん、止めてくれない?女性特有のものが当たっているんですけど…勘弁してくれ、これじゃあ戦えない…。

零「テラ、この場は頼む。ちょっと俺は戦えない状況だから。」

テ「ああ、わかった。この場は任せる!」

さて、白雪さんをどうするか…。

ち、仕方ないか。

零「白雪さん、力を抜いて。」

白「え?ひゃっ!?!?!」

いわゆるお姫様だっこだな。

そして俺は森の方へと逃げていった。

ふう、なんかあった。しかし、迷った。

考え無しに突っ込んだ俺が馬鹿だった。今さらながら後悔した。

なんか薄気味悪い森に迷ってしまった。はあ、畜生。

まず、白雪さんをおろさなくちゃね。

零「よいしょっと、大丈夫か？」

白「え、ええ…／＼／」

うっん、何故俯く必要があるんだ？ねえ、読者の皆さん、教えてくれる？なんかの前兆？

え？俺が鈍感だつて？なに言ってるんだ？いつも修行しているから鈍くないっての。ほら、いつも修行してるからなにか近付いてくるのが普通にわかる…え！？近づいてくる！？アンヴァースか！？

零「白雪さん、魔物が近付いてくるから俺から離れないでくれ。」

白「え、ええ。」

俯きモードから回復した白雪さんに話した。はい、それと同時にアンヴァースが出現。

まだ初級レベルだな。シャドウみたいな形をしたアンヴァースがいる。しかも結構な数があるな。

あ、シャドウはあのゼアノートとの面会している最中に現れたあの四本足であるく黒い奴のこと。今回はそいつが紫色に変わって登場してるみたいな感じの奴がきた。アンヴァースにも種類が沢山いるからな。まだまだこいつは雑魚。

ま、雑魚なぶん、群れで行動しているのは褒められるな。

零「白雪さん！俺から離れるな！」

俺は今回は大剣を出現させた。いや、本当に大剣だよ。だっていつも普通の、ごく一般的な剣を大きくしただけのやつだもん。

アンヴァースが俺に飛び付いてくる。可愛いねえ。今回はいっぱい遊んであげるよ。

大剣を大きく横に一振り。何匹かは地面に潜ってかわされたが、まあ一応なぎはらった。

しかし、ハートレスのシャドウみたいに軽くやられてくれないな。はあ、こいつはやっぱり小回りがきく武器にしくちな。

今度は細剣を出現させた。

この細剣は俺が作ったから特別さ。頑丈で軽い。が、やっぱり細剣だ

から力勝負じゃ打ち負ける。あ、押し負けても剣は壊れないから。素早く動き、アンヴァースを一体ずつ確実に撃破していく。やっぱり守りながら戦うのは俺に向いていない。凄く辛い。誰か助っ人に来てくれないかなあ。

??「はああああ!!」

すると見覚えのあるキーブレードをもった少年が現れた。

いや、ナイスタイミングだな、ヴェン。

ヴ「レイト、大丈夫か!？」

しかしなんでヴェンが…今はそんなこと気にしてる場合じゃないな。

零「ヴェン、いけるか?」

ヴ「勿論!俺だって戦える!」

…流石だ。

零「んじゃ、あの子の防衛を俺と一緒にしてくれないか?」

ヴ「わかった!はあああ!!」

ヴェンはキーブレードを逆手に持ち、特徴ある素早い動きでアンヴァースを斬り裂いてく。

…本物には劣るが、俺もあれで戦ってみよう。

俺はヴェンの扱うキープレードを出現させ、俺も逆手に持ち、戦つ。

…これは驚いた。普通に持つより逆手専用に使われていたみたいだ。逆手なのに素早く動け、かつ戦いやすい。

ブーメランみたいに投げてもいけるかも。

早速キープレードを投げてみた。

凄い、思った通りにとんだ。俺とヴェン、白雪さんの周りにいるアンヴァースをことごとく殲滅させた。

ヴ「…凄い、俺でもこれにはできないぞ。」

ヴェンが同じ武器で戦っている事に気付き、呆然としている。

ヴ「レイト、お前ってなに？」

いや、なんか酷い。

零「経験の差だ。」

ヴ「…確かに。」

うん、納得してくれたか。そうだ、当然だ。なんつったって、ヴェンの十倍以上生きてるからな。

零「さて、白雪さん、ここを移動するぞ。」

白「……………／／／」

ん？なにポケットとしてんだ？それより早く移動するか。

白「……………え？」

さて、白雪さんの手を掴んで移動開始。

零「ヴェン、この森の抜け道知ってるか？」

ヴ「ああ、この先に小屋がある。」

零「よし、行くか！」

白「……………／／／」

俺らはとりあえずその場を移動した。

ヴ「はぁ、はぁ、はぁ〜っきつい。」

零「だらしないな、ヴェン。その程度で疲れるなんてな。」

俺らはそのあと、ヴェンに小屋に案内され、今小屋の中にいる。

零「白雪さん、大丈夫だった？」

白「ええ、おかげさまで。ありがとう。」

さて、ここにはゼアノートの野郎はいなさそうだし、移動すつか。白雪さんはヴェンがいるからなんとかなるだろう。

零「ヴェン、俺はそろそろ行くぞ。俺も一応任務があるからね。」

ヴ「ああ、わかった。」

そして、俺は小屋を出ようとしたが…。

白「え？もう行っちゃうの？」

白雪さんがそれを止める。

ま、強引にでも行くけどな。

零「白雪さん、俺は一応仕事があるから勘弁してくれ。また、きつと会いに行くから（多分もう無いな）。」

白「…わかったわ。」

零「んじゃ、白雪さんのこと任せたぞ、ヴェン。」

ヴ「了解！」

会話が終わり、小屋を出る。

さて、次は何処の世界かね？

異空の回路を開き、この世界を去った。

キャッスル・オブ・ドリーム(前書き)

軽く訂正しました。本当にわずかなところなので、あまり気にしないでください。

キャッスル・オブ・ドリーム

零「ぐ、流石に疲れるな…。」

俺は今、異空の回路で大量の敵を相手している。鬱陶しい。

今回のアンヴァースはシェイドジェリーとかいうやつだ。特徴は群れで行動する事が多く、更に色々な色をしたやつがいる。

なんといつてもとにかくクラゲがふわふわ泳いでいる感じだ。姿はきのこで、頭の部分をふわふわと動かしながら泳ぐ。その姿はクラゲそのものだ。

頭の色が多彩で青であったり黄色であったり…確かそれで弱点が違うらしいが、そんなもの気にする価値がない。量が多すぎてそんなもの気にしている場合ではない。

体の色は白。手と足もあつた。

こいつらは魔法で戦うのはとても向いていない。かと言っても、能力を使う程のものでもない。だから弾幕で戦っている。練習ついでだし、ちょうどいい。

おかげで随分上手くなったと思う。一応レーザーらしきやつも撃てるようになった。

零「邪魔くさい…どけ！」

レーザーを放つ。よく考えたらレーザーを放つのは凄く簡単だった。

ただ弾幕を繋げて放つ。そんな感覚ですると出来る。

零「…ふう、やっと終わったか。」

随分異空の回路で時間をくってしまった。本当に。

とりあえず先を急いだ。

…どうやらついたようだ。

さて、今俺のいるのはとある誰かの一室だった。

しかし、随分とまあ粗末な部屋だ。薄暗く、部屋にはベッドと木の机、それくらいしかない。

それにしても妙だ。こんなに失礼だと思うがおんぼろのくせに、すぐちかくにあるというより俺の後ろの窓の景色は随分高い位置にあった。景色は無駄に白い王宮がある。

まあ部屋がどうかは別に気にする必要はない。それよりもっと大変な事があった。

何故…？

零「何故俺は…こんなに小さいんだ？」

何故だ、何故なんだ！また世界からの新手のいじめか！？

それで出てきたのが窓のところ。ま、落ちても別に空飛べるから問題は無いがな。

カチヤ…

ん？誰か入ってきた。何処かにかくれなくて「あれ？貴方は？」…見つかった。

零「いや、あの、それは…」

??「あら？貴方もヴェンと同じ変わった鼠なのね。」

ね、鼠？俺が？そんな真顔で言われても…傷つくぜ？

零「あの、君は？」

??「私はシンデレラって言うの。宜しくね。」

零「俺は岸帛零斗。零斗と呼んでくれ。」

シ「レイト…不思議な名前ね。」

はあ、やっぱりこの世界に俺の名前を正しく発音してくれる奴はいな

いのかねえ。

あと、何故この姿？いや、戻れるかな？多分…。

零「あ、それと俺は鼠じゃないぞ。一応人だぞ。」

シ「え？」

いや、何故驚く？あ、そうか。俺小さいからね。

シ「じゃあヴェンもそうなのかしら？」

あるえ？ヴェン？

零「シンデレラ、ヴェンも来てるのか？」

シ「ええ。来てるわよ。呼びましょうか？」

零「いや、今はいい。」

そして窓から部屋の床をめがけて飛び降り、着地する。

さて、魔力をちよといじくってなんとか戻ってみるか…。

……。

うん、駄目だな。なんらかのペナルティーか？つてか、ペナルティーはペナルティーで何に対してのペナルティーだ？

疑問は絶えないが、それよりジャックつて誰？

零「なあ、ジャックつて誰？」

シ「あ、ジャックね？ジャックは「シンデレラ！」…はあ、また呼び出し…。」

なんかシンデレラ大変そうだな。

零「シンデレラ、大変だな。こんなに綺麗なのに…。」

シ「え？今、なんて言った？」

え？そんなに疑問？

零「いや、綺麗だなんて…言ったただけだが？」

シ「……／／／」

あれ？恥ずかしかったのか？綺麗つて充分本音なんだが…服装は仕方ない。なんか奴隷みたいな扱いされてるみたいだった。

シ「そ、それじゃあ行くわ／／／」

シンデレラは顔を赤くして部屋を出た。

まあ初めて言われたからそうとう照れていたのだろう。なんにせあの姿だ。あの姿では綺麗って言われるのが珍しい…かも。けど整った顔に白い肌…女性の中ではかなり綺麗な方…なのかな？

うん、やっぱり良くわからん。とにかく、綺麗な方だ。うん、専門家みたいなこと言ってすみませんでした。

??」「……」

ん？微妙だがこれは…ヴェンの声？それっぽい声が聞こえたな。駆けつけてみるか。

くヴェンsideく

俺はこの世界に来て、シンデレラに会った。

だが、この世界にいたら俺は小さくなっていた。しかも、檻の中にいた。

檻の中から出してくれたのがシンデレラ。シンデレラは俺の事を鼠と勘違いしてるみたいだけど、まあ別にいいか。

そこでこの世界（？）の事を教えてくれたのが鼠のジャックだ。

そのあと、シンデレラはもの凄く大変な生活をしているみたいだった。そして今日は王宮で舞踏会があるらしい。シンデレラもそれに参加したいが、どうやら行くことが難しい。

シンデレラを雇っている(?)トレメイン夫人という人がシンデレラを舞踏会へつれて行かせないため、シンデレラには衣装を作らせ、それが完成したのならば行っても良いという条件を出した。トレメイン夫人は、シンデレラにわざと用事を押し付けて、衣装を完成させることを拒ませる。

そこで、俺とジャックはシンデレラの衣装を作ろうと提案して、衣装作りをしている。

大分完成してきた。あとは、衣装に真珠の玉をつければ完成。だが、この一つがとても大変なところにあった。

今俺はその真珠のある一室にいるんだが、それが丁度良く、この家で飼われているルシファーという猫の目の前にあった。

今、俺は机の足の部分に隠れている。

これさえとれば、シンデレラも舞踏会に出られる。

俺は勇気をふりしぼり、真珠のもとへと歩き出した。

～ヴェンend～

しかし、いい気分じゃないな。なんにせ鼠のつくっただろう穴を通ってるんだからな…。

声のした方へ駆けていくが、出口付近でなんか服を着て二本足で立っている鼠がいた。

もしかして、こいつがジャックとかいうやつか？

零「あの〜」

するとびっくりしたのが、すこし焦った様に振り向いてきた。

零「あのさ、君がジャックか？俺は岸帛零斗っていうんだ。宜しく。」

ジャ「ああ、よろしくってそんなこととしてう場合じゃない！ヴェンを助けてやってくれ！」

ヴェン？やはりそうか。うっすらやられている声が聞こえたが…助けに行くか。

〜ヴェンside〜

く、やっぱり無理なのか…。

身体が小さくなってから猫…確かルシファーだった。その猫に苦戦している。

ヴ「…ぐー！」

強い…少しの油断で攻撃を受けてしまった。身体が思うように動か

ない。

ルシファーが鋭い爪をたてて、とどめと言わんばかりに爪を振りお
らしてくる。

もう駄目だ…そう思ったときだ。

??「俺の親友に…手(?)を出すなあああ!!!!」

そこには俺の親友、異世界からきた親友、レイトがいた。

「ヴェンend」

零「俺の親友に…手を出すなあああ!!!!」

ヴェンが猫に苦戦していた。普段ならだらしがないというのが、ヴェ
ンも弱体化しちまつてるから今回は文句は言わない事にした。

振りおろそうとした爪を、俺は刃のついてない大剣を出現させて受
け止めた。

だって、飼い猫を殺すのも気がひける。しかも、刃のついてる剣で
戦うと死には至らせなくとも傷はつく。多分この主はシンデレラ
のせいだと決めつけるだろう。

手を出すなあああって叫んだけど、手じゃなくて爪だねwww

おっと、今はそんなことはどうでもいいか。

零「ヴェン！大丈夫か！？」

ヴ「レ、レイト！？」

だからレイトじゃ…そうだ、気にしない事にしたんだった。

零「とにかく、ヴェンはあの鼠のところへ！」

ヴ「あの鼠…ジャックの事だな、分かった。」

ふうん…やっぱあの鼠はジャックっていいのか…。

おっと、今は猫だ。猫の相手をしよう。

猫は俺に標的を定めたのか、威圧のつもりか？可愛いもんだな。

猫は突っ込んできて、突進をしてくる。

身体の小ささを生かして猫の足へ走りこみ、回避する。

猫さん、ビビったのか？速さにビビったのか？猫の動きが止まり、

俺と猫の睨み合い。

殺気…雑魚と同等。いや、それ以下。俺の身体は小さかろうと所詮相手はただの猫。しかも飼われているため、野生よりも鈍い。

俺は空中へ飛び、猫の目線のとこれで止まる。猫もビビったのか、少し驚いたのか、少し怯んでいる様に見える。まったく、だらしな

いなあ。

隙ができたのでいきなり距離をつめ、大剣(?)を猫に振った。

いきなりのことだったのか、対応しきれずに猫は飛ばされる。

猫は壁にあたり、倒れる。ダメージはでかいか?ま、いいか。猫は立ち上がり、再び俺を睨む。俺はそれに対応し、殺気を出して睨み付けた。

零「…去れ。」

これがとどめとなった。猫は自分では敵わないと見て撤退していく。

猫は倒した。さて、ヴェンのところへ行くか。

さてと、ヴェンのところに行くのはいいんだが…なんだこの光の玉は?

鼠がつくった通路にいるが、そこにあら不思議、話す謎の光が俺の目の前に!

零「それで、お前はいつたい誰なんだ?」

だがさっきからこいつ、俺にどうしろと頼みこむばかり。半分強制で。

内容は、シンデレラと一緒に王宮までついて行って欲しいとのこと。いや、別にいいんだよ。けど、一方的に話を進めるんだよ、こいつ。??「これは失礼したわ、私は妖精。夢をあきらめない人の前に現れるようせい。」

いや、わかったから。俺は名前を聞きたいんだけど…。

零「はいはい。妖精は数多く見てきているから驚いてやんない。それより名前は？俺は岸帛零斗。」

??「レイト…不思議な名前ね。私はフェアリー・ゴッドマザー。フェアリーと呼んで。」

零「わかった。それと、その頼みは引き受けてもいいんだが、まずこの身体をどうにかしてくれ。小さいのは勘弁だよ、もう。」

この身体でついていくのは避けたい。なんつったって、今の俺はかなり弱い。猫は倒せても、外にアンヴァースがいたらまず負ける。一対一ならなんとかなるけど、一対多は無理だ。

フ「わかったわ。では目を閉じて。」

俺は目を閉じる。すると光に包まれてく感覚に陥る。

しばらくすると、その不思議な感覚はなくなった。目をあけると周りは森だった。そして、よくわからない人も1人。

??「よくわからないとはなによ、さっき話してたじゃない。フェア

アリーよ。」

あ、さっきの光の玉の正体か。しかし、まあ不思議な格好だな。なんか魔法使いがきそうな服をきている。色は青。そして杖を左手に持っている。わお、左ききかい。

零「それで、何をすればいいの？」

フ「とりあえず、この先の広場で待ってて。あ、来たわ、シンデレラ。」

ありゃ、本当だ。ってことは、待つ必要性がなくなった。ってか、こいつ、かなり計画的。

うわ…ちょっと俺見ていい場面？シンデレラ、なんか不細工面のおばさん三人に服を破られてる…見ていいの？不味くね？あ、おばさんはどっか行った。

フ「さて、行ってあげて。」

はいはい、わかりました。こいつ、かなり計画的。

シンデレラはショックで木のベンチで泣いている。

俺はシンデレラのところへ行った。さて、慰めるか。

シンデレラの背中に手をのっける。

すると、シンデレラはこっちに振り向いた。

シ「……誰？」

あれ？わかんない？ちょっとショック。

シ「…レイト？」

あ、わかってくれたみたい。おじさん、嬉しいよ。

一応この世界では随分年寄りです。ですが、見た目は超がつく程若いんです。けど幼くはない。

零「ああ、そうだよ。鼠じゃないぞ、ちゃんとした人だ。もとの姿に戻っただけだ。」

シ「……（ポ／／／）」

ん？顔になんかついてるのか？そんな見つめて…何故？

零「おゝい、シンデレラ〜？どうした？俺の顔になにかついてんのか？」

シ「……はっ！？いや、違うの！つい見惚れて…て違う違う！い、今は忘れて！／／／」

シンデレラ、もうちょいCOOLかと思ったが、違うみたいだな。

零「それにしても、酷いことするやつもいるものだな。せつかく作った服、台無しだな。」

あのババアども、マジで酷い。あ、シンデレラがみるみる悲しそうになっていく。ありやりや。

シ「ヒック……もう、舞踏会へは行けないわ……」

ここは、なんて言えばいいんだ……あ、テラ。

零「お〜い、テラ。」

テラがなんか歩いてきた。今来たばつかなのかな？つてか、なんでテラは小さくなんないの？なにこれ？この世界の新手のイジメ？イジメだよ、絶対。それが人種差別（？）だ。

テ「ああ、レイト。その子はどうしたんだ？」

俺は服を破られたまでのことをテラに話した。

テ「成程、これは酷いな。」

零「だろ？」

それより、計画的な行動の魔法使い。早くたすけるや。

零「とにかく、心を強くもて。心を強くもてば、闇にのまれる事はないし、夢が叶うチャンスもきつとくる。」

うん、我ながら素晴らしい言葉だ。見たか！これが俺の慰める言葉の全力だ！

シ「……無理よ、そんなね……できっこないわ……。」

なん……だと？馬鹿な！俺は完璧だった筈だ！ああ、そうですよ！これが俺の全力ですよ！言葉じゃ野糞級ですよ！ん？なんだよ作者！

文句あんのか？だったらためえがやってみろ！馬鹿！あ？馬鹿は俺のキーワード？ふざけた事を！ためえ、期末テストは悲しい点数ばっか…すみませんでした。

フ「心の強さも大事だけど、それだけではだめよ。」

あ、霧が出てきた。そろそろ計画的な行動が実行か？

霧はシンデレラのところに集まってくる。そして、その霧はフェアリーの身体を作っていく。

シ「もう、何も信じられないわ…何も…。」

そして、シンデレラの泣いている場所にフェアリーが出現。

フ「何もですって？嘘だわ！そんなの本気じゃないはず！」

うわゝ、計画的っぽいからなんかシリアスになってない…てか、これはシリアスじゃないか。

シ「いいえ、本気だわ。もう、おしまいよ…。」

フ「何言ってるの！？夢を信じない人の所に私はこないわ。」

ぜっつっつっつっつたい嘘だ！！現に俺の目の前に現れた！

シンデレラはフェアリーの存在に気付き、顔をあげる。つてか、それまでシンデレラはフェアリーの存在に気づいてなかったんだよね…どんだけだよ。

フ「さあ、涙をふいて。そんな顔じゃ舞踏会に行けないわ。」

あ、そうか。シンデレラは王宮に舞踏会しに行くんだな。

シンデレラはフェアリーに立たされた。シンデレラ、まだ悲しそうな顔をしてるよ。

シ「舞踏会？とても無理だわ。」

破れた服を強調させる。テラ、あまりジロジロ見るな。意外と変態だな、お前。

フ「行けるわよ。でも急がなきゃ。」

すると、後ろからアンヴァースがでてきた。あ、四本足の雑魚か。しかも二十四匹程度。

零「テラ、やるか。」

テ「ああ、そうだな。」

そして、俺とテラはアンヴァースと戦闘した。

よし、終了。」

今回は本当に雑魚。雑魚の中の雑魚。俺らの攻撃を避けずにまともに受けてくれる。おかげでそっこと倒せた。

そして…シンデレラの方をむいたら…なんか凄い事になってた。

テ「……。」

零「……何事？」

テラは呆然としている。それもそのはず。だって、なんかカボチャの形に良く似ている馬車、しかも白く、中はピンクのソファアールしき…いや、シートか。いや、すごいな！どこで出した？それ。

さらにシンデレラが…なんか純白のドレスをきていた。目茶苦茶きれいだ。マジで。

俺はついつい見とれてしまった。いや、マジで似合うんだよ、これが。

シ「どう？似合う？」

なんかシンデレラ嬉しそう。オシャレというやつか？よくわからん。とりあえず、似合う事は間違いない。

零「ああ、凄く綺麗だ。見違えた。」

シ「……／／／／／」

テ「はあ。(また零斗の犠牲者が増えた…)」

フ「ふふふ。(王子様よりも、レイトとシンデレラの方がお似合いかも)」

おい、なんだよ二人して。テラ、何故ため息？またこいつやったよって目しなくてくれる？ってか、俺は何をした？そしてフェアリー、何故笑う？シンデレラは俯いてしまった。照れ屋さんか？

フ「シンデレラ、よく覚えておいて。」

あ、成程。こいつがなんかやったのか。

フ「この夢は真夜中までなの。12時を告げる鐘が鳴りやむと、魔法が解けて全てが元の姿に戻ってしまうの。」

シ「ええ、わかったわ。」

成程、あれらは魔法か。こいつ、万能か？多分俺の世界でも生き残れるぞ。霧にもなれるし、戦闘には不向きかもしれないが、いけるぞ。

そして、シンデレラはカボチャの形をした白い馬車に乗って、王宮へ向かった。

さて、ついていくか。あ、テラも行くのかな？なんかフェアリーと話してる。

しばらくするとテラは俺のもとにくる。

零「ん？テラもシンデレラの所へ逝くか？」

テ「ああ。それと、字が違うぞ。」

零「知ってる、わざとだ。」

テ「……………」

ジト目で睨まれる……ごめんなさい。

零「じゃ、行くか。」

テ「ああ。」

そして、俺はシンデレラのもとへと行った。

ついたのだが、状況が最悪だ。見たところ、アンヴァースに囲まれている。シンデレラがね。

王宮の扉の前にいる。

零「テラ、いくぞ！」

テ「ああ！」

四本足の雑魚が八匹：瞬いた刹那に消え失せる。

俺は普通の剣を出現させ、いつきにかたずける。本当に刹那に消え失せたよ。

テ「…レイト、お前には絶対敵わない。」

なんかテラが悟った目をしながらなんか語ってる。どうでもいいや。

シ「あら？貴方達はレイトと…」テラだ。「…テラね、私はシンデレラです。」

二人が手短の自己紹介をする。

零「俺とテラは先に行き、あの变なのをかたずける。だからシンデレラはここに残ってくれ。」

するとその答えはもの凄く意外だった。

シ「いいえ、私も行くわ。舞踏会に遅れてしまつわ。」

これは意外の意外。本当にビックリした。だって、それどころじゃないっしょ？この城、襲われるかもしれないって、すでに襲われる…のかな？

あるえ？考えれば考えるほど変だぞ？この城、他国に襲われたら絶

対滅びるぜ？だって、あまりにもオシヤレ重視じゃん。そんなことに金使うなら政治やら軍事やらをしるよ！

おっと、ついあつくなっちまった。

零「了解、俺らが護衛する。テラ、いいか？」

テ「ああ、いいぞ。（というか、俺も護衛に必要か？レイトだけで充分な気がするんだが…。）」

よし、テラの了承も得たな。さて、最終確認だな。

零「護衛することはいいよ。けど、奴らは危険だぞ？（俺はあんまり危険じゃないと思うがな。）」

シ「ええ。」

素晴らしい、どんだけだよ…こいつ、度胸なら軍人顔負けだぞ。

零「はは、強いんだな。」

シ「レイトが言ったのよ。心を強くもてど。それに、襲われても私を守ってくれるでしょ？」

まったく、かなり強いな。

零「ああ、絶対シンデレラを守るからな。」

シ「……／＼／」

テ「（やっぱレイトは鈍感だな。）」

さて、行くか。

俺は扉を開けて、城の中へと足を進めた。

ちい、意外だ。

エントランスにいるんだが、くそウザイ。

特に今回はあれだ。靴の形をしたアンヴァースがいる。そいつらは階段の行く道を塞いでいるようにみえる。まだエントランスの下の広間だ。この階段をのぼればつくだろう。

しかし、今回はウザイ。靴の形：いや、靴の中にいるアンヴァースかな？その靴は頑丈だ。だから頭の部分を狙うが得策。だが、そいつらも馬鹿じゃない：多分。その立派な靴の中に入り込んで攻撃を防いでくる。

テ「ちい！」

テラは苦戦中。アンヴァースは七体いた。テラは三体引き受けて、

俺は四体だ。

だが、よくみると階段からまた靴のアンヴァースがでてくる。

その数、約二十体。

多分テラは強さで苦戦してはいない。戦闘能力だと普通にテラの方が上だ。が、防御で苦戦している。

そして上のアンヴァースが加勢してきたら計約三十体。テラは多分体力切れで負けるかも。俺もきつい。

俺は無理矢理防御していてもお構い無しに攻撃をする。確かに倒せている。が、疲れる。あと面倒。だから時間がかかっている。

もういいや。ちょっと本気になるか。

零「……増絶『重なりし絶望』。」「

俺は大剣を出現させ、それを投げた。あ、増絶は俺が今勝手につけた。

今回は大剣にした。威力は絶大だろう。もうすでに大剣は三十ほどになっている。

そして、その大剣を操り、いつきに高度を上げさせ、落下させる。

見事全てのアンヴァースを殲滅させたぜ。

テ「……やっぱお前には敵わない。」「

そりゃ当然だ。お前達の師匠より強いからな。

アンヴァースの気は感じられない。もう平気だろう。

零「シンデレラ、もう平気だ。階段に上がりな。ほら、舞踏会が始まってるみたいだぞ。」

シ「ええ、ありがとう。レイトは？…行かないの？」

俺は…そのまま別の世界に行くか。

零「いや、俺はいいや。俺は用事があるから。代わりにテラがついていくよ。護衛に行かせるから。」

テ「な！？レイト！」

シ「……そう。」

テラ、強制決定だ。

シンデレラはなにか悲しそうな目をしている。寂しがりやなのか？

シ「……また、会えるよね？」

多分な。いや、多分無いかも。

零「ああ、また会えるさ。」

実際にはこう言った。だって、多分なんて言ったらなんか危なそう

だったから。

シ「じゃあ、今日のお礼をしたいか、目を閉じて。」

なんだろう、とりあえず目を閉じた。

すると、ほっぺになんか柔らかい感触があった。ん？本当になんだ？

シ「……………／／／／／」

シンデレラは顔を真っ赤にして階段を駆け上がった。

零「なあ、テラ、なにかあったのか？」

テ「お前……………いい加減にしろよ……………」

なにをいってる、こいつ。

零「とりあえず、いくから。」

そして、俺は城を出て、異空の回路をひらいて次の世界へ行った。
さて、次はどこかねえ？

おまけ

エントランスの階段にて。現在テラとアクアのお話中。

テ「……………ということがあったんだよ。」

ア「レイト……………###」

ゴゴゴゴッ…！

テ「ひい！（アクア、ここまで怒るとは…レイト、御愁傷様。）」

ア「（いや、待って。私もレイトにそれをすれば…いや、それ以上のことも…レイトを私の物に…って、なに考えてるんだ、わたし。）
……………／＼／＼」

テ「……………。（レイト、頑張れ。）」

異空の回路にて

零「ハックション！…だれか俺の噂してるのかな？いや、なんだ

これ…悪感も感じる…この先、強大な敵と出会うかも…頑張るか。
しかし、刃のついてない大剣って、もはや剣じゃないよな。」

……………。

零「ま、いつか。これぞ、ご都合主義だな。」

エンチャントッド・ドミニオン(前書き)

アクアのキャラがすこし崩壊WWW

エンチャントテッド・ドミニオン

ふ〜、なんだよここ。

俺はあの世界から去り、そして次の世界についた。今回は何事もなくスムーズに進むことができた。

はてさて、今の状況は目の前になにやら黒い炎が出ていた。なんだろう、闇の魔力が宿っている。

だが、だからと言って先に進むこともなんか嫌だな。なんつったって、気味悪い。草や木は枯れていて、いかにも嫌な道だ。注意してくぞ。言っとくけど、怖い訳ではない。ただ面倒なことになりそうな気配がするからだ。

そんなことを考えていると、何かが近づいてくるのを感じた。

四人…いや、一人は知っているが、三人はなんだろう。特別な力を感じる。戦闘ではたいして力になれないが、補助などで最大限に力を発しそうだ。

すると、なんと黒い炎が消えていき、四人と目が会った。そこにいたのはヴェンと…あとは知らない。多分妖精かねえ？

しかし不思議だ。何故か妖精でも今のところオバサン妖精しか会っていない。何故だ？

さらに言うと、あの前回の妖精の服装と似ている。ただ色がかわっ

ただけ…かな？

ヴ「レイト！？」

はあ、何故だろうか。最近最初に会うのがヴェンなんだよねえ。

零「よお、ヴェン。なんか急いでいるみたいだな。」

ヴ「実は……………」

ヴ「……………」というわけなんだ。」

成る程、つまりそのオーロラ姫とか言ったかな？そいつが心を奪われて、それを取り戻す最中と…。

零「わかった。俺も協力する。」

ヴ「本当か！？有り難う！」

ここまで聞かされて手伝いませんなんて言う方が可笑しいからな。

まずは自己紹介をしなくてはな。

零「んじゃ自己紹介な。俺の名前は岸昏零斗だ。零斗と呼んでくれ。」

俺の自己紹介するにしたがって、赤色の服をきた妖精らしき奴が話した。

??「私の名前はフローラ。宜しくね。」

次は緑色の服をきた、なんか賢そうな奴。

??「私はフォーナ。」

最後は青い服を着た、頑固そうな奴。

??「私はメリーウエザー。メリーと呼んで。」

各自の自己紹介はすんだ。さて、面倒な匂いがプンプンするが、頑張るか。

そして俺達は先へ進んだ。

さて、あの道を通っていったら城が見えてきた。そこに心があるらしい。中に入ると不思議なことに、なにもなくスムーズに進めた。

しかし、嫌な作りだ。何処かしら罠がありそうな気配だ。

そして、とある広場に出た。うん、戦いやすいな。

俺達は隠れて様子を見る。するとなにやら次のフロアにつながっているだろう出入口に見張りがいた。だが、とにかくちっこい。

鳥みたいな顔をしている…いや、あれはなんだろう？一匹は弓矢をもつて、もう一匹は小さいながらも力のありそうな身体で斧をもっていた。

フロ「マレフィセントの手下だわ。」

マレフィセント？ああ、この城の主か。そいつが心を盗んだと。ま、いいや。まずはあいつらだな。

ヴ「あの先になにかありそうだな…。」

零「んじゃいつちよやるか。」

俺とヴェンは飛び出していき、退屈そうな奴らと戦闘を求める。

ヴ「退屈そうだな。」

俺達はそれぞれ武器、今回の俺の武器はあの深紅の長剣。

零「丁度いい。俺らの遊びにつきあってくれよ。」

そして俺がはなしおわると戦闘が始まった。

ヴェンは斧をもった奴、そして俺は弓矢を持った奴を相手した。

互いに倒し終わって先へ進もうと思うと、なんと囲まれていた。頭はなかなか良いみたいだな。回りは弓矢を構えたやつで、正面からは斧をもった奴がきた。

零「ヴェン、俺が矢を防ぐ。お前は斧の奴を中心に倒せ。」

ヴェンが頷いたと同時に矢が放たれる。放たれた矢は俺がことごとく斬り、ヴェンは斧の奴と戦闘中。

俺は回りにいる弓矢の奴の武器を奪い、そして倒す。

零「弓矢つてのはな、ここう使っただよ……。」

そして俺は構え、矢を放った。放たれた矢は一体の敵に命中した。他の弓矢の奴はそうとうビビっている。当然だ。なにせ矢が当たったやつは威力が強すぎてただ矢が刺さっただけなのに身体がバラバラに飛び散ったんだからな。うん、自分でも恐いと感じた。

さて、そろそろけりつけるかな。俺は駆け出し、いつきに距離を詰めてようとしたが……。

カポッ

……。

零「……………」。

真下が…いきなり穴となつて、ね。畏が、ね。

零「あ……………ね……………」。

ヴ「零斗おおお!!」

あ、今発音正しく言つてたな。いや、気のせいか？

だが、なにか忘れてないか？俺は空飛べるんだぜ？

零「何？」

ヴ「え？あ、え？」

はい、穴の上に浮いています。

零「はい、平気だつて。こんくら ゴンッ！ グハア!？」

余裕の表情だつたが、油断大敵だつたね。超油断してたから落ちてきた岩が物凄く痛く感じた。そして、俺の意識はなくなつた。

零「……………ん？何処？」

辺りを見回すとどうやら牢獄みたいだな。するとそこにはもう一人、王子らしき奴が鎖で繋がれていた。

??「……………君は？」

とりあえず、自己紹介だな。

零「俺は岸帛零斗。零斗と呼んでくれ。」

??「レイト？不思議な名前だな。僕はフィリップ。」

こいつ、なんか男らしい。こいつは武器を手に持ち、民を導くために使いそうなちから。なんか凄い仁徳オーラが出ている。

零「とりあえず、その鎖外してやるくほ！？」

今度はなんだ？また上から落ちてきた…。なんか誰かに乗っかられている…。

その人物が…アクアだった。

ア「……………？」

零「あー…とりあえずおりろ。」

ア「ッ！？すみませ…てレイト！？」

アクア…酷いっす。

零「とりあえずおりろ。」

ア「え？もつとやって欲しい？…え、あの…はい／＼頑張ります
／＼貴方が望むのであれば…／＼」

え！？ちょ！待て！マジで！？いや、なににななななななな！？
マジでつてなにその鞭、どっから出した！？ちょ！？やめ…あー
―――……………

ア「ご、ごめん／＼」

零「い、いいよ別に…いてて…。」

あ、危なかった。いくら俺が丈夫だからといってもアクアには勝て
ない…しかもなんかを妄想していたらしいアクアには…。

フィ「き、君は？」

怯みながらも質問するフィリップ。まさに勇者。

ア「私はアクアといいます。罨にかかってここに…。」

零「安心しろ、俺も理不尽な罨にかかってここにきた。」

ア「理不尽…。」

だってそうだろ。理不尽かどうかはどうでもいいけど、俺は岩まで投げられて穴に落とされたんだ。あゝやだやだ。

ア「貴方は？」

フィ「僕はフィリップ。僕もマレフィセントに捕らわれたんだ。」

ぶっちゃけ、マレフィセントって強いのか？俺は実際に見たこと無いし、わからない。

フィ「そしてオーロラ姫が呪いで永遠に眠らされている事を知った。」

その呪いって、心を奪われた事だよな。ヴェン、なんとかしてくれ
たかな？

フィ「僕は彼女を助きたい。」

この時、フィリップは確かな光を感じた。まったく、これは多分強いな。

ア「…愛しているのですね。」

…片想いか？いや、こいつなら多分幸せになれるでしょうね。

ア「……………／＼／」

アクア、チラチラこつちを見ては俯いて、なんか顔についてるのか？

フロ「今の話は本当ですか？」

あ、フローラ。

フィ「ああ、マレフィセントに聞いた。」

いつからいたんだ、こいつら。

フロ「貴方はフィリップ王子！」

オーバーリアクションなこつただな。フローラさん、もう少し落ち着け。

フロ「あ！レイトも！ここにいたのね！」

ア「彼女達は？」

零「なんかの妖精。こいつらとともにマレフィセントとやらのどーのこーので手伝いをしていた。」

テキスト感MAX！

さて、なんやかんやで話は進んでいった。どうやらいったん城…あ、オーロラ姫とやらの城へ行くんだそうだ。あ、フィリップの鎖はは

ずしたぞ。

フロ「フィリップ王子、真の愛への道のりは険しいですが、一人で立ち向かうのです。」

フィリップは強く頷く。

ア「私も同行させてください。」

アクアが行くんじゃ、俺も行くか。

ア「マレフィセントに聞きたい事があるのです。」

フロ「ええ、いいでしょう。」

さて、俺も行くか。

零「まだ一人、俺の存在を忘れてないか？最後までやり通さなくちゃ、な。アクアも行くんだから、守らなくちゃ。」

ア「レイト……／＼／」

零「親友を守らなくちゃ、な。」

ア「……………」

あるえ？何故アクアは俯く？なんか負のオーラが凄い…何故？

フロ「貴女も苦勞しているのね。」

ア「……………」

何を言ってるんだ、こいつら。

さて、フィリップも準備出来た様だし、な。あいつは武器を持ってないから渡すか。

零「フィリップ。」

俺はフィリップを呼び止めた。

フィ「どうしたんだ？」

零「お前に渡したい物がある。」

そして俺は剣を出現させた。なんか勇者の使いそうな剣………つっても、かなり一般的な剣の刃の部分を金色にただけだがね。

フィ「これを…僕に？」

零「じゃあ、お前は魔物やらマレフィセントやらに素手で戦うと？」

そんなこつちや。別にこれ渡しても構わないし、俺は剣、何本も出現させられるしね。

フィ「わかった、ありがとう。」

フィリップはその剣をとり、そして剣をジーンツと見ていたなんか気に入らないのか？

フィリッ…。(この剣、普通の剣よりも凄い力を感じる…僕に使いこなせるか…いや、やらなくちゃ駄目なんだ。)

フィリップは剣を見るのを止め、そして覚悟をきめた目をしている。

零「さて、行くぞ！」

そして俺たちは城を抜けだした。

フィリッ「レイトって、強かったんだね。」

フィリップが凄く驚いて俺を見ている。そんなに凄かったか？

〈回想〉

俺たちは牢獄から逃げ出して出口へ向かった。が、そこは魔物が大量にいて、なおかつ三重に門が閉まっていた。

なんとまあ作りの良い城だった。

んであの妖精達は…隠れてやがる。

矢が一斉に放たれた。フィリップ、強さはまあまあだが矢を弾く程の力は無いようだな。俺とアクアで矢を弾く。余裕だな。

今度は落石か。アクアの隣に落ちてきた。当たりはしなかったが、余りにも急な事だったからこけた。

ア「キヤッ！」

尻餅ついちゃったね、アクア。俺はアクアに駆け寄った。

零「アクア、大丈夫か？」

ア「……………／／／」

あれま、アクア動けないみたいだな。さて、親友を傷つけたんだから、な。

零「あゝあ、可哀想。哀れだね、本当に。アクアに傷つけたんだ、死んでもらうよ？」

安心しな、ちゃんと閻魔さんが白黒はつきりさせて地獄へ送ってくれるからさ。だから……………

安心して逝きなよ。

それと同時に弾幕、剣を四方八方へ飛ばして味方意外すべてを葬った。

そして門番らしき奴らはちゃんと門を守っていたから、君たちこと葬らなくちゃね。

零「……弾幕は威力パワーだぜ。」

誰かの台詞をパクりました。すんません。

俺の手から巨大なレーザーが放たれ、そして“城壁ごと”ぶっ壊した。

～回想終了～

零「まああの時はついむきになっちまったからな。」

ア「……／＼／＼（レイト、私のために怒ってくれてたんだね……複雑だけど……嬉しい／＼／＼）」

アクア、どうしたんだらうか。さっきからどうしたんだらう……俯きっぱなしだな。

フィ「もうすぐ城につく……。」

フィリップが不安な表情を浮かべている。まったく、すこし励ますか。舌、つらなきやいいんだがな。

零「なあフィリップ、お前はオーロラ姫とやらは愛しているか？」

フィ「？ どうしたんだレイト？」

まあそうだな。急に変なこと言うのは可笑しいからな。

零「いいか、そいつのことが好きならばお前がそいつのことを守るんだぞ。いいか？俺とアクアはいくらお前より力があつたとしても、俺とアクアはあくまでも手助けをするだけだ。つまり、どんな困難があろうと守る者を守り通す覚悟を試す試験だと思え。わかつたな。」

フィ「……ああ、わかつた。」

少しは緊張は和らいでくれたかな？はつきり言って、俺は口下手だ。さっき、半分以上自分でも何を言ってるのかわからなくなっていた。嫌だね、口下手って。

おっと、なんだかんだで城についたな。

ん？あの黒い奴がマレフィセントか？しっかし変な格好だな。頭の黒い角つて本物？あと無駄に長い杖。杖の先には緑色のオーラらしき、なんか闇の力が感じられる。

さて、やつの格好は魔女の服すな。うん、それしか言えないな。

マ「…破滅をもたらす雲よ空をおおい、あの城を我が魔力で包むのだ！」

するとなんか空に怪しい雲が出現し、雷をおとす。すると城へ続く道はいばらで包まれた。いく道もね。

俺達はマレフィセントらしいやつつつつても、いかにもあやしいやつだから確実にマレフィセントだな。そいつの元に駆ける。

そして、俺、フィリップ、アクアはそれぞれの武器を構える。

ア「答える！マスター・ゼアノートから何を聞いた？」

アクアが質問をする。

え？あのゼアノートがここに？なにをやらかしたんだ？あいつ。

マ「どうやらお前は私を手伝ってくれないようだねえ…だったら教える訳にはいかないよ。」

……なにを手伝うの？城を奪う事？それならこいつ一人でもう出来

てるよな…。

ア「テラがお前を手伝ったというのは本当か？」

マレフィセントは気味悪い笑みを浮かべながら答える。ああ、成る程。だいたいわかった。多分ゼアノートは心の闇の使い方だのなんのを教えた…のかな？

テ「本当さ。テラは己の力におぼれて闇に堕ちたんだ！」

あれま、テラやっちまったな。

ア「戯事を！」

アクアがマジでできたな。っとその前に…。

零「ちょっと待て、お前がマレフィセントか？」

…みんなキョトンとしてる。く、恥ずかしい。一応確認だよ、確認。

マ「…なんだいお前は、そうさ、私がマレフィセントさ。」

とりあえず自己紹介。

零「一応、俺も名乗ろう。俺は岸帛零斗だ。」

マ「！？ ……そうか、お前が零斗か。」

うん、こいつゼアノートから聞いたな。

零「マレフィセント、テラは自分の闇にうぼれたっていったな。それもう一回聞くけど本当？」

マ「…本当さ。まさか、お前も私を手伝ってくれるのか？」

それでこそ戯事じゃん。

零「馬鹿言つな。生憎、俺はお前の計画よりお前の力に興味を持った。あと、この王子さんの志の試しにもなるし、な。」

マ「ふふふ…私にもわかるよ、お前はそこの二人よりも遥かに強いねえ。私の手中におさめたくなってきたよ。」

はあ、これは困ったもんだな。とんでもない奴に目をつけられたな。

零「そうだな…俺に勝てたらお前の計画を手伝ってやってもいいぜ？」

ア「レイト!？」

アクアが慌てるのも無理はないよな。なんつったって、もしこの勝負に負けたら俺が向こうにつくんだからな。

零「大丈夫だよ、アクア。この勝負に勝てばいいし、あっちに行く気はさらさらない。お前といると楽しいしな。それに、俺に居場所をくれたのもアクアだし、な。」

ア「……//」

あれ、俯いちゃったよ。

マ「…その言葉に嘘偽りはないだろうねえ？」

零「ああ、言っとくけど勝てたらだからな。」

マレフィセントが話にのってきた。これで楽しめそうだ。

マ「…お前を手に入れるためにも本気でやるよ…思い知れ！悪の力を！」

するとマレフィセントは漆黒のドラゴンになった。マレフィセントドラゴンってか？ただでかくなっただけじゃね？

フィリップとアクアは身構えた。

するとマレフィセントドラゴンは空を飛んだ。うわー、卑怯だこいつ。俺達の攻撃届かないじゃん…なんて思うなよ！

俺はそこらへんのいばらを超小型船を作り、そしてアクアとフィリップをのせる。

ア「ちょーレイト！？／＼／」

フィ「な、なにをするんだ！」

零「はいはい、とつととのね。楽しい空中戦が待ってるぞ。」

そして船の後ろをもって、船ごと空をとぶ。なるべく船を傾けさせないようにしなくちゃ。

マ「!?!」

うん、こいつめっちゃ驚いてる。

あ、風の抵抗は俺の魔力でアクア達にはうけてない。何故俺は戦わないかって?だってさっき言ったもん。あくまで俺とアクアは手助けだって。

零「アクア、今回は俺とアクアでフィリップの助力をする。俺は船の操作をやる。飛べるの俺だけだしな。アクアは攻撃がきたら魔法で防いでくれ。」

ア「わかったわ。」

零「フィリップ、さあ試すぞ、お前の志を!心置きなく戦え!」

フィ「わかった!」

各自戦闘準備する。さて、弾幕勝負の始まりだ。

つつても、俺は助力だからね。なんかこの台詞癖になった。

マレフィセントが日の玉を放つ。俺はそれをことごとくかわしていき、そしてマレフィセントの前までくる。

すると今度は爪で攻撃。

零「アクア!」

ア「任せて!」

アクアの魔法で防がれ、むしろマレフィセントが怯んだ。

零「さあ今だ！この剣はお前の想いが強ければ強くなる！」

フィ「僕の想い…僕は、彼女を助ける！」

すると剣は光で包まれ、リーチを長くする。あ、悪いけどあれは嘘。俺の力で重さを変えずにリーチを長くした。

フィ「うおおおお！」

フィリップはマレフィセントへと剣を向ける。そして斬る。

本当に一生懸命なのがわかる。

斬る、斬る、斬る、斬る、斬る。

不安を抱く前に斬る。うん、一生懸命だね。

そしてひとつだけ、傷が深かったのか、マレフィセントが落ちていく。

俺達も地上に戻り、二人をおろした。船は…とりあえずマレフィセントに投げた。あ、目に当たった。痛そう。

するとあの妖精がきた。遅い。どこでグズグズしてたんだ。

すると三人が俺のあげた剣になにやら魔法をかける。強化魔法か。

フロ「真実の剣は素早く正確に飛び、悪は死に絶え二度とはびこる事無し！」

フィリップは剣を投げた。うん当たった。当たったんだけど、あつけないな。仕方ない、俺が飾りつけでもするか。いや、だつてなんかさ、ささった感触がなんかプスツつて感じだもん。さてと、飾りつけるか。

零「怪我しろ、マレフィセント…爆発しろ。」

するとマレフィセントは大爆発をおこした。うん、いいね。

マレフィセントは元の姿に戻った。橋は…ギリギリ平気だった。手加減したつもりなんだが…つてか、この橋頑丈だな。

フィリップは城に駆け付けていく。俺は倒れているマレフィセントの元へ行き、話しかける。

零「残念だったな、マレフィセント。」

マ「…随分…余裕そうだねえ…あの爆発…お前の…力…かい？」

弱々しいな、こいつ。

零「ああ、手加減したんだがな。」

マ「…ますます、欲しくなるねえ…まだ諦めちゃいないよ…。」

マレフィセントはゆっくりと立ち上がる。

あ、言い忘れたけどいはらは消えたよ。

零「ま、頑張れ。期待しないで待ってるよ。」

そしてアクアの元へいく。

零「アクア、先にこの世界から出るよ。」

そして異空の回路を開く。

ア「え？ちょ！レイト！」

零「こういう場面は少し苦手だね。んじゃ、先行くよ。」

そう言って、この世界から去った。

レイディアントガーデン・輝ける庭（前書き）

すみません、間違えました。訂正します。

レイディアントガーデン：輝ける庭

異空の回路を漂う俺。異空の回路で俺宛の手紙を見つけた。多分、いや絶対俺をこの世界に送りこんできた神だろう。いや、神だ。

読んでみると内容は以下の通りだった。

“岸帛零斗へ

零斗よ、異世界から送られし者よ、お前はもう気づいているか？戦いの時、前にいた世界よりも力が無い事を。何故力が弱くなっただかは知らん。一応調査はしておこう。

それと、お前は前の様に不死身ではなくなった。前は剣という存在が無くなるまで何回もよみがえっていたが、この世界ではあくまで司る、支配するだけになっていた。そして不死身から不老となった。不老のみとなったから心臓を貫かれたら普通に死ぬ。ただ老衰にならなくなった。あと剣を司る、支配できるのは自分が出現させた剣のみとなった。もうこれでは“剣を操る程度の能力”とほぼ同等の強さだが、まだお前の能力の方が強い。下に図でまとめておいた。見ておくがよい。

・不死身 不老

・支配できるのは自分が出現させた剣のみ

・強さは“剣を操る程度の能力”より少し強い

神より”

という手紙の内容だった。

ひとつ言って良いか？もの凄く回りくどい。最終的にまとめるならそれだけでいいものを…はあ。

わかった事は、あの世界にいた時より凄く弱くなっている事。
あと俺自信が気づいた事なんだが、強力な力が秘められている剣であればある程に理解しないと創りだすことが出来ない事。自分の能力で不完全な剣を完全オリジナルの能力に変えれば別になる。

だが、まるつきし同じ能力は難しい事がわかった。という事は、俺のとおっておきの“あれ”をどう創りだすかが問題だな。まだ“あれ”を使う程の強敵には会っていないからまだ創らないけどな。

そろそろつきそうだな。次の世界はどんな奴と会おうかねえ？

ん？前になにかいたような気が…気のせいだよな。

くアクア side く

私はあの世界をぬけて、異空の回路にいる。あの世界でレイトはとつとときりあげて次の世界へ行ってしまった。一緒に行きたかったのに…。

私はマスター・ゼアノートとテラを探す（半分はレイトを探しに）ために異空の回路をわたっていたらレイトがいた。飛びながら何かを読んでいる様に見えた。しかし、凄い速さだ。

よく見たらレイトは鎧を着ていない状態で異空の回路を飛んでいた。闇にのまれるのではと疑問に思ったが、全くと言っていい程というか、全く変化がみられない。それ程強い心をもっているのだろう。

そしてレイトは次の世界についたらしく、異空の回路を出た。私もそれについていき、異空の回路を出た。

〈アクアend〉

次の世界に到着した。

零「…なんなんだ、この世界は…。」

最初の言葉がこれであった。

綺麗すぎる…俺はとある広場に出た。真後ろが壁となっている。そして目の前には小さな花畑があり、いや畑程ではないか。そしてちやんと走りまわれる程度の場所もある。そして目の前を見上げれば大きな城がある。前にはそれに続く階段があるのだが、門で封鎖されている。そして左右には道があり、そこは住宅街へと続いているだろう。

結論を言うと、普通だが美しい。

特に美しい程の物はおいていない。が、その一般的な物がとてつもなく美しい。一般的な美しさがここにはあった。

しばらくボォーツとしてしていると黒髪の少女がやってきた。しかし物騒なものだな。こんな小さい子なのに刀を持つてるよ。

…え？他人事みたいに言ってるけどもの凄く危ないよね？危ないよ、あれ。少女は肩までの長さの髪をしていて、そして刀は背中に二本ある。服装は黒で………まともましよう、ぶっちゃけ忍者なんだよこの子。凄く忍者の格好してるんだよ。

??「あたっ!!」

身長は…120cmかな。そんなくらいの身長って、少女が倒れてる。多分転んだんだよな、うんそうだよきつと。助けなくっちゃ。

俺は少女に駆け寄った。

零「大丈夫か？…あ、怪我しちまったな。」

??「??? 誰？」

だろうな。とりあえず自己紹介。

零「俺の名前は岸帛零斗っていうんだ。零斗って呼んでくれ。」

??「レイト？不思議な名前だね。」

さて、傷を治しますか。

零「動くなよ、今治すから。」

??「え？」

とりあえず、アクアに習った魔法で治しますか。…確か…あ、そう
だそうだ。『ケアル』だったな。

魔法をかける。すると少女の傷口が塞がっていく。

??「…………。」「（なんか暖かい…………。）」

零「よし、これで終わった。」

俺は立ち上がり、少女に手をかす。

??「ありがとう 私の名前はユフィっていうの 宜しくね」

ユフィねえ…マジで？この世界に住んでたの？しかも少女だから性
格が少し違う様な…ま、いっか。

零「ああ。宜しくな、ユフィ。（ニコッ）」

そう言いながら頭を撫でてやる。

ユ「あう…………。／／／」

あらら、顔俯いちゃったよ。嫌だったのかな？

ユ「あ…………。」

撫でてる手を離すとなんか残念そうな顔をしていた。どっちなんだかねえ。

零「それじゃ、俺は行くね。」

そしてこの場を立ち去ろうとしたら…

ユ「ちょっと待ってよ!」

ユフィに止められた。

ユ「あ、あのさ、レイトの事、お兄さんって呼んでいい?」

お兄さん?別にいいんじゃないの?いや、ちょっと悪戯してみるか。

零「だ〜め お兄さんじゃなくてお兄ちゃんって呼びなさい」

流石に戸惑うかな。そう思っていたが、全然違った。

ユ「うん わかったよお兄ちゃん」

…やっちまった。言わなきゃ良かった…ま、いいか。子供は元気が一番

零「おう んじゃ、俺は行くね」

そしてユフィと別れた。うん、元気が良いね。向こう側で元気良く手を振っている。こつちも微笑んで振り返したらなんか顔真っ赤にして何処かへ走っていった。速いな…あの子。

さて、俺も行くか。

〈アクア side〉

私は零斗の後をつけてこの世界に来た。ここは不思議な場所だった。

綺麗。その言葉でしか表現出来ない。何故だろうか。

それはともかく、レイトを探そう。

目の前には広場があった。そこを眺めているとその奥にある右側の通路をレイトが通ろうとしているところを見つけた。

私はレイトの後をつけた。

今思ったら私って、ストーカー行為をしていない?...いや、違う。
私はそんなことはしていない。うん、していない。

〈アクア end〉

さてと、今俺は何処にいるか。それは...

店員(女)「ご注文は以上でよろしいでしょうか?」

零「ああ、ありがとう。」

店員（女）「で、ではごゆっくりどうぞじよ…／＼／」

あ、噛んだ。そして今俺は飲食店らしき場所にいる。前の世界（東方）とは違ってここは金をマニーっていうらしい。あ、マニーは旅立ちの地にいる時にエラクウスからもらった。なんかこれで家具だのいろいろ買えみたいな事を言われたんだけど、それを無視して財布の中へ…俺って結構せこいな。あ、財布はポケットあさったら出てきた。あれはびっくりだったなあ…。まあなにせよ金には結構余裕あるんだよ。だってもともとは家具を買う金だしね。

それで今はオムライスをお食っている。あるんだな。

それを食べているとなんか向こうの店員がなんかヒソヒソ話している。しかも全員女。迷惑だなあ。しかも俺を軽くみてはなんかキャーピー言ってるし…ほんと、なに？

そしてオムライスを平らげて会計へ…。

店員（女）「ひゃ…120マニーになりましたゆ…あう／＼／」

あ、さっきの店員だ。また噛んだ。とりあえず…っておい！安くね！？なにこの安さ！チート！ありえねえ！！

零「あ、はい。これでいいですか？」

そして何故かマニーを手渡し…何故だろう。

店員（女）・零「あ…。」

レイト、いったい何処へいったのだろうか…。近くの店がなぜか騒がしかったのだが、なにかあったのかしら？

とりあえず、その人…なのかな？驚だ…服をきた驚だ…帽子をかぶり、青い服をきていた。お金持ちみたい。今はあの人に聞こう。

ア「すみません、ちょっとお聞きしたい事があるのですが…。」

村人？「ほう、礼儀正しい嬢ちゃんじゃな。儂にわかる事なら答えよう。」

…マスター、世の中には知らない事が山ほどありました…。驚つて喋るのですね…。 実際話せません。この人？が特別なだけです。ちなみに今話している人はスクールジです。あのデイズニーキアラです。簡単に言えば、ドナルド・ダックみたいな人？です。

ア「この辺で、私の様な身なりをした男の人が、全身黒い服を着た銀色の髪の人を見ませんでしたか？」

ス「ふむ…銀色の髪の人は見とらんが、君みたいな格好をした人は見たぞ。」

ア「そう…ですか。」

…少し残念。とりあえず、テラは見つかりそう。

ス「城の方へ急いでいる様だったぞ。」

ア「ありがとうございます。」

そしてあの人？とは別れた。名前、聞き忘れた。とにかく、城ね。

くアクア sideく

ちい、しつこいなあ。

俺は今、色々な人に追われている。いや、色々ではない。さっきの店だ。

俺の予感は的中して、店長と店員（女）達に追われている。

店長「あの方さえいれば…間違いなく我が店も…。」

店長が店員（女）達に指示をしている。店、大丈夫なのかな？

とりあえず隠れる。人が多いからむやみに速く走れず、さらに目立ちたくないため飛べない。

……よし、なんとかあった。しつかし、ここ何処だよ…。さっき逃げている時に買ったアイスでも食うか。うま。

ふう、よし行くか。さっきのアイス、まじうまい。逃げている時、余裕がでてきた時に丁度店があったからなんとなくかった。そして、今かくれているのは…目の前に城の階段…あるえ？アクアじゃん。

??「キヤアアアア!」

ん？子供の声…助けるか。

物陰から立ち上がり、駆けようとしたら…

零「ぐわっ!？」

??「うわっ!？」

誰かにぶつかった。

零「いてて…ごめん、大丈夫か？」

そして手を差し伸べた。

??「こ、こっちこそごめんね。」

…でかい鼠だ…あるえ？こいつ、どっかで見たことある…。

零「はは、俺は岸帛零斗。君は？」

??「僕はミッキー。」

あ、あゝ思い出した。ミッキー・マウスだ。いやゝつて、えええええ

ええ！？何故こいつがキーブレードを！？

零「お前、なぜキーブレードを？おっと、それより上だな。ミック
ー、行けるか？」

ミ「はは。僕も修行をしている身さ。僕も戦えるよ。」

零「よし、行くぞー！」

そして同時に階段を駆けあがる。するとアクアが小さな女の子を庇うようにしていた。ちょうどアンヴァースが攻撃をしようとしていた。

零「アクア！」

ア「レイト！」

そしてアンヴァースを倒す。普通の剣だぞ、今回は。
零「アクア、そのキーブレード使いと共闘するぞ。いいな？」

ア「わかったわ。」

そして小さい女の子が俺のところへ駆け寄る。

零「大丈夫か？怪我はないか？」

??「うん 大丈夫だよ」

うん、元気が一番。

零「そうか、よかった。(ニッコツ」

??」「…／／／」

あら、俯いてしまった。

零「ところで、君の名前は？」

すると少女は満面の笑みで答えた。

??」「私の名前はカイリ」

カイリ（前書き）

すみません、題名と内容が一致してませんね。それと、本当に申し訳ございませんが、今回は全部主人公視点です。

はあ、文才欲しい。だれか文才ちょうだい。

カイリ

カ「私の名前はカイリ」

カイリ：なんだろう、この子から光を感じる。しかも光のあり方がなんかおかしい。まるで闇を照らす光：優しく人々を包み込む様な感じもする。いや、人々まではでかすぎるな。

ア「レイト!!」

すると四本足のあの雑魚アンヴァースが俺に飛び込んでくる。俺は剣を削り、そしてアンヴァースに投げる。

アンヴァースは消滅する。まったく、こっちは取り込み中だったの。

零「カイリ、ちょっと待ってて。俺はあの危険物体を排除しに行くから。」

流石に危険物体はないか。物じゃないし。

カイリは頭を傾げる。そうだよな、わかんないよな、危険物体。

カ「?？」

零「とにかく、行ってくるから、そこを動かないでね。」

カイリは頷く。さて、やるか。

俺は共闘しているアクアとミッキーの間にはいる。

零「アクア、ミッキー。俺も参戦する。」

そして俺は剣を出現させ、構える。

ア「レイト、いける?」

不意にアクアが俺の台詞をとってきた。

零「アクア、それは俺の台詞だぞ。言つとくが、俺はお前を教える側だったんだぞ。」

するとアクアが言い返す。

ア「私だって、レイトに魔法を教えたわよ?」

ち、一本とられたね。

零「はあ、…よしやるか。」

ミ「来るよ!」

ミッキーも構える。しかし、ミッキー強いな。かなり強いだろうな。多分。戦闘に入ると能力発揮タイプかな?

零「…ああ。」

前に6体…雑魚が。

そしてアンヴァースが突撃してくる。見ててウザイ。ミッキーとア

クアは素早い動きで、俺は魔法と能力で戦う。

一瞬に終わった。とそのとき、また新手がきた。

なんだ、この風船みたいな奴は。

風船みたいなアンヴァースは、息を大きく吸い、そして吐いたいきおいで突進してきた。

アクアは魔法、ミツキーと俺はかわした。

全部で7体…さっきと違うか。

ア「はああああ!!」

アクアが一体のアンヴァースに斬りつける。だが、アンヴァースには効果があまり見られない。ダメージがあまり届いていない。さらにそのアンヴァースは息で…ためたのか?なんかでかいボール状態で転がってきた。

おい、なんかやばくないか?

零「アクア!」

俺はアクアに駆けつけた。だが、転がってきたアンヴァースは爆発し、アクアは反動で吹っ飛ばす。

ア「はぐっ!!」

倒れたアクアに駆け寄る。

零「立てるか？」

ア「へ、平気…く！」

少しダメージがでかかったかな。立とうとしたら膝がついた。

零「……………」

…なんだ、これ。怒りが…溢れてくる。

落ち着け、落ち着け俺。

…しかしなんだこれ。なんか大切な物に傷つけられた様に…怒りが…落ち着け。

一体が俺に突進する。

それをかわし、後ろにまわりこんでおもいつきり斬る。

すると今度は普通にアンヴァースが消滅した。

わかったぞ、こいつらの攻略方法が。

零「ミッキー、やつらの背中を狙い、おもいつきり斬れ。でないとさっきみたいに爆発する。」

ミッキーは頷き、言われた通りにした。するとミッキーを相手した奴も消えた。

あ、そうだ。ちょっと試すかな。技が少なすぎるから少し新技考え

てたからな。

…残りは5体か。

零「ミッキー、下がってくれ。」

するとミッキーは俺のところに来た。

ミ「レイト、なにかするの?」

ミッキーが問いかける。まあそうでなきゃ下がらせたりしないっての。

零「ああ、そうだ。見てろよ。」

そして、今手に持っている剣をアンヴァースに向けて投げた。

イメージは…寄生虫ってところかな?うう!!…きもちわるい…やめやめ、増殖ってな感じでも…やっぱ、そっちもきもちわるいな。そしてアンヴァースは俺の剣が刺さった。ありや、やっぱり膨らむんだな。何故か後ろから、さらに強い打撃じゃないと倒せないみたいだな。

え〜つと、体内で増やす感じだから…技名はこれでいいか。

零「…『ナパーム』。」

ア・ミ「…?!?」

まあ技名を言ってから発動させた。驚くのは無理はない。なんつっ

たつて、剣が刺さったアンヴァースは体内から何本もの剣が出てきて破裂した様にバラバラになって消滅した。

そして体内から出た剣はそれぞれのアンヴァースにめがけて飛び、そして剣が刺さったら最初のようにバラバラになって消滅した。なんというか、技を開発したのはいいんだが、普通の相手なら剣を刺しただけでも倒せるし…なんにせ、この技は殺り過ぎだし…そして…

零「アクア、ミッキー、この技は控えるよ。」

ミ「うん…僕もそうした方がいいと思うよ…。」

ア「……………」

グロい。ミッキーは顔を青ざめて言うし、アクアは放心状態だ。うん、控えようこの技は。

零「お〜いアクア〜戻ってこ〜い。」

アクアの肩を揺さぶる。

ア「……………は！？私は何を…ね、レイト！？ちよっ…顔…近い／＼／」

よし、アクアが戻ってきたな。

零「ああ、悪い。」

そう言ってアクアから離れる。なんだかアクアが複雑な心境をしてそうな顔をしている…何故？

そしてカイリ、いつミツキーの後ろへ移動した？

アクアはミツキーの元へ行き、多分礼の言葉でも言うのだろう。ミツキーの身長に合わせて膝を地面につかせて話す。アクア、さりげなく失礼な感じがするが、ミツキーは気づいていないからいいか。

ア「マスター・エラクウスの元で修行しているアクアです。」

零「俺はさつき名乗ったと思うが、岸昏零斗。」

一応、ね。再び自己紹介を、ね。

ミ「僕はミツキー。イエーン・シッド様の弟子で君と同じく修行中の身だ。」

…まって、イエーン・シッドって誰だっけ？

非常に悩んでおります…だれか、助言を！！

ア「この子からは光を感じます。それで狙われたのでしょうか。」

ミ「うん、僕も同じ事を考えてたところなんだ。もしかすると、この子は特別なかもしれないね。」

うん、俺も思った。うつすらと残る記憶では…たしかプリンセスだっけ？その一人に入るんだよな。確かだがな。

ア「はい。私達は光を守るのが使命です。」

とかなんとか言って、さりげなく師匠的存在になりたいだけなんじゃないの？すみません、ごめんなさい。だからそんなに睨まないでアクア様。

…え？今心を読んだ？読心術か！？

ミ「一緒に頑張ろう！」

ミッキーは握手をしようとして前へ手を伸ばす。だがその時、ミッキーの懐がひかりだした。

ミ「うわ！？ちょっとまってー！」

そしてなんかの物体を取り出した。

ミ「僕は大丈夫！」

いや、大丈夫そうに見えないからね。

ミ「また何処かで~~~~~」

……ミッキーは星となった。

いや、なんだあれ？急にどっかに飛んでっちまったよ。

みんな呆然とする。そうだよな。あれじゃ仕方ない。

それを割るようにカイリに話しかけた。

零「カイリ…だったか？大丈夫だったか？」

頭を撫でながらカイリに話す。

カ「うん ありがとうお兄ちゃん」

するとカイリは…

カ「はい」

花を渡してきた。

零「これを俺達に？」

カ「このお花をつんでたの。お兄ちゃん、お姉ちゃん、ありがとう」

…いい子や。

あ、そうだ！一つ言っとくぞ！俺は絶対ロリコンじゃねえぞ！

そして花を受け取った。

え？話しをそらすな？いいじゃん別に。ほら、キーワードにもないつしょ？主人公はロリコンなんて…なに？メタ発言くるかもねが俺には主人公はロリコンだ！って見える！なんだ！？どうなってやがる！

…は！！あれ？戻ってる…さっきのは気のせいか。

渡された花を半分アクアに渡す。受け取った花を見てアクアは微笑

んだ。

ドクンツ！

な、なんだ今の？一瞬、アクアが物凄く可愛く見えたが、いったい…なんだ？

ア「可愛いお花ね、ありがとう。」

カ「私はカイリ。お姉ちゃん達は？」

おっと、自己紹介はまだだったな。向こうしか教えてもらってないしな。

ア「私はアクア。」

零「俺は岸帛零斗。零斗って呼んでくれ。」

とりあえず微笑んだ。

ア・カ「……………////」

二人とも俯いてしまった。む？さっきの俺と同じ感覚に陥っているのかな？うん、なら俯いてしまうよな。俺だってその瞬間はそっぽ向いてなくちゃいらなかったもんな。これから控えよう。『ナパーム』と同じ様に。いや、あれ程しなくていいか。

さて、お礼しなくちゃだな。このもらった花を…茎をまるめて…ムズいな、これ。そして結んで…できた。

お婆さん「カイリー。」

む、迎えが来たのかな？

カ「あ！おばあちゃん！」

ア「あ！カイリ、ちよつと待って。」

カイリが去ろうとした時アクアが止めた。

アクアはカイリのネックレスになんかの魔法をかけた。ふむ、なんかよくわからんがすげえな。包み込むような魔法だな。

ア「カイリを守る魔法をかけたからね。いつか貴女を闇から守ってくれる光のもとへ貴女の光が導いてくれる。お花のお返しよ。」

俺がいる事でそれが別の光に導かれたら…なんか俺って重罪。

カ「ありがとう。」

零「そして俺からも…と。」

カ「え？」

カイリの花で作った花の指輪をカイリの指にはめた。けっこう大変だったぞ。指輪ついても、花でかすぎるし、茎を切らなくちゃいけないし、え？そうには見えなかつたって？ま、いいじゃん。

零「カイリ、ちゃんと大切にするんだぞ。」

カイリの頭を撫でた。

カ「う、うん…／＼ありがとう…レイトお兄ちゃん／＼」

そう言うとカイリは去っていった。

む？アンヴァースの気配…だな。

アクアは、なんか不機嫌そうだな。なにかあったのかな？

後ろ…いや、上？

ドカツ！

アンヴァースだろう、上からたまたま当たったのか俺とぶつかった。

零「うわ！？」

ア「きゃ！？」

うん、吹き飛ばされてアクアを押し倒す形となった。いや、しかも今回はヤバイ。本日二回目だが、一回目よりひどい。密着しちゃってるんだよね…ふたつのマッシュマロが…あたっている…やっちまっ

零「ご、ごめん！／＼／」

ア「…／／／」

すぐに離れる。俺も顔が真っ赤だぜ、これ。

いや、それより今はアンヴァース！

赤く、なんかの部品みたいな形をしていてヘリコプターみたいにプロペラらしきやつで飛んでいる。

零「あつちにいった！アクア、追うぞ！」

アクアも立ち上がった。

零「ん？どした？顔赤いぞ？」

あ、たぶんまだ根にもってるのかな？

ア「……馬鹿！／／／」

…何故かアクアにひっぱたかれた。

アクアは階段を駆け降りた。

…多分さっきのだな。うん、あとで謝ろう。それより、今はアンヴァースだな。

巨大アンヴァース（前書き）

すみません、かなり更新遅れました。この後の展開どうすんべにな
ってました…ちょっと今回は自信がありませんが、楽しんでいただ
けると幸いです。文オプリーズ!!!!

巨大アンヴァース

くアクア side

あの時、ついついレイトをひっぱたいてしまった。

レイトに、嫌われてないだろうか…。

流石にやり過ぎと後悔した。

けれど、なんで私はそれ程にレイトの事を気にするのだろうか…。

大きなアンヴァースを追いかけながら思った。

やっぱり私はレイトの事が好きなのだな、と。

その前から気づいていた。けれど、これ程まで頭の中がレイトでいっぱいになっていたとは気がつかなかった。

はあ、レイトになんて謝ろうか…。

そんな事を考えていると今追っていたアンヴァースの通ったであろう跡があった。

あの城の階段をおりてきて、そしてすぐに見つかった。

扉だった。

鍵がかかっていただろう頑丈な扉。それが普通に破られている。

…あのアンヴァース、強いだろう。

私はアンヴァースを再び追った。

〈零斗 side〉

はあ、まったく痛いもんだ。

何故アクアは怒ったのか謎だけど、今はアンヴァースだな。

つつても、見失ってしまった。階段をおりたところにいるのだが…
どうしようか。

店長「あ！見つけたぞ！！追え！！」

店員（女達）「おおおお！！！！」

……………え！？

まだいたのかよ！まじっすか！？というか店の方は大丈夫なのかよ
！？いや、いや、こっちに来るよ！？ぎゃあああああああ
あ……………。

テ「……………」

テラ（笑）「ショーシューリキー……!!」

よし、投げといた。しかし、なんだ今の歌は？ま、気にしまら負けだな、うん。

それを投げ落としたと同時に後ろから足音が聞こえた。そして俺の元に来る。多分レイトとアクアだろう。だが、俺の予想とは違う人物が来た。

一人はアクア、これは合っていた。だが、もう一人は…

テ・ア「ヴェン!?!」

ヴ「テラ!? アクア!?!」

ヴェントウスことヴェンであった。

そして再びアンヴァースを見る。それは三体。だが、その三体は部品の一部の様だ。

空中に浮き、プロペラみたいなのをつけたアンヴァース、それは手の形になった。

そして俺の追っていたアンヴァースは足の形となった。

そして中央に浮いているのは胴体の役割をしているのだろう。それは変化無しで、そして部品となったアンヴァースをくつつける。

巨大な身体になった。しかも部品一つ一つがアンヴァースのため、
全てを倒さなくてはならない。

手の形をしたアンヴァース、足の形をしたアンヴァース、胴体の役
割をしているアンヴァース。

これは苦戦しそうだな。

覚悟を決め、俺、アクア、ヴェンはキープレードを構える。

さあ、弾幕勝負開催だ。

ごめん、レイト。レイトの台詞、使わせてもらった。

しかし、弾幕って具体的に何なのだろうか？

………気にしても仕方がないか。今はあのアンヴァースを倒す事に
集中するか。

くヴェンsideく

なんか久々に俺の出番がきたな。さて、張りきって行くぞ!!

今、目の前に俺の追っていたアンヴァースがいる。それも完全体み
たいな感じのが。

その巨大アンヴァースが突っ込んでくる。

拳を振り下ろし、俺たちを潰そうとする。

だてに修行してきた訳ではない。レイトにも教わってきたのだから。こんなのもちよい。

俺たちは当然の様に避けてアンヴァース撃退のためにキープレードをアンヴァースに振る。

だが、今まで戦ってきた奴とは違い、こいつは強い。相手はさらにレイトの様に空中に浮いている。あの大きな身体なのに避けられ、そしてそいつの拳が俺に飛んでくる。

ヴ「がはっ！！」

ア・テ「ヴェン！！」

直接的なダメージは避けたが、当たったことには変わりはない。さらに力が強く、それでも強烈な痛みを感じる。

俺は吹っ飛ばさるが、空中で体制を直し、また着地と同時にアンヴァースにまた駆ける。

だがまた拳が飛んでくる。そしてある言葉が頭に浮かんだ。

自重。

あの光の玉の暴走の時、レイトが注意した言葉の中の単語。

全くその通りだ。

攻撃に特化させているから防御の体制はキープレードを前に出す以外なかった。だが自分の勢いと相手の力強い攻撃でどんなに頑張っても戦闘不可能になるダメージだ。

俺はもう駄目だ。そう思った時だった。

当たるはずの拳がテラによって払われていた。

テ「ヴェン！行け！！」

俺は軽く頷き、そして勢いに任せて突っ込む。そうだ、今こうして戦ってくれている親友がいる。駄目だと思っではいけない。

だがやはりそう簡単に進ませてくれない。アンヴァースは一応三体いる。しかも意思も持っている。胴体の部分が魔法らしきものを撃ってくる。だが、この程度ならレイトの弾幕ってやつより軽い。

だが、油断した。今度は足が自分に迫ってきた。蹴り飛ばされると思いきや、また親友に助けられた。

ア「ヴェン！大丈夫！？」

アクアが魔法で防いでいた。流石に魔法は頑丈だったのか、アンヴァースは怯んだ。

ヴ「有り難う！アクア！」

皆の助力を無駄にしないと突っ込み、そしてアンヴァースに一撃あてることに成功した。

アンヴァースはさらに怯み、少し後方にさがる。それを好機と俺は突っ込む。

これで倒した。

俺はそう思った。

その瞬間、身体右側から痛みを感じた。

アンヴァースの拳だった。

強すぎる。意識はまだ途絶えてはいない。だけど、身体は動きそうにない。

はあ、俺の出番、案外少なかったなあ…。うん、また今度出るよね。

くアクア side

ヴェンがアンヴァースの拳に当たる。その時、怒りが込み上げてきた。

よくも親友に…!!

しかし、ヴェンの悟った目はなんだったんだろう…私には理解し難い。

だが、今はアンヴァース!

テラも怒っているのだろう。アンヴァースに突っ込む。私も行かないくちや!!

ヴェンの敵をとる!

テラと同時にキープレードを振り下ろす。しかし、やはり無神経に振るったのが間違いだったのか、簡単に防がれ、逆に返り討ちにあ

う。

テ「ぐはっ!!」

ア「はぐっ!!」

ヴェンの近くのところに吹っ飛ばされた。

アンヴァースは止めをさそうとなにやら魔力らしきものを中央にた
めている。

もう駄目みたい。

レイト「…助けて…!!」

（零斗side）

はあ~~~~~.....。

もう勘弁だよ、これ。

俺はあの店の連中に無理矢理強制労働させられている。

あ、強制なのかな？一応一時的なものだしな。さらにマニーまで貰えるからな。しかも時給とかじゃない。多分：こういう時って、なんて言うのかな？給料は聞いていないが、売上額の2割は出してくれるらしい。

おいおい、大丈夫なのか？とかと思い、聞いてみたら店長曰く「また君が来てくれると信じているよ。」だそうだ。まったく会話が成立していないが、つまりなんだろうか：勧誘？いや、違うかな？

とにかく、俺が働くと凄い。とにかく凄い。客が入ってくるのなんの。私服のままだけど、バッチらしきものを胸につけているから大丈夫だと思う。：なぜバッチなんだろうか？

しかも客の大半が女子。いや、9割が女子。しかも何故か店員俺しか呼ばない。いや、なぜに？

零「御注文は以上で宜しいですか？」

女客1「.....（ポ）／／／」

女客2「.....ふあ／／／」

零「あの...お客様？」

女客1・2「ひゃ、ひゃい！／／／」

てな感じで全く会話が進まない。

だがそこで救いの声が！

店長「すみません、お客様。まことに申し訳ございませんが、在庫の方がきれたので……………」

なんと、今日で全てが品切れ！これで解放される！

それで客が渋々帰っていった。

店長「いやゝ有り難う。助かったよ。はい、給料だよ。」

な、なんと！！？

なんかのクレジットカードらしきやつが渡された。その額が…ぱねえ…

100,000,000円…

その文字がカードに書かれていた。あ、ありえねえ…！どんだけ貰えるんだよ…！てかこんないらねえ…！。

店長「それとこれも。」

今度は現金で1000、000マニー貰った。さ、財布がパンパンっす…。

レイト…助けて…!!

誰かが呟いた…いや、多分アクアだろう。何故かアクアの声が脳裏に…!!!!

俺は店を抜け出し、そして素早く人目のつかない場所へ移動し、そして空を飛んだ。

なんか、嫌な予感がするな。

そして高度を上げ、見えたのが巨大アンヴァースだった。そこにい

るのは…あの三人だった。しかも力なく倒れていた。

巨大アンヴァースが多分レーザーを放とうとしているのだろう。

一気に高度を下げ、三人の前に立った。

ヴ・ア・テ「レイト!?」

左手で三人を白魔法『ケアルガ』で回復させ、右手で魔力をためてレーザーを放つ準備をする。

零「よお…随分と親友が世話になったなあ。」

そして巨大アンヴァースがレーザーを放つ。放たれたレーザーを俺のレーザーで応戦した。

零「今はかなり機嫌が悪いんで…本気で…殺らせてもらおう!」

互いの巨大レーザーがぶつかり合い、そして若干俺が押す。

そして俺のレーザーが勝利、巨大アンヴァースにぶつかる。

零「ヴェン!アクア!テラ!」

俺の回復魔法により、傷が癒えたのか三人は既に立ち上がっていて各自のキープレードを持っていた。

俺が声をかけて、三人は一斉にアンヴァースに飛びかかる。

アクアが上から、テラは左斜め上、ヴェンは右斜め上とアンヴァー

スを同時に斬る。ダメージは大きく、あと一発で消えるだろう。

零「……久遠に眠れ……。」

そして俺は最後の一撃を放たんと、漆黒の剣を出す。その剣は普通の形がだ、全てが漆黒である。

零「貴様ごときにこれを使うのはもったいないが……親友を傷つけてくれたからな……幸せに思え……貴様は俺の切り札を味わって消えるのだからな……。」

魔力を剣に送る。やはり不完全であるが、威力はそれなりだ。なら、充分だ。漆黒の剣からは炎がまとわれる。柄の部分も。あ、俺は平気。自分の魔力で纏わせているから俺は平気。

零「……刹那に消えよ……」

禁忌『レーヴァテイン』。」「

炎の大剣と化した漆黒の剣、『レーヴァテイン』は巨大アンヴァー
スを一瞬にして燃やし、灰にした。

レーヴァテイン…俺のつかえていた吸血鬼、フランドール・スカーレットが使っていた武器。よくわからないが、とにかく威力は高い。戦いが終わると三人がかけよってくる。

ヴ「やったな！レイト！」

ヴェンは一人テンションがハイになって話してくる。

零「当然だろ？皆一緒だし、このメンバーなら敵無しだ。」

ヴ「だな」

ア・テ「（レイトだけでも充分過ぎる程に強いと思うけど）（がな）（…）（…）」

何かこの雰囲気ぶち壊しな事を思われている気がする…。気のせいだよな。

そしてヴェンが何かに思い出したのか、ポケットをあさり出した。取り出したのは三つのカードだった。

ヴ「デイズニータウンの永久入場パス。面白い所なんだって。…保護者と…行きなさいって言われたんだ…。あ、レイトの分が無い…」

ヴェンはどうしようとおわあわしている。

零「別にいいさ。その世界は興味無いし、それに任務を遂行しなくちやな。」

ヴ「…ごめん、レイト。」

俺は軽く平気平気と流した。

さて、どうやらみんなここにいるみたいだし、俺は必要ないな。次の世界の移動の準備にかかるか。

俺が異空の回路を開いてこの世界から出ようとするのと、アクアに手を掴まれ、止められた。

零「…どうした？」

ア「……。」

アクアは俺の質問に答ええない。なんか言葉の整理が出来ていないのか、少しあたふたした感じだ。

ア「…あの…さ、あの時の…事……。」

あの時？はて…なんの事？

零「え？あの時って？」

素直に言っと、アクアはキョトンとした顔で俺を見る。

ア「……………ふふ。」

?? アクアは何故笑うんだ？

零「どうした？」

再び聞く。すると、返ってきた言葉は

ア「ううん…なんでもない。」

引き止めていた手を話す。何か吹っ切れたみたいだ。だが、なんだ？

零「ま、いいか。んじゃ、別の世界でまた会おう、アクア。」

そして俺は異空の回路に入ってしまった。

くアクア side く

異空の回路に入るレイト。なんだか、叩いた事わ気になっているのかと、嫌われたのかと思ってた。けれど、それは嬉しい方向に予想外だった。

レイトは、嫌うどころかなんの事と言ってきた。その時、考える私が馬鹿馬鹿しくなった。つい、笑いがもれた。

けれども不安が心の何処かに感じる。

この先、私たち、マスター・エラクウスとレイトも含めてバラバラになっってしまう…その不安が何故か絶えない。

…今は今の事だけを考えよう。

そして私はヴェンとテラのところへ行った。

おまけ

〈零斗side〉

異空の回路を漂っている。そして、異空の回路であるものを思い出した。

クレジットカードらしきやつ。

なんかわからないが、もう一回確認してみたくなった。クレジットカードらしきやつを取り出した。

1 0 0 , 0 0 0 , 0 0 0

この数字が表に書いてある。やっぱり、金持ち的な展開になるのか…。

そう思いながら裏を見る。するとその幻想は儚くぶち壊れた。あ、一応金に関しては多くあった方が便利だから金は望むよ、流石の俺も。この世界の旅だな。

話を戻そう。裏を見ると…なんかこんな字が書いてあった。

図書カード

……この世界にこんな物あったのか？いや、それは問題じゃない！今問題なのは図書カードと“日本語”で書かれていた。わかる？“日本語”だよ？この世界の文字は一応わかる。なんとなく読めちゃうんだよ。それはそうと、このクレジットカードらしきやつのは正体は図書カードだった。いや、それだけではない。これ絶対偽物だ。だって、固すぎだから。いや、マジで。よく見たら厚さ1cmはあった。いや、よく俺の財布におさまったな！！

畜生、最悪だこれ。

まで、あの店長がこんな物を持っている筈が…犯人は一人しかいないな。

あたりだ。

…お前のせいか！神！

説明しよう、あの時……………

説明が長いのでまとめます。

零斗金持ちチャンス 世の中そんなに甘くていいかと神半切れ 本
物とすり替える 偽物が零斗の手に渡る

…と言うことだ。

神…許すまじ…無念！

デスティニー・アイランド：未来の勇者（前書き）

ふむ、やはり文才ないな。しかし、自分ではすごく頑張っている…
はず。

とにかく、ご覧ください。

デステイニー・アイランド：未来の勇者

俺は最初に来た世界を思い返していた。

旅立ちの地

俺の居場所をくれた人たちの故郷、俺を親友^{とも}として見てくれている人達の故郷。見ず知らず、さらに異世界から来たとかなり怪しい発言でもそれを信じてくれた。お守り：俺に繋がりのお守りをくれた、親友を誓った大切なお守りをくれた場所。

なんだかんだでアクアと一番仲が良い。この世界の事を教えてくれたのもアクアだし、繋がりのお守りをくれたのもアクア。なんか俺を救ってくれたのもアクア。

：何故か今の俺にはアクアしか頭の中にない。可笑しい、俺はアクアを親友として見ている。だったら親友であるテラ、ヴェンだって出てくる筈ではないか？何故だ：何故なんだ：くそ…。

ふと頭に浮かんだのが、前の世界で見せてくれたアクアの笑み。何故こんなに記憶に残る？今までそんな事は無かったぞ？いつたい、なんなんだ……。

考えるのを止めよう、そう思い目を開ける。すると太陽の光と共に

二つの顔が見えた。

??「ねえ、なんでこんな所で寝てるの？」

別にこんな所では無いだろ？この世界に来て、んで見たら透き通る海の水、ゴミ一つない綺麗な砂浜、辺りを見回したらとある島についていたみたいだった。んで、あまりにも久々に見た海だし、波の音でも聞きながら休憩ついでにねっころがってただけだ。

しかし、こいつら誰かに似ている…さっき話しかけてきた少年、ヴェンみたいにツンツン頭の奴ともう一人は白…いや俺と同じの銀かな？うーん、結構重要な人達だったような…。

取り敢えず起きるか。

立ち上がり、服についた砂をはらう。少年二人の目の前に立ち、話しかける。

零「俺は岸昏零斗って言うんだ。ちょっと遠い所から来た旅人さ。君たちは？」

銀髪の少年が話す。

??「俺はリク。こっちはソラ。」

リクがツンツン頭、ソラの代わりに言う。

ん？ソラ？リク？ああ、光の勇者と闇の勇者か。

二人は片手には木で作られた剣の形をしたオモチャが握られていた。

零「なあ、それで何してたんだ？」

すると俺の質問に今度はソラが答える。

ソ「うーん…決闘？」

零「何故疑問…。」

つついっつついッコンでしまった。

零「よし、なら俺もその決闘とやらに付き合っぞ。どう？」

するとソラとリクは意外そうな、だが喜んでいるような余裕そうな、なんか微妙な顔をしていた。

ソ「いいの？えっと…」気軽に零斗って呼んでいいぞ。「…レイト、いいの？」

いいの？発言を二回…余裕だな、ソラ。

多分子供にしては強すぎるし、そこらのおじさんでは勝てないくらいの強さを持っているからかな？ソラはなんだかんだでリクといつも戦ってたし、な。

零「ふふ…じゃあ、試してみる？」

軽く微笑み、二人に話す。軽く挑発つきで。

リ「わかった、レイト。手加減はしないぞ？ソラ、いくぞ！」

ソ「うん！」

そしてしばらくして、ソラが……あれは木刀か？いや、木剣でいいか。これからそう呼ぼう。木剣を渡してきた。

ソラは両手で、リクは右手で木剣を持ち、軽く上に上げ、左手は前に出して構える。

俺は木剣を右手に持ち、軽く前に構える。

零「よし、いいぞ。どっからでも来な。」

ソラとリクは駆け出し、それぞれ木剣を俺に振る。

ソラが上から木剣を振る。俺がそれを木剣で防ぐ。

リ「がら空きだよ、レイト。」

リクが横から斬りかかる。まさか横からか。流石に子供相手に本気で挑めない。さらに俺は長生きであるから、本気になればこの島は

吹っ飛ぶ。今はわからないが、今の力のない状態でも経験の差や、やはり単純な剣技でも俺が軽く勝つ。が、リクとソラはコンビネーションが凄い。常に考えて動いている様に木剣を振るっているように見える。多分本当は本能的に戦ってるんだろ。本気を出せず、かといって手加減しすぎると負けるから結構戦いづらい。

横に避ける。が、またまた今度はソラが背後にいた。

ソ「やつー!!」

木剣を降り下ろす。流石にびびる。子供のこいつらでも勇者は勇者、予想以上に強い。

それを無理矢理避ける。砂が邪魔ですこしつまづく。

リ「終わりだ!」

リクが木剣を振る。それを俺はリクの手首をつかんで止める。

零「危ねえ…君たち強いねえ。」

手首を離し、距離をとる。

零「本当、強いよ君たち。」

ソ「へへん どんなもんだい」

リ「ソラ、調子にのるな。」

俺が正直な感想を述べ、ソラはどうだと胸をはるが、それをリクが

ツッコミ(?)をいれる。

零「よっしゃ、んじゃ、いくぞ。」

再び静寂がくる。先手は今度は俺。

ソ「うわっ!?!」

少し、ほんの少し力を入れてソラの木剣めがけて攻撃する。ソラの木剣ははじきとばされた。

リ「!?!?!」

そしてすぐさまリクにもソラと同じようにする。リクもソラと同じく、はじきとばされた。

零「勝負ありだな。」

そして俺は二人の頭を撫でた。

勝負後、俺は砂浜で腰かけて旅の話しを聞かせている。ソラが興味を持ち、様々な質問をしてきて、俺はそれに答える。リクは、ただ

ただ俺とソラの会話を聞いている。途中、くいつき、そして所々微笑む。正にリクだな。

ソ「へえ〜？世界ってやっぱり広いんだね」

リクは、ソラのこの言葉を言った時、リクが遠い目をして、なんだか「それが俺の夢だ…。」みたいな悟った目をしていた。ああ、ソラとリクは他の世界に旅立つ事が夢なんだっけか？

零「はは…けれど、君たちのいる平和な世界もあれば、人同士が殺し合う残酷な世界もあるんだ…。」

この言葉にソラとリクはくいついた。

零「世界を渡る。それは過酷なもので、必ず困難が降り注ぐ。そうだ。君たちに教えてあげようか？困難に立ち向かえる方法を。」

ソラはブンブンと頷き、早く教えてと言わんばかりの目で俺を見る。リクは相変わらずクールだが、それは知つときたいみたいに俺を見る。

零「それは、心だよ。」

ソ「リ」「心…。」

リクは成る程と、ソラは半分残念な感じなりアクションで二人で呟く。

零「そう、心。どんな困難に立ち向かえる強い心が必要さ。あともう一つ。」

ソラは、今度はもっと凄いものかと俺を期待の目で見る。リクは…さっきと同じようにくいつく。俺も、この世界で初めて学んだ。

零「それは…」

“仲間”だ。」

今度は二人ともキョトンとした感じだ。予想外だったのか、俺が説明する。

零「“仲間”じゃなくて、“友達”っていった方が分かりやすいかな？どんなに困難に立ち向かえる強い心を持つても、いつかは必ずその心はボロボロになる。だから、信用できる、支え合う事の出来る友達がいれば、どんな困難でも切り抜ける事ができる。」

そして二人を見る。

零「信用出来る友達、君達みたいな、ね。」

そして二人の頭を撫でる。

ソラは目を細め、気持ち良さそうな顔をする。リクも軽く目を閉じ、気持ち良さそうにする。

手を離すとソラとリクは互いに見合い、そして互いに笑う。

はあ、親友か。あいつらどうしてるかな？そろそろ行くか。

俺は立ち上がり、砂をはらう。

零「さて、そろそろ旅にもどるかな。」

ソラとリクも立ち上がる。

ソ「え？もう行っちゃうの？」

零「ああ、また会えるさ。」

俺が微笑むと、ソラは安心した様に笑顔を見せる。

零「じゃあな。」

そう言って、行くこととするが…

ソ「“じゃあな”じゃなくて“またね”でしょ？」

はは、こいつはやられた。

零「はは、そうだな。じゃあ改めて…ソラ、リク、またな。」

そういって笑顔でソラは返事をする。ソラはリクを引っ張り、砂浜

を駆けていった。

俺も、ソラが見えなくなったら異空の回路を開き、この世界を立ち去った。

オリンポスコロシウム：闘技大会（前書き）

キャラ崩壊おこしてるかもしれません。とにかく、ご覧ください。

オリンポスコロシウム：闘技大会

大きな扉を開く。その中は神殿の様な建物があった。

俺、岸帛零斗は神殿らしき建物の下にあった看板らしき物に目に入る。

しかし、ここは平和っぽい。アンヴァースが今のところ全く出現していない。雑魚すら出現していない。

さて、それはともかく看板の元に歩き、その看板を読んでみる。

ふむ、どうやらこれは大会の参加者募集の様な事が書いてある。

零「へえ〜？興味深いな…ん？」

ぽつぽつと独り言を呟いていると…そこにちよっつっつっつと興味深いものが書いてあった。

“ 新たに現れた英雄その名はテラ ”

ほお〜？テラ…いい度胸じゃねえか？そんなに自分の力がまだまだ未熟だという事を思い知らされたいかゴリア？

＼テラside＼

テ「ヘックション！！！」

…誰か俺の噂してるのか？無理もないか。あの世界では俺は何故か英雄扱いになってしまったからな…。

ブルツツ！！

な、なんだ…？い、今の物凄い悪感は…？これは……妬まれてるのか？いや、妬まれてるとか、羨ましがられてるとか、そんな問題じゃねえ…！！もつと恐ろしい片鱗を味わう事になるかもしれないぜ……！！！！

この先、何かがあるな。気を付けて進むか。

しかし、さっきの俺の台詞、自分で言ってる何を言ってるのかサツパリ分からなかった…。

＼零斗side＼

さて、とりあえず力試し程度に参加するか。（大半はテラへの妬み）

しかし、参加チケット…普通の方法では手に入れないのかな？

??「君が今欲しいと思っているのはこれかな？」

うん？俺に話しかけてるのか？後ろを振り向くと、顔が細長く、そのわりには身長がでかく、そしてなにより神が着てそうな服。神話に出てきそうな方の神な。あ、ちなみに服の色は俺と同じ黒。そしてそいつは紙をひらひらと俺に見せる。

零「ん？俺に話しかけてんの？」

??「ああ、そうだ。これはこの大会の出場するためのもの…君にあげてもいいんだが…」

こいつはいい。金もかからんし、無条件で手に入れられるとは…と無条件じゃねえか。今から条件を出しますってか？

??「君、力が欲しくないか？俺様なら君の力をもつと強くする事が出来るんだけど…どうだ？」

…こやつ、あれか？

零「つまり俺にその身体強化の薬の実験を手伝えと？」

??「なんでそこで薬になるんだよ…」

この世界にも薬はあるんだな。

??「違う、闇の力を使ってみたくはないか？」

闇の力…正直、いらね。けど興味深い…どっちなんだよ、俺。

零「んじゃ、引き受ける。というか、ああ…なんて呼べばいい？あ、俺は岸昏零斗。零斗と呼んでくれ。」

??」「…礼儀正しいな、君。俺様は冥界の王、ハデスだ。では…」
あ、なんか紙に書き始めた。

ハ「えーっと、出身地に身長体重…年齢は…17辺りか…」

零「ちよつと待てえええい!!」

ハ「うん?どうした?」

こやつ…年齢位は当てろよ!!見りゃ分かるだろ見りゃ!!
絶対わかりません。

零「言つとくけど、俺の年齢は440歳だぞ!?!」

ハ「……お前、何処の神だ?」

…あ、そうか。この世界では非常識か。

零「神じゃない。けど人であつて人でない。」

ハ「予想以上だ…」

零「へ?なんか言つた?」

ハ「いやなんでもない。…さて…」

また再び書き始める。

ハ「…なに?好きな神様だと…?俺様に決まってるだろ!!…エン

トリー終わり。」

なんだ？今のは…？

零「それはともかく、闇ってどんなふうに使えばいいんだ？」

ハ「慌てるな…まずは大会に勝ち進む事だ。」

そしてハデスはその場から消えた。消える時指パッチンしなくちゃ無理なのか？ま、いいか。

取り敢えず一回時間になるまで暇潰すかと後ろを振り向くと…

ア「はあああ！！！」

??「うりやあああ！！！」

アクアと誰かが共闘していた。相手はアンヴァース。どうやら暇潰しを探す必要は皆無なようだな。

さて、今回のアンヴァースは人の様に二本足で立ち、大きな身体にそして手には小さな盾がついている。

アクアともう一人の男、こいつも神話の神の着てそうな服を来ている。

男の方はあまり強くないが、いつか力が開花するだろうな。こいつは修行すれば確実に強くなる。

それはともかく、男は素手、アクアはキープレードで攻撃。だが、アンヴァースについている盾が攻撃の邪魔をする。二人とも弾き飛

ばされる。

さて、加勢するか。

〈アクア side〉

私はこの世界に来て早々、アンヴァースと戦闘する事になった。となりに、ハークと呼ばれる青年が共に戦ってくれている。が、いずれにしても戦況は良くない状況であった。

アンヴァースは強くはない。だが、なかなか倒れない。最後の一体となって止めをさそうとキープレードを振り下ろすが、アンヴァースの持っている盾に弾き飛ばされる。この相手、疲れる…。

着地に成功し、そこでまた戦闘体勢をとる。キープレードを構えろが、どうやらキープレードは必要無いみたい。

前を見ると…

零「アクア、また会ったな。最近よく会うな。」

アンヴァースを既に倒し、彼、レイトが立っていた。

〈零斗 side〉

零「アクア、また会ったな。最近よく会うな。」

アンヴァースを撃退して、アクアに話しかける。

いや、本当、最近…最近って言い方は駄目だったか？ま、アクアはあまり気にしてないからいいか。

ア「ふふ…。」

アクアはクスクスと笑う。…胸が…なんなんだ？この気持ちは…？ま、とにかくつと。あの隣の男に礼を言わなきゃな。

礼を言おうと歩き出そうとしたら…

??「やれやれ、酷いめにあつた…。」

随分とおじさんな声してるな〜と思いつつながら声をした方へ向くと…ちっこい、それはとてもちっこい生物がいた。あ、けど顔つきがおじさんだ…ブルドックみたいな顔つきだと思つたのは秘密にしておこう。

肌は微妙にオレンジで、髭は赤、足はなんとも細い、鹿みたいな、しかも物凄く小さい。よく支えられてるよ、その足で。バネはありそうだけだな。…よく見たら尻尾もはえてるよ…。

ゆっくりのっさのっさと歩いてくる。その間に俺はアクア達の元につく。

??「フィルが良い格好しようとするからだよ！」

さっき、アクアと共に戦っていた男がフィルとか言われた生物に話す。

フ「五月蠅い！お前なんかまだまだひよっこだ。」

お前に言われたくはない。言われた男の立場になって考えた俺。

零「なあアクア、さっき一体なにがあつたんだ？」

ア「レイト、それは……………」

零「クアツハツハツハ！」

思わず声をあげて笑ってしまった。だってそうだろ？話しの内容によるとそのちっこいのがアクアを助けようとして逃げ出して、それであるさっき共闘してた男を戦いに無理矢理強制参加…これじゃどつちが未熟か分かるな。

??「はー、もっと強くなって早く英雄ヒーローになりたいよ…。」

共闘してくれた男がため息を吐きながら呟く。

零「あ、君。さっきはアクアを助けてくれて有り難う。俺は岸昏零斗だ。零斗って呼んでくれ。」

??「ああ、僕はヘラクレス。みんなからハークって呼ばれてる。よろしく、レイト。」

うくん、慣れたつもりだけど誰かしら正しい発音で俺の名前を呼んでくれないかねえ？

ア「強くなる事が英雄ヒーローになることなのですか？」

確かにそうだ。アクアのこの言葉は結構試しになってる。

へ「そりゃそうだよ！僕もチャンプ・テラみたいに強くなるんだ！」

…駄目だこりゃ。それより、さっきテラって言ったよな？面識があるのか？

ア「テラ？」

確かにさっきの看板で書いてあったし、な。この世界は後にしてるのかね？

フ「ところでお嬢さん、この後の御予定は？」

……ナンパか？こいつ……明らか人間じゃねえのに人間にナンパしてるよ……有りなのか？

フ「俺が鍛えた英雄ヒロについて語り明かさないか？」

…まてまて、英雄を育成でもしてるのか？

零「なあ、その…：フィルでいいか？俺は零斗って言うんだ。それはさておき、テラを知ってるか？」

フ「レイトか…：そう、今英雄と言えばチャンプ・テラ。…なんだいあんた達もテラのファンか？」

零「いや全然。」

へ「即答かい…。」

だって、ファンとかじゃないし、親友だし。

フ「ともかく、最近はどういつもこいつもテラテラテラテラだ。」

ア「いえ、私はテラを探しているんです。」

アクアが反論。けどそれじゃそいつの耳には追っかけ野郎にしか聞こえないぜ？野郎じゃなかったな。

フ「みんなそうだ、テラを探している。」

ほら、やっぱり。

フィルが妬みを含めているのか、少し苛立った口調で話しを続ける。

フ「前回の闘技大会で初参加にして優勝という華々しいデビューを

飾っておきながらそれ以来行方不明だ。」

へ「テラの強さは英雄ヒーローそのものだったそうだよ。」

へラクレスはなんか思い出したかのように話す。

へ「僕も早くテラみたいになりたいな。」

フ「そう、あまりの強さにおかしくなる対戦相手もいたそうだ。」

苛立ち口調がおさまり、そのときの事をフィルは話す。

へ「フィル、オーバーだよ。」

大袈裟など、へラクレスはそれはないみたいな顔で返す。

ア「テラはもう…ここにはいないようですか…レイトはどうする?」

いきなり俺にふってきた。

零「俺は少しこの世界に用があるから残るよ。」

につこりと微笑みながら返す。俺、性格変わったな。

フ「確かに今はいないが、闘技大会には姿を見せるかもしれん。」

へ「うん、きつと戻ってくるよ。」

来ねえよ。そう思った俺であった。

フ「闘技大会に出ればテラに会えるかもしれない。そうだ、俺がエントリーしてやってもいいぞ。なんなら、トレーニングもつけてやってもいい。」

わんさかちゃっちゃんか話しを進めやがって…。

へ「フィル！僕が頼んだ時はあんなに渋ったくせに！」

フ「五月蠅い！黙ってる！お前と彼女とでは素質が違うんだ！」

ヘラクレスは直ぐ様反論。けどフィルは黙れみたいな…アクアが困ってるよ…。

ア「わかりました。では闘技大会に参加します。私はアクアです。よろしく願います。」

あ、アクアも参加するのか。楽しみだ。

フ「それじゃあ、さっそくトレーニングから…」

ア「トレーニングはお断りします。」

即答…可哀想に、フィル…いい様だ。

フ「ちっ！恥ずかしがりやがって…まあいい。ロビでエントリーを済ませておく。準備ができたなら声をかけてくれ。」

そう言って、フィルは去っていった。

ちっ、と。

零「アクア、お前も大会に出場するのか？」

ア「え！？お前“も”って言うことは…レイトも参加するの！？じやあ、この世界での用事って、大会の参加の事！？」

零「ああ、そうだ。」

超満面の笑みで答える。

ア「私…勝てるかなあ？」

へ「え！？レイトって、そんなに強いの！？」

へ「ラクレスことハークがまさかの事にアクアに質問。

ア「はい。レイトは私やテラの戦い方を指導してきました。

」

へ「え！！？って事は、レイトはテラよりも強いの！？」

ア「はい。」

へ「ラクレスの質問に冷静に答えるアクア…あ、そうだ。

零「あのさ、ゲームしない？」

ア・へ「ゲーム？」

お？くいついた。何故かへラクレスもだけど。

零「そう。この大会で勝った方は負けた方の言うことをなんでも聞くのはどう?」

ア「なっ!!!??」

ま、そうだよな。なんでもだからな。

零「アクア、もしお前が勝ったら俺はなんでも言うこと聞くよ?」

ちよつと誘ってみました。さて、どうでるか…?

ア「わかったわ…絶対負けない!!!」

お?闘志に火がついたな?それでこそ、実力を見れる。

零「んじゃ、俺はそろそろ出場準備をするから。俺はここで。」

そう言つて、大会の出場準備に備えにアクアと別れた。

さて、楽しみだな。

零斗vsアキラ(前書き)

タイトル通り…ではありません！タイトル通りですがタイトル通りではありません！では、ご覧ください。

零斗 vs アクア

零「ふう〜〜〜…疲れた。」

闘技大会に出場した俺こと岸帛零斗。闘技大会での今のところの成績は神だった。だが、あまり思い出したくない。相手が相手だったから…いや、弱い訳じゃない。寧ろ強かった…いろんな意味で…。

〈回想〉

一回戦目

さ〜て、張り切って行くか。対戦相手の名前は確か……TNだったな。マジで誰？

そして大会の会場に入る。なんか神々の戦いみたいな場所だな。待っていた相手は………

TN「ぶるうううあああああああ！…！」

とっさに剣を投げて技を発動。

そして謎のおじさんK・O。試合開始から5秒の出来事だった。

二回戦目

よし…今度はまとも…だよな？対戦相手見ると…HKって書いてあったんだけど…嫌な予感しかしない…。

そして会場に入ると…

HK「ふむ…これはなかなかの殿方じゃ…儂も久々に興奮してきたのお。」

…終わった。

入るとこれまたゴリマッチョでそしてジジイ。姿は…前回よりもっと酷い…白いビキニを…つけている…あれだ…変態だ…。

HK「さあ、儂と良いことしないか？」

ゾワアアアアアアア！！

観客席を見つめてみる！今度は気絶だぞ！？

HK「さあ、漢女の名にかけて…お主をいただく。」

うわあああああ！！マジで！？やだ！これに負けたら…うわあああ
ああ！！

零「ひゃあああああ！！『重なりし絶望』！！」

当たってるのに…命中してるのに…！！

HK「ああ…いいのお…激しい…／／／」

ぎゃあああああああああああ！！止めるおおおおお
おお！！

零「な…な…『ナパーム』！！」

禁断の技を解放してまで倒す！！

HK「ぬわっふあああああん！！／／／」

倒せた…試合開始から15秒の出来事だった。

〈回想終了〉

あれはヤバかった…死んでも良かった…マジで…。小説終わるかと思っ
た…。

次…の…うん…対戦表見るのが恐怖になってしまった…はあ、あ
！今度はまともだな。

対戦相手は…アクア、か。

〈アクアside〉

…次はレイトか。

旅立ちの地で私の…いや、私達の師匠とも言えた存在…そして、親
友でもあり……………／／／

何でも言う事を聞く、か。これで勝って…／／／

と、とにかく私は私の今の全力をぶつけよう。

会場へ一歩一歩と足を進めた。

〈零斗side〉

さて、楽しませてくれるか？

会場に入ったと同時にアクアの姿も見えた。

零「アクア…。」

ア「レイト…。」

俺達二人は両者、静かに武器を構える。俺の武器は漆黒の剣、『レーヴァテイン』を手に持っている。だが、これは不完全であり、今の状態は炎を出してない状態。いわゆる、普通の剣と変わらない。様に見えるが、実際はかなり強い。軽く、さらに頑丈。そして何故か反動が少ない。つまり思いっきり剣を振っても力比べでも有利、外してしまっても軽いから直ぐに次の攻撃に移れる。だが、これでも“不完全”だ。まったく、本物はどこまで強いんだか。

ま、それで、俺の切り札『レーヴァテイン』を出現させた。つまり、これが意味してる事は…

零「アクア、全力で来い。俺も本気で相手する。」

そう、本気の対決だ。まあ、“少し”本気かな？え？さっき本気で相手するって言ったじゃないかって？なにも全力で相手するなんて言っていないぞ。いや、同じか？あ、ちなみに全力は『レーヴァテイン』の力を解放、つまり炎の大剣と化した時だな。

会場も俺とアクアの闘気で満たされ、会場が静まる。

…そして…

俺とアクア、は同時に駆け出した。

そして会場はまた観客の声で満たされた。なんとという活気じゃ…！！

キープレードとレーヴァテインが交じり合う。

力での勝負あ圧倒的に俺の方が有利。それをわかってて激突したのか…アクアは大きく後ろに後退する。

確かアクアの戦いは合気道のような、力が無い分、技と相手の力の利用で戦うんだよな。だが、ここはあえて力攻めで行くか。

追撃をする。勢いを利用し、レーヴァテインを大きく振る。アクアは流石にこれは受けきれないのかかわす。いい判断だな。今のはほぼ全力だった。その証拠に、アクアの後ろには真空波みたいなものが通った後がある。

それで隙が出来たと、キープレードを俺に振る。それを俺のレーヴァテインで何事も無かったかの様に止める。

ア「！？」

驚くのは無理はないな。さっきは完全な隙だったからな。“普通は”隙がでなきゃおかしいからな。

キープレードを力で押し、アクアを飛ばす。アクアは空中で体制をとり、着地する。

（アクアside）

嘘だ…今は確実に隙ができた筈だった…。

あれほどの力で空振ったら普通は隙ができる。なのに…レイトは平然と、漆黒の剣で防いだ。

これが…全力…。

力でも、技術でも、速さでも…なら、遠距離ならば…！

数多くの魔法、炎や氷、水、光などの魔法を放つ。

だが…

零「禁剣『ブレイドマスター』…！」

レイトは剣の塊を放つ。魔法を全て消滅させ、私に迫る。

ア「…く…！」

私はすぐさま防御魔法『リフレク』を発動させる。

視界が剣で何も見えない…とにかく、一瞬でも気を緩めると魔法が破れられてしまう。

大量の剣を防ぎきり、剣がなくなった時には

レイトは目の前に立っていた。

剣を振るう。それだけで私の防御魔法を破る。

遠距離も駄目：近距離はさつき試した：最後は：相手の攻撃がギリギリ届かない程度の中距離で！！

魔法で剣を大剣みたいにする。魔力でキーブレードをつつみ、大剣の様な形をしている。が、実際は重さはキーブレードと同じ。威力のみが大きくなっている。

この技はつい最近習得した技だし、結構自信があった。が…

零「うおおおおー！！」

上に弾かれたが、重くなつたわけじゃない。ないから隙があまりないのに、一瞬の隙をはいりこみ、私のキーブレードを弾く。

いったん後退し、そして再び私の手にキーブレードを出現させる。キーブレードは手元に現れると思えばどんなに武器が遠くに離れても手元に出現する。そこはものすごく便利だ。

うん？便利？そう、これでいく！！

今度はキーブレードをブーメランの様にレイトに投げる当然の様にかわし、そして間合いを詰めてくる。レイトは多分油断している。だから…レイトが接近し、近くなった瞬間。キーブレードを出現

させて…

ア「はあああああ！！！」

零「ツ！？」

レイトの武器が飛ばされる。

勝った！そう思っていた。が…

零「俺の剣を無力化させても、まだ武器が無くなった訳じゃないんだよ…俺の勝ちだ。」

え？

そして首に手刀を当てられた。

私の…負け…か…。

そこで私の意識が途絶えた。

（零斗side）

ひやひやした。

ま、あんな事言っただって、俺もアクアみたいにまた剣を創ればいいんだから問題は無しだったんだが、まあいいか。

ワアアアアア！！！！

歓声か？随分五月蠅いなあ。俺はアクアを担ぎ、会場からいったん出た。

さて、決勝戦は誰が相手になるかねえ？

くハデスsideく

なんなんだあいつは…

この俺様が恐怖するとは…闇の力、制御というより本当に支配しまう…！！

な、ならここは俺様が勝って、あいつより強い事を証明させればいいんだ…そうだ。そうすればいい…。

ちなみに零斗は既に闇の使い方を教えてもらう事、最初のあの二人の試合が印象強すぎて忘れてます。

く????sideく

おお！？いい試合だったなあ…あれは凄い！あれはもしかして、テラを越えてるかもしれないな。

なんつったって、あいつは結構誤魔化せてたみたいだけど、まだ全
力じゃないみたいだしな。

決勝戦が楽しみだぜ！！

ザックス(前書き)

うーん、書き方がおかしいのかな？何度か書き直し、そして試した結果、駄目でした…(TT)

では、ご覧ください。

ザックス

俺こと岸帛零斗は…あの試合の後、なんの問題も無く…いや、一つあった。それは…

ア「……………//」

アクアの態度。

気絶から目がさめるのが非常に早かった為、背負ってロビーに入っただとこで目がさめた。そして、それ以降ずっと俯き、無言で俺の隣を歩いている。

零「……………。」

ア「……………//」

零「な、なあ…アクア？」

ア「……………//」

現在進行形で、今も俯いて歩いている。今、ロビーを出て、軽く暇潰し程度に歩いている。

零「……………ああ、そういえば確か決勝戦の名前は…おゝい、アクア？」

ア「……………//」

零「…アクア！」

ア「ひゃ、ひゃい！！／＼／＼」

あ、やっと反応してくれた。やっぱり、許可無しに背負っていたから怒ってるのかな？

零「あの…ごめん！」

ア「え？」

零「いや…気絶してるとはいえ、許可無しに背負ってしまったって…女性だから嫌がるよな？本当にごめん！」

取り敢えず頭を下げた。

ア「い、いや…そんなことは…嫌というか…恥ずかしかったというか…ボソボソ」

零「そうか…良かった。」

取り敢えず、この話しはいったん終わり！勝手にしめきらなきゃ永遠に終わらなさそうだしな。

零「そういえば…アクア、決勝戦の相手ってさ…誰だっけ？」

歩きながらアクアと会話。うん、もう平気だろう。

ア「…ん？あ、決勝戦ね。決勝戦の相手は…確かザックスという人

だった気がするよ?。」

ザックス…名前に強敵かも。

零「へ〜?なんか強そうな名前だな。ザック…」

その時、俺は言葉を中断しざるをえなかった。いきなり黒髪で、少しツンツンで、兵士っぽい鎧を着ている青年がいきなり割り込んできた。

??「あんたがレイトだろ?俺、ザックス!決勝戦の対戦相手な!よし、これに勝ってテラと勝負だ!」

…ザックスねえ。つてか、いつの間にかザックスの後ろにはフィルとヘラクレスがいるし。

ア「テラと勝負?どういう事でしょう?決勝戦の後にまだ試合があるのですか?」

アクアがザックスに質問をする。

零「あ、それ俺も聞きたい。ザックスとやら、それはどういう事だ?」

ザ「ありゃま…ルール知らないんだね。あーフィル、説明してやってよ。」

ザックスが俺達の質問をフィルに投げる。

フ「この大会は西と東、2つのブロックに分かれて行われ、それぞれ

れの勝者が戦って優勝を決めるんだ。お前さん達が今参加してる、していたのは東ブロック。もしかするとテラは西ブロックに出ているのかもしれないな。」

ア「でしたら、西ブロックへ行き、直接確認してきます。試合も敗北しましたし。」

アクアがフィルの説明を聞き終えたと同時に移動を開始する。が、

フ「それは駄目だ。」

フィルに止められる。ってか、フィルしつこいな。

フ「大会参加者、参加していた者は別のブロックの試合を見ることは許されていない。」

絶対そんなルールは存在しないな。だって、試合に出る必要性が無いのに試合を見てはいけないって、絶対どの大会に行っても無いんじゃない？

へ「そんなルールあったっけ？」

ザ「さあ？」

へラクレス、ザックスがヒソヒソと話している。聞こえてるけどな。うーん…少しだけ協力してやろうかな？

零「アクア、さっきのゲーム、勝者は俺だったよな？」

アクアがギクリと体をビクつかせた。

零「んじゃ、俺の試合、最後まで見届けてくれよ。」

アクアは溜め息を吐き、頷く。

ア「わかった。それじゃあ、私は先に行ってるね？」

観客席の方へとアクアは向かった。なんだかんだで試合を見てくれるのが嬉しい…かな？

一方ヘラクレスとザックスはなんか話している。

ヘ「ザックスとレイトの試合、これは見逃せないぞ！」

フ「ハーク、お前はトレーニングの続きだ。」

あら、可哀想なヘラクレスだぜ。

ヘ「ちえっ。ザックスもレイトも頑張っつて！それじゃ！」

ヘラクレスは何処かへと駆け出した。この場にいるのはザックスと俺。

ザ「レイト、改めてよろしくな。」

零「ああ。簡単にやられるなよ？」

ザ「へえ〜？随分と余裕じゃん！よお〜し、燃えてきた！」

…テラの事、一応聞いてみるか。

零「なあザックス、テラとお前はどついう関係なんだ？」

するとザックスは懐かしむ様な、また感謝している様な、またライバルの様な瞳を俺に向け、答えた。

ザ「テラは、恩人なんだ。前回の大会でハデスって奴がテラを闇に引き込もうとして俺を利用したんだ。俺はハデスの術にかかって、普通じゃない力でテラを追い詰めた。でも、テラは闇に墮ちることなく俺を解放してくれたんだ。」

へえ？ハデスの野郎、最初は親切だと思っていたんだが…俺の親友ともであり弟子でもあるテラを、ね。マジでいつぺん俺の禁忌『レーヴァテイン』を叩き込まなきゃ駄目みてえだな！

闇の扱い方を教えて貰う事、真面目に忘れてます。

ザ「重い話は終わり！それじゃ、試合会場で待ってるからな。」

零「あー、ちょっと待って。」

ザックスを止める。さて、ちょっとした余興を楽しもうかね？

ザ「ん？なんだ？」

そこで俺は真剣かつ暗い、そして怪しい笑みでザックスを見る。

零「なあ、一回テラと戦った事あったんだよね？」

ザ「んあ？そうだけど…。」

雄になれる！これは燃えてきたあああああ！！」

熱い…目に炎を宿し、暑苦しい程の熱気を出してくる。

ザ「レイト！俺はお前を絶対に越す！！！」

標的がテラから俺に変更された。さて、これだけ言えば楽しめるかな？

零「安心しろ。全力は出さない。」

ザ「へえ？なら勝負した時に後悔するなよ？うおお！！！」

ザックスが物凄い勢いで会場へ駆けていった。さて、俺も行くかな。

くアクア side く

はあ、期待して損した気分。いや、私は何に期待してたんだ…／／／

けど、まあゲームで負けたのは私だし、最後まで応援しますか。

あ、レイトが入場してきた。

レイトがこの大会で優勝したら…御褒美に…わ、私は何を…／／／

と、とにかく今は大会の方を見よう。

なんだかんだで試合に期待する私であった。

Extra 零斗vsザックス(前書き)

書き方変更しましたよ。読みづらいたら御免なさい。では、ご覧
ください。

Extra 零斗vsザックス

はい、岸帛零斗です。

今現在俺は会場に入場している真つ最中なのです。

アクアには悪いんだけど、この世界にはもうテラはいない。というより、もう既にここに来ていて、んでやる事やったからおさらばしたんだろう。

さて、そろそろ会場につくな。

入場した先には、なんか…普通？な剣を背中にかついでいるザックスがいる。ふーん？こいつもテラと同じパワータイプと見た。けど速さもそれなりだと思う。まあ、戦ってからわかるか。

パワーなら、俺も負けんぜ？

右手、左手の両手に大剣を出現させる。

観客の歓声も静まり、俺とザックスは対峙する。

そしてザックスは口を開き、呟く。

「…テラと約束したんだ。また今度戦おうつて。」

ザックスは剣を構える。

ふむ、やはりパワーだな。両手で剣を持ち、持ち方は大剣だな。だ

が、持っている武器は実際大剣ではない。一撃一撃の力の強さ+速さってやつか。技は…わからん。

「ザックス、テラと戦いたければ俺を越せ。」

俺も両手に持っている大剣を構える。構えるといつても自然体。神経のみを集中させているだけだ。

両者一步も動かない。観客は今かと待ち遠しいような顔をしている。

そして…

「弾幕勝負開催だ。コンティニューは出来ないぜ?」

「行くぞ!!」

両者同時に駆け出し、戦闘が始まった。

一合目、俺の右手の大剣とザックスの剣が交わる。

はあ?どんだけ頑丈なんだこれ?俺は大剣でやってるのに、太さもこっちの方が上なのに傷一つついていない。

これはすげえな。

右足でザックスを蹴り飛ばす。ザックスは空中で体制を整え、着地と同時に一気に駆け出す。

「うおおおおお！！！」

なんだあの気合いは？ザックスはなんとも不思議な奴だ。力を見せつける程強くなってく気がする。

今度は俺が防御、ザックスが攻めだ。

フエイントという手は一切使っていないザックス。その代わりに、すべての攻撃が力強く、速い。

飛行も使い、いったん大きく後ろへ飛ばす。

地面すれすれを浮く。

「へえ〜？空も飛べるんだな。」

まあな。俺は人であつて人でない、“人外”だからな。

「なあザックス、これを防げたら誉めてやるぜ？」

そろそろ俺も本格的に攻める。

俺の上には大量の剣だ。

「剣だけで終わりじゃねえぜ？」

そして右手の剣をザックスに向ける。

それと同時に剣はザックスに向けて放った。だが、俺は剣で終わりじゃないといったぜ？

今度は大量の弾幕だ。ザックスよ、俺は弾幕勝負開催つつたんだぜ？弾幕も使わなくちゃいけねえよな？

「俺は…レイトを…越える!!！」

ザックスは防御魔法とかじゃなく、純粹に剣ですべてを弾いている。へえ？強い、な。

ドクン!!!!!!

ん？なんだこれは？急に力がわいて…!？

「はあああああ!!！」

目の前にザックスがいた。なんだこれは…？

ザックスが剣を振る。後ろに回避するが、剣が少し俺の腕をかすめ、傷をつけた。

…これは？一気に力が…！！

戦いたい…もっと戦いたい…この感情が一気に込み上げてくる。

遊びたい…あいつでもっと遊んでみたい。

…はは、感情が…ひひ…

そして俺の奥底に眠っていた様な懐かしい“何か”が目覚める。

頭のなかでは戦う事にしかないようだな。

「…ザックス。なあ…

簡単には壊れるなよ？」

〈ザックスside〉

な、なんだあれは？

さっきまでは俺が押してた筈。筈だったんだ…

この声で全てが変わった。負ける…ではなく、“消される”。

恐い…けれどこれはこれで楽しいと思える気がした。あいつの中に眠る、“闇より強い力”を目覚めさせる事が出来たんだって。

レイトは、大剣を放り投げた。空中に浮き、嬉しそうな、なんかよくわからん笑みを浮かべてる。

「はは…なんだろう…この力…懐かしい…ザックス！本気でやらな
いと壊れるぜ？」

レイトが俺に向かって話す。俺はこの言葉を“警告”じゃなく“注意”と受け取った。理由？警告にすると可哀想じゃねえか。俺自身も、テラともう一人のライバルが増えたと思っただけじゃねえしな！

観客も盛り上がってきた。観客達、恐いもの知らずだな。

「まずはこれからだぜ？さあさあ、止めてみな。禁弾『漆黒の幻想』
！」

なにかの呪文みたいなのを唱えたと同時に小さいが、数えきれない程多く、そして速い黒い弾が飛んでくる。

しかもレイトの放った黒い弾は全方向だから客に当たると思いきや、魔法みたいなので壁みたいなのがつくられていたから大丈夫だろう。

まずはこれだな。

俺も剣で弾くが、数が多すぎる。

高くジャンプして、一気に着地。剣に魔力をこめて放つ。俺の回りの黒い弾はなくなった。

さて、どこまでもつかない俺。

（零斗 side）

なんだこれ？俺の使った事の無い技が出てきた。いや、正確には忘れていた技かな？身体が自然に動く。なんだろう、楽しい。戦う事が凄く楽しい。

全方向の弾幕を放つ。小さく、そして速く、そして数多くの弾幕だ。ザックスはジャンプして剣を地面に刺した。するとザックスから波動みたいなものが出てきて弾幕を防いだ。

楽しい…

「ははは！！楽しいぞザックス！！もっとやろっぜ！遊ぼっぜ！禁魔『辺りはとても暗くなる』！」

そして観客へまでは被害はいつてないが会場だけは真っ暗になり、なにも見えない闇と化した。観客はザワザワと騒ぎはじめた。

そして辺りは暗い。暗いのにザックスの居場所が正確にわかる…不思議だ。見えないのに見えている。そんな不思議な感覚だ。

そして俺は弾幕をザックスに囲む様に放つ。

するとザックスは剣を上には振り上げた。

上からなにか降ってくる…隕石？しかも超小型。

隕石を俺は魔力でない何かをまとい、素手で隕石を弾く。

辺りは明るくなる。

…楽しい

「ふははははっ！！ザックス！凄いで！本当に凄いで！まだまだい
ぜ！禁剣『降り注ぐ漆黒の剣』！」

片手を振り上げ、数多くの漆黒の巨剣を創る。

流石にザックスはこればかりは不味いのか、避けるのに集中してい
る。

「逃げてばかりじゃテラとの戦いも無理だぜ？ザックス！禁忌『レ
ーヴァテイン』！！！」

今度は俺の切り札、漆黒の剣、レーヴァテインが両手に出現。しか
も両手。さらに炎の大剣と化していた状態。

やめろ…やめろ…止まれ！俺の身体！！

レーヴァテインをザックスに投げる。もうザックスは避けるしかで
きない様だ。ザックスも焦っている。が、なぜか笑みも見えた。

するとザックスは消えた。

いや、移動した。

そして俺の後ろに現れた。

すぐさまレーヴァテインを創る。右手に持ち、ザックスと剣を交える。ザックスは残像を残す程素早く、重い攻撃を放つ。が、俺もそれと剣を普通に交えている。

やばい…やばい…やめろ…俺…

直感が告げている。このままではザックスを“消してしまう”と。

やめろ…!!

頭ではそう訴えている。が、身体が…言うこときかない。

ザックスは俺に蹴っ飛ばされて地面に落ちる。

どうやら戦闘不能らしい。倒れて動かない。

「終焉『破壊を……』」

!?

元の俺に戻った。

いったいなんだったんだ？俺の…元々の力…なのか？あれでもわかる。俺はあの状態で1割も力を出していなかった。

前の俺、そんなに危険だったのか？

そして勝者は俺となった。

戦闘が終わり、地面に着地したと同時に一気に力が抜けた。

そして地面に倒れ、意識が途絶えた。

ん？なんだここは？

辺りは暗く、そして今現在その何も見えない暗闇の中で浮いていた。

零斗よ、聞こえるか？

すると誰かの声が脳裏に響く。間違いない。俺をキングダムハーツの世界におとした本人だな。

「お前、今度はなんの用だ？」

何も無い空間で話す。俺の話した言葉が空間全部に広がった様に響いた。

先程の力だ。あと力が発揮されない理由が分かった。

それは有り難い事だ。

「で？結局あれはなんなんだ？あの恐ろしい力は？」

俺が神に問う。

お前はあの力を知っていた。そうだろう？

！？

確かにその通りだ。あの不思議な感覚…懐かしい様な…ということ
は…

「あれは元々の俺の力か？」

頭の回転が早いな。正解だ。更に言うと、お前は力を失っていた
たのではない。眠らされていただけだ。

眠らされていた、か。

という事は、俺はこの世界では危険故、力を封印されていた。が、
俺の元々の力が強力すぎて封印しきれなかった、と。

力はこれで問題解決だ。あと二つだな。

「なあ、お前はさっきの戦いを見ていたら分かる筈だ。俺の知らない技があったんだが、それを普通に使っていた。それはどういう事だ？」

そう、あの分からん技。俺は知らない“箒”の技を出せていた。

あれもお前が元々使っていた技だ。この世界に来る時、力を封印しきれなかった。私が調べた結果は力が封印しきれなかった。仕方ないから記憶の方をも封印してしまえばいいのではないかと、それで記憶も共に封印された。だが、記憶はもはや封印は解かれ、今現在その技を使える筈だ。威力はないが、それらしきものは使える。

…理解したという事にしておこう。結果を言うと、今現在はその使っていた技の記憶のみが戻っている。それだけで充分かな。それとお前、一人称が私なんだな。声が聞き取れないし、あいつは男か女かわからんな。さて、それはどうでもいい。最後にひとつ。あの謎の力だな。

「なあ、あと一つ疑問があったんだが、あの力はなんなんだ？魔力ではない何かで攻撃を防いだあの力は？」

ふむ、それは単にお前が忘れていただけだ。お前は魔力を中心として使うが、あともう一つ、氣というのも使える。

氣：あ、思い出した！そうだ、ただ単に弾幕や剣に頼り過ぎていて忘れてた。

では説明しよう。氣というのは、簡単に説明すると“生命力”の事だ。

その氣というのは皆全て持っているが、武器として扱うのは非常に難しい故、使う人は数える程にしかない。

身体を硬くして相手の攻撃を防いだり、身体強化もできる。更に放つ事や、相手の病気や怪我也直す事も可能だ。だが、武器として使うのは結構。だが、忘れてはいけないのは氣は“生命力”という事だ。故に、そこらへんでバンバン放出したりしていると普通に死ぬ。更に治療の時は身体強化の倍は氣を使う。強力だが、ペナルティーがでかい。だから俺は氣の扱い方をしっけていても、疲れやすいし、魔力の方が効率がいいからそっちを使っていた。まあ、当時は不死だったから使い放題だったが、疲れやすいから使わなかった。

あ、そういえば不死も戻ったのかね？

ああ、いい忘れていたが、不死にはもう戻れないぞ。理由はわからん。不老だけ消されなかったのだから良いではないか。

……はあ、不死には“何故か”もう戻れないそうです。

まったく、お前と話すと疲れる。お前の場合、読心術が使えぬからな。

うっせえよ。だったら俺より強くなりやがれ。

「ってか、お前男？女？どっちだ？」

私か？私は両性だ。

……つまり、男でもあって女でもあると。……ニューハーフ？いや、違うか。一瞬マジで気持ち悪い方を想像してしまった。

「ニューハーフじゃないよな？」

あんな気持ち悪い奴等の仲間なわけではない。

だよな。んじゃ、戻るか。

魔力を込め、この神の俺への干渉を拒絶させる。さて、そろそろ目がさめるだろう。

辺りは一気に光につつまれた。

「……………ト……………！……………レ……………ト……………レイ……………レイト……………レイト……………」

ん？ここは…？

「よかった…気がついたようね。」

あれ？アクア？何故会場にいるんだ？

「あ、アクア、そういえばザックスは？」

「ザックスは今気絶中。本当、驚いたわ。途中で私のレイトがレイ

トじゃなくなつてた時があつたし……立てる？」

アクアが手を貸してくれる。ん？さて？“私のレイト”って言つてなかつたか？

「なあ、私のレイトってどゆ意味？」

「……………！／／／」

俺が質問すると、アクアは顔をこれでもかかっていう程真っ赤にさせた。

「べ、別になんでもない／／／…鈍感。」

へ？最後辺り聞こえなかつたが、まあいいか。

そしてアクアの手を借りて会場を後にした。ザックスはどうしたか？そついえば、放置されてたな。うゝん…助けに行くか。

くザックスsideく

はあゝ、やっぱり勝てなかつた。ってか、レイト強すぎだろ、あれ。もはや英雄の力越してるぞ！あれ！！

しかし最後のは痛かつたなあ。うう、まだ動けない。実はレイトとアクアが会話してる時、既に目が覚めてただけだな、レイトは鈍感だねえゝ。

え、ちょ、そういえばレイトが立ち去ってから誰も助けてくれないんだけど！！ちょ！だれか！だれか！！助けてくれ！レイトのキックくらって立てないし叫べないんだよ！助けて！！

「ザックス、大丈夫か？」

レ、レイト！た、助かった…。

「い、いや…平気…じゃねえ…よ…キツいな、レイトの蹴りは…。」

レイトに肩を借り、会場を去った。うん、レイトの応援でもしてやるか。

〈ハデス side〉

な、なんだあれは…？

あいつ…闇の力必要ねえんじゃねえのか？

俺様が闇の力の扱いを教えてやるうってのにこけにしゃがって！！

ま、まあいい。決勝戦で叩き潰してやればいいんだ。それであいつを俺様の部下に…。

〈神 side〉

初めての視点だ。私はこの物語の主人公をこの世界に送った神だ。
ひれ伏せ愚民ども。

さて、ふざけはここまでにしよう。

実は私の出番は零斗、奴のあの力が戻った状態の事をなんと呼ぼうか。それを決めるためだけにこうして私自ら出てやったのだ。

さて…どうするか…。

ふむ、あの状態をExtra零斗と名付ける。

さて、私の出番は終わった。私は帰るぞ。仕事をしなければならぬからな。

なに？仕事とはなにか？それは私の可愛：ゴホン！奴隷のイフリートに餌をあげることだ。けっして犬ではないぞ！けっして犬を飼っているわけではないのだから！！私は男だ！女でもあるが男だ！動物に興味をもつ筈などない！

なんだその目は！お前はそんなキャラだったのかと悟った目で見るのはやめろ！！やめ

主人公追加設定

名前：Extra零斗

零斗が危険と感じたり、怒りなどの感情が爆発した時にこの状態になる。元々の力がほぼ戻っている状態。

技

禁弾『漆黒の幻想』

弾幕を小さく、周囲に速い弾幕を放つ。全方向に放たれる故、避けるのが困難。当てる事を前提に考えた技。威力はそれほど高くない。相手を試したりする時に使う。

禁魔『辺りはとても暗くなる』

普通に言うときングダムハーツの魔法『ブラックアウト』とほぼ同じ。だがこちらは空間を暗くする。その暗闇から相手を斬りつけたら弾幕を放つたりする。

禁弾『禁じられた闘争』

まだこの技は出ていない。威力を中心として放つ弾幕。巨大で強力な弾幕を周囲に放つ。だが、量が少ない故、避けられやすい。

禁剣『降り注ぐ漆黒の剣』

漆黒のこれでもかとかいでかい巨剣を降らす。能力を活用した技。量、威力ともに高く、上から降り注ぐ故回避が結構難しい。

終焉『破壊を楽しむ者』

威力、量ともに強力で弾幕と能力を互いにフル活用する。巨大な剣、弾幕をもの凄い速さで周囲に放つ。更に本人からの直接攻撃もする、いわゆる「あ、無理だわこれ」ってやつ。

能力説明：氣

“生命力”の事。故に木、草などの生物全て氣を持っている。だれでも使えるが、扱い方が難しいため、扱える者は数える程しかない。身体を硬くさせ相手の攻撃を防ぐ硬化、身体強化や治癒と、操ればとても便利な武器になる。が、“生命力”故に氣を多く使えばすぎると死んでしまう。氣のため方は簡単。睡眠、食事の二つで出来るが、増やす事は出来ない。

「たったそれだけでいいのか？」（前書き）

いろいろとやばい。自分でもなにがなんだか…とりあえず、オリンピックは最後になります。やっと次の世界へGOですよ。次話で。

はあ、人気上がらん。やっぱり駄文ですからかねえ？才能が無いのでしょうか…だが！こんな程度ではくたばらん！！すみません、強がりました。サブタイトルと内容が全然関係ないような…

「たったそれだけでいいのか？」

俺こと岸帛零斗、大会に順調に勝ち進んでいき、そして今大会最後の戦いへと足を踏み入れた。そしてそのこの世界での最後の相手が…

冥界の王“ハデス”

あれ？ハデスって、なんか重要な事を頼んでいた様な…忘れた。チケツト貰った程度…だったよな？

さてと。ってか、遅くね？今会場にいるんだよ。それでさ、待つてるのはいいんだ。だけど、待てば待つ程寒くなるんだよな。ま、俺は春夏秋冬この服で過ごすから腰に巻いてある黒いジャンパーを着て寒さをしのげる。が、観客の方が…。アクアとザックスもその中にいたんだが、二人共寒そうだな。

とその時、ひとつの氷の結晶が俺目掛けて飛んできた。

ピリッ！！

……………。

今物凄く嫌な音が聞こえたんすっけど。

ジャンパーを見てみると……………

「……………は？」

破けていた。

.....。

決めた。死刑確定。おい、氷投げた奴。顔見せやがれ。

ジャンバーを投げ捨てる。滅茶苦茶激怒中。

（ザックス side）

今レイトの試合を見ようと観客席にいるんだが…これが長い。寒いし…レイトはジャンバー羽織って…レイトから物凄い怒気が感じられる。ああ、ジャンバーが破かれちまったのか。氷の結晶があるし。

その時、なにかがよじ登る様な音がした。一つ…二つ…いや四つ。

そして会場に現れたのがでかい氷の塊みたいなの…というか、よく入ったな。試合会場に。っと、それどころじゃない。これじゃあレイトが不利じゃないか！

すると今度はハデスが現れた。

「一対一とは言っていないからな。」

これは卑怯…その言葉しかない。

周りの観客も文句をハデスにつける。

卑怯だぞ！

最低ね！

ぶるるるあああああああ！！！！

ぬつつふうふうん！！

…観客席に居てはならない物体がいたが、それはおいといて。

俺が立ち上がるうとした時、アクアが既に立ち上がっていた。

「卑怯です！！それは反則ではないのですか！？」

俺が言おうとしていた台詞をアクアが言う。

「…へえ？それもルールなのかい？」

レイトが苛ついた口調でハデスに問う。

「ルールその2…助っ人もありだ。何ならお前も助けを呼ぶか？」

ハデスはレイトを挑発した口調で答える。だったら、とるべき行動は一つ！

「「だつたら俺（私）が！！」」

俺とアクアが同時に駆け出す。が、レイトに剣で止められた。

「来なくて結構…今俺は…スツゲエ腹立ってんだよなあ！！」

ジャンバーか…どれだけ大切だつたんだよ。

「二人とも…席に戻ってくれ。」

レイトが俺とアクアを席に戻るよう言う。渋々席に戻る。

だが、レイトの口から信じられない言葉が出た。

「助っ人あ？呼んじやったら、お前これで負けたら恥で死んじまうぜ？」

なんと余裕と言わんばかりの口調。

「負ける？いくらお前でもこれだけの数をもってすれば「何言ってるんだ？」「ん？」」

ハデスの言葉に対しレイトはまるで寝言は寝て言えと言わんばかりの余裕な表情。そして次には信じられない言葉が出た。

（零斗 side）

あああ！！ム力つく！ハデスの野郎をぶっ飛ばしてえな！

「仕方ない…お前がそれほど死にたいっていうから俺様が大サービ
スに…更に助っ人を呼ぼう。」

ハデスがその言葉を言い終えたらなんと、会場の向こう側にも30
はいる氷の巨人がいた。

「あいつらには町を襲つように指示を出した。早く俺様を倒さなく
ちゃ町が氷だらけになっちまうぞ?」

外道が！！いや、外道か？これ？外郎でいいんじゃないね？

観客がザワザワと騒ぎ始める。

私達の町はどうなっちゃうの!？

ハデス！卑怯者！

ぶるるるあああああああ！！

ぬっつふうううん！！

さっきから気になっていた…んだが、気にしない気にしない。

「おいハデスさんよ？」

「あん？」

ハデスの口調がなんか変異したが…まあいい。

俺が言いたいのはこれほどの数じゃねえ。

「たったそれだけでいいのか？」

観客がまたザワザワと騒ぎだす。

「レイト…何言ってるの…？…いくばくレイトでもこの数じゃあ…！」

アクアが自分も参戦すると必死に抗議。

「お前…もう一度言ってみろ!!」

ハデスが激怒する。

「ああ、言ってやるよ。たったそれだけで良いのか？」

ハデスの怒りがもう限界を越しているのだろう。

「許さねえ…俺様を…お前は絶対…!!」

ハデスの台詞が長いんで先に戦闘体制をとる。

「いくぜ？ハデスさん…禁魔『辺りはとても暗くなる』。」

技を発動。辺りが漆黒に包まれる。

「禁忌『レーヴァテイン』。…溶けやがれ、氷の集団。」

レーヴァテインを炎の大剣の状態、しかも二本で四体の氷の塊野郎を斬る。

氷な故に一瞬にして溶ける。そして技の効果を切らした。

「さあ、次はお前だぜ？」

ハデスは酷く混乱していた。まさかあんな簡単に倒されるとは思っていなかったのだろう。

「くー！やはり本物のタイタン。うつせえんだよ…観客まで被害を加えたんだ。お前、覚悟はできてるよな？」…ちくしょおおお！

ハデスが更に混乱。辺り構わず炎の玉を撃ってくる。

「弾幕つてのはな…こうして撃つんだよ！！禁弾『禁じられた闘争』！」

巨大な弾幕を周囲に撃つ。それは炎の玉を打ち消し、ハデスへと向かう。

「や、やめろ！あぐあ……………」

悲鳴の声すら聞こえない。弾幕の音がでか過ぎるのだろうな。ハデスは気絶中。冥界の王だけあって体力はあるね。さて、町に飛んで行くか。

町へと飛んで移動を開始した。

くアクア side く

私は焦りを感じていた。

先程圧倒する戦いを見せても体力の限界もある。あれだけ強力な技を見せても疲れは生じる。あんな大きい奴を相手したらやられる！

私は会場を飛び出そうとしたが…

「待てアクア！！行ってもレイトの迷惑になるだけだ！！」

ザックスが止める。

ではなに？私は指をくわえてレイトが一人頑張つて戦っている所を…見ているというの！？

「離してください！！レイトを見殺しにする気ですか！？貴方には分からないでしょう！私は…レイトの親友なのです！！親友を失う怖さ、辛さが！！！！」

「俺だつて行きたい！！だけど、俺達が行つたら確実に足手まといになる。ここは堪える！！」

！！

ぐ！！

私の力不足が憎い…！！言われてみればその通り。

やはりここは堪えるしかない…レイト…死なないで…。

！？

なにかが…おかしい…観客達が…！！

（零斗side）

ハデスの野郎、最低な野郎だったな。

あの氷の集団が通るであろう町の入り口を先回りして仁王立ちして待つ。お？きたきた…。

レーヴァティンを構える。

「ここを通りたければ、俺を倒してみせろ！雑魚！！禁忌『レーヴァティン』の力…不完全だがお前らごとき不完全で充分だ！うけてみる！レーヴァティンの力を！！」

レーヴァティンを横に大きく振るう。炎が氷の…もう面倒だ！氷達を襲う。

「はああああ！！！」

自ら突っ込み、炎の中さらにレーヴァティンを振るう。一発一発力強く攻撃してる故、疲れが凄くたまる。だが、負けるわけにはいかない！！

「うりゃああああ！！！」

10…9…8…7…

「はあ、はあ、まだまだ！！！」

6…5…4…3…2…

「これで最後だ！！！」

ラストに全力をこめてレーヴァティンを振り下ろす。氷は溶け、蒸発した。

右膝をつく。流石につかれた。

地面に倒れる。そう思った瞬間…

ワアアアアア!!

観客達が歓声をあげて俺に駆けってくる…駆けってくる!?!え?ちよ…嬉しいんだけどさ、この人数でこられるとあれだぜ?死ぬぜ?

新しい英雄の誕生だああああ!!

へ？俺が…英雄？マジで？

ってか、それどころじゃうー！いやマジでやばいってーう、うわああ
あああ。

「はあ、はあ、な、なんとかもった。」

「ふふ…お疲れ様、レイト。」

今現在、大会優勝を果たし、さらに魔物？の大群を一人で追い払った英雄となった。

んで、今はアクアと俺で神殿？の隅に腰をかけてる。ってか、俺に二つ名が出来た。

“漆黒の剣支配者”

どうやら、剣を数多く出したからだそうだ。まあ俺の能力がそれだし、な。

「さて、そろそろ行くか。次の世界へ。」

俺が立ち上がり、アクアに手を差し出す。

「へ？／／いや…うん／／」

アクア、何故顔を赤くする？風邪か？

まあなんだかんだで手を取り、立ち上がった。

そして異空の回路を開き、手を繋ぎながら入っていった。

あ、もちろんアクアは鎧つけてるよ？硬かったす。

ああ、それと嬉しいお知らせ！俺に新しい相棒が登場！それは…黒い、新しい黒いジャンパーさ！！破れない、そして汚れない。素晴らしい物を貰った。この世界は最高だったぜ。素晴

ディープスペース：宇宙空間？（前書き）

今回は短いです！しかもかなり中途半端です！ごめんなさい！！

ディープスペース：宇宙空間？

「アクア！後方から護衛を頼む！」

「わかったわ！」

今、異空の回路にてあのクラゲみたいなアンヴァースに遭遇。数は…ざつと五千か。両手に剣を出現させ、アンヴァースの群れに突っ込む。

「うおらああああ！！！」

剣に氣をこめて振るう。氣を放ち、斬撃を飛ばす。それでも数は減っても50程度。今回はかなり多い。

「ぐっ！」

「レイト！！レイトになにするの！！はああ！！！」

乗り物状態になっているキープレードをアクアは弓の形みたいなのに変え、放つ。矢は多分魔力でつくっているのだろう。不覚にもアンヴァースの攻撃を受けてしまう。浅いが、アクアは俺の敵討ちみたい矢を放つ。俺は死んでないぞ。不老だけど。

「レイトー！！！」

後方からの攻撃も忘れたみたいでアクアもアンヴァースに突っ込むが、やはりアクアは遠距離型な故にアンヴァースに苦戦。

ん？アンヴァースが…退いていく…！！

左に巨大アンヴァースを発見。巨大クラゲみたいな、白く、泳ぎ方もクラゲ。いや、タコ？イカ？どっちでもいい！とにかく、やつを退治するか。

「アクア！先に行つててくれ！俺はあのアンヴァースを倒す！」

「ちよっ！レイト…！」

俺はあの巨大アンヴァースを追つた。

〈アクアside〉

レイト…また何処かへ行つてしまった。はあ、次こそは一緒に行こうと思つたのに。

レイトは異空の回路で私みたいに鎧は一切身につけず、なのに闇に呑まれない。いったい、どんなに強い心を持っているのやら。そして、なんであんなに飛行が速いの？あれは…追いつけない。もう既に見えない。

はあ、仕方ない。私一人で行くか。

〈零斗side〉

…ちい！くっそ！マジかよ！今、あのでかいアンヴァースに囲まれ

ている。

1体、2体、3体……………200体。

「こんなの…ありかよ？」

いや、さっき5000を相手して今度はでかいの200だぜ？流石に疲れるぜ？

「倒せない事はない…が、疲れとストレスが…上等だ！離れやがれ！禁弾『漆黒の幻想』！」

小さく、早く、そして多い弾幕を放つ。威力は小さいが、的がでかい事が有り難い。次々と消えていくアンヴァース。

だがよ、いったいどれだけ俺は異空の回路を漂っているのだろうか。そして最後の1体は…逃げた。あいつは…消そう。

〈ヴェントウス side〉

久々だな…俺の順番！！

俺は今、異空の回路で次の世界を目指している。さて、次はこの世界か…ん？

目の前にアンヴァース…しかもでかい。巨大アンヴァース。

「アンヴァース……………行くぞ！」

速度を上げ、アンヴァースを相手しようとしたが…

「おらああああ！！逃げんじゃねえええ！！！！さっきの威勢はどうしたああああ！！！！あんだけ俺に相手させやがってえええ！！！！」

…あのアンヴァース、レイトから逃げたのか？

「あ、ヴェン。あのゴミを追っぞ。」

「あ、ああ。」

「んじゃ、失礼して…」

「え？」

レイトが、俺の乗っているキーブレードを掴んだ。なにする気だ？

「じゃあ、行くぞ！」

「うわああああ！！！！」

レイトに凄く早い速度で引張られた。いや、本当に早いよ！落ちる！乗り方が乗り方だから落ちる！落ちる！！

「うおおおらあああ！！！！待てや！！！！らあああ！！！！」

…レイトに何があったのかは分からないけど、今のレイトだと…怖い。怖くて恐い。アンヴァース、同情するよ。

今日この日、俺は初めてアンヴァースに同情した日だった。

（零斗side）

あああああ！！うぜえ！逃げやがって！そして光が走った。すると……ここは……宇宙？へ？何故宇宙？この世界だと基本、異空の回路だよな？なのに宇宙？やべ！息が！呼吸が！出来る？何故？まあ、いいか。これぞ、ご都合主義ってやつか？

そして目の前に現れた巨大な……スペースシャトル？違うよね。とにかくでかい、これはこれは本当にでかい船が。

「あれに逃げ込む気か！」

あ、ヴェンのキーブレード、知らず知らずのうちに離してた。取り敢えず、おれは次の世界？へと向かった。

謎の生物（前書き）

626号登場です。

626号って…強くないですか？確か自分の3000倍の物を持ち上げる事が可能、暗闇でも物が見え、尖った爪で壁にものぼれる。チートじゃないですか？なのになんでデイズニーキャラのアイドル的存在になっちゃっているんですか？確かに可愛い系キャラですけど…能力って恐ろしく強いですよ？納得いかない…。

それと、読者の皆様。この小説の評価が100以上になりました！僕ごときでも…100とれた。足、机にぶつけた。いたかった。はい、嬉しいです！

そして本編にて《》の部分は普通、通じないのに言葉が通じているときを意味しています。つまり、今回は626号の台詞として受け取ってください。

謎の生物

ふむ…どないするか。

俺こと岸帛零斗は船に乗り込み、巨大アンヴァースを探索中。その途中、ふと気がついたことがあった。

技発動の時のあれ、あの最初に唱える禁忌とか。あれ、いらなくね？そう思った。

前世（キングダムハーツより前の世界じゃ分かりにくいため以降前世と呼ぶ）では超平和にすごし、ただ単に日常的な生活をしていただけだったんだが…そこではまず戦闘なんて滅多になかったため、技を軽く考える程度しかやらなかった。その禁忌とかは、俺の主がよくそう言っていたから俺も真似した。意味は俺でもよくわからないままだったし。

とにかく、技に関して名前変更しようかななんて考えているんだ。別に変えなくてもいいか。

あっさりと悩みを打ち消し、そして辺りを見回す。機械、機械、機械、技術発達しすぎだぜ。

「侵入者はお前らか、何者だ？」

後ろを振り向くと、超巨大な体をし、黒い服を着て、謎の黄色い銃を俺達に向けている。しかしその台詞、俺達が言いたいぜ？だって、お前肌が青だし、しかも顔の形も変だしな。

「それはこちらの台詞だ。名は零斗という。お前の名は？」

「侵入者に答える義務などない！」

さらに銃を向け、殺気を放つ。まあまあだな。力自慢みたいな奴だな、こいつ。

「名乗ったんだから名乗れよ、礼儀知らずが。それとも、礼儀も知らない愚かな奴が俺達を連れ去るなんてな。」

「うぬぬ…ガントウーだ。」

なんとご立派な名前だ。そしてガントウーはさらに今すぐ殺すぞみたいな殺気を放つ。

「お、俺はヴェントウス。追っていたモンスターがこの船に逃げ込んだんだ。」

動揺しながらもヴェンは自己紹介と目的を話す。勇者だぜ、お前。

「嘘を言うな。お前ら以外の侵入者は確認されとらん！」

こちらが親切に話してやってるのに…上等。

「俺達はモンスターを追っているんでね。退いてくれないか？嫌なのならば…力づくで退いてもらうよ？」

体制を低くし、戦闘体制をとる。

今、俺はあのモンスターを倒したくてたまらないんだよな。そっこ

う終わらせる。

「ふん！お前のような小さいゴファー！！」

氣で身体能力を強化し、力を込めてガントウーの巨大な腹にパンチをくらわせた。一瞬にして気絶。弱い。

（ヴェントウス side）

レイトがガントウーとかいう巨大な生き物を倒した。倒してよかったのか？これ。兵隊みたいだったよ？

「よし、行こうか。ヴェン。」

爽やかな笑顔で俺に振り向いてくる。怖い…。

レイトの後を追ひ、ドアの目の前まで行くと…

「クワア！！」

…なんか青くて小さい、オレンジの服を着て、耳が大きく、目が大きい、一見可愛い生物が落ちてきた。

「ヴェ　。　テラ　。　アク　ワ　。」

…ちゃんと話せていないが、確かにテラとアクアと言っていた。

「テラとアクアを知ってるのか！？」

つい興奮してしまい、謎の青い生物に話しかける。そして今度はこ

の生物は懐から何で作られたかは知らないが、星の形をした者を取り出した。

あれは…“繋がりのお守り”！？

「トモ イズナ！」

「へえ？君もそのお守り持っているんだな。お揃いだな。」

するとレイトはこれでもかという程に優しい顔をして、謎の生物に話した。

「&*@§ 「！」

「はは。そうなんだ。」

…よくわからない言葉で話している謎の生物。けどレイトは普通に話している。…レイト、いったい何者なんだ？

〈零斗 side〉

この謎の生物と話している。何故かわからんが、言葉が互に通じるらしい。

《これはテラと同じように作ったんだ。》

「はは。そうなんだ。」

俺も同じ形のお守り、“繋がりのお守り”をだして話している。そ

れをしまい、名前を聞く。

「俺は岸帛零斗。お前は？」

《…わからない。ただ、僕を作ってくれた人は626号って呼んでる。》

まで。こいつを作ったのって、本当に人か？絶対なさそうなんだけど。まあそこはあえて突っ込まない。けど626号か。よし、んじやこつするか。

「なあ、俺が新しい名前を考えてあげるよ。…そうだなあ………ステイツチなんてどうだ？」

何故ステイツチって名前にしたかって？なんとなくだ。

そして626号の返答を待つ。

《ステイツチ…うん！ステイツチ！！ステイツチはこれからステイツチって名前にする！！》

うわお。ステイツチの一人称がステイツチに変わった。

《僕はステイツチ！改めて宜しく、レイト！》

そして僕に戻った。面白い奴だな。

「レ、レイト？さつきから何話してるの？ていつか、どっせって」
の子の言葉を聞きとってるの？」

ヴェンが疑問を投げ掛けてきた。そんな事言われても…

「俺にもわからん。」

それしか答えられない。その時だ。

「モンスターが船に侵入！このままだと危険です！船が破壊されま
す！」

放送がながれた。ご苦労様。

「んじゃ、行くかヴェン。」

「おう！」

ヴェンはキーブレードを何故か出現させて、気合いがこもった返答
をしてきた。

《僕も行くよ！！》

ステイツチが言う。確かにこいつは強い。今の俺（力無解放状態）
では敵わないかもしれない。心強い。が、

「危ないから来ちゃ駄目だ！ここで待つてるんだ！行くよ！レイト
！」

「おわあ！？」

ヴェンが俺を引っ張ってアンヴァースの所へ駆け出した。

《…………》

ステイツチは悲しそうに見ている。が、どうやら待つ気はなさそうにないようだ。うん、ならいいだろう。

俺とヴェンはアンヴァースの所へと駆けた。

怒りのステイッチ（前書き）

ごめんなさい。文が駄文になってしまった…ネタがないので…ね。
いや、あるんですけど、展開がどうしようかと…ごめんなさい。

怒りのステイッチ

「消える!?!」

目の前に現れたアンヴァースに一閃。

「レイト、落ち着けよ。」

キープレードを逆手に持ち、呆れたようにヴェンが小走りして来る。

「いいじゃんか。別に。」

「良くないよ!?!レイトが暴れたら絶対この船壊れるって!?!」

俺こと零斗はあのアンヴァースを追っている。

あのゴミを消したくて消したくて。はあ、ここらでそろそろ出てきてくれ「レイト!いたぞ!」た。

「もう逃がさないぜ?」

アンヴァースがこちらを振り向いてきた。どうやら逃げるのは諦めたのか、逃げるのをやめた。

「ヴェン。やるぞ。こいつ、強くなってやがる。」

中央に柱のようなものは多分燃料みたいなものだろう。それを吸収し、少しは強くなっただろう。

「ああ。レイト!?!」

一気に駆け出そうとしたときだ。

《うわああああ!!》

物凄い爆発音とともに青いなにかが落ちてきた。スティッチだった。

「お前!何で来たんだよ!」

ヴェンがスティッチに問う。なんかスティッチの様子がおかしい。

《コワス!!コワシテヤル!!!スベテヲコワシテヤル!!キエロ!!キエテシマエ!!!》

破壊にとりつかれたように。

その破壊本能のようなものを持っているのだろう。スティッチの荒れ狂う感情が俺の主と重なる。

《アソボウヨ!サアボクトアソボウヨ!!》

止めてやりたい。だがアンヴァースが先か。

「いくぞ。」

剣を構え、アンヴァースに斬り込む。

アンヴァースは回転し、攻撃を振り払おうとするが、むしろ逆効果。俺の力と剣の硬度、切れ味が勝り、むしろアンヴァースを斬り裂いていく。

《アハハハハハ！！》

ステイツチは銃を撃つ。銃は液体のようなものを飛ばし、アンヴァースを溶かす。

「これで終わりだ！！」

最後はヴェン。キープレードを投げる。炎をまとうキープレードを投げ、アンヴァースを消滅させる。

今回の敵、あっけなかったな。だが…

《アハハハハハ！！モウオシマイ？ジャアシカタナイカラソコラヘンヲハカイシヨウ！！》

ステイツチをとめるか。

ステイツチに歩み寄り、理由を聞く。

「…ステイツチ。どうしたんだいったい？」

その言葉、その言葉を極限まで優しく、本当に自分がこれまでにないだろつくくらいの優しさで話しかける。

《…キズナ…ウワアアアア！！》

…絆？もしかして、“繋がりのお守り”か？

するといきなりステイツチが殴ってきた。

「ぐ…ステイツチ、落ち着け。」

今の俺では勝てない。元の力解放状態なら勝てるが、力がありません。

《アハハハ…ハ…は…え？レイ…ト？》

どうやら戻ったみたいだ。

《え…レイト…殴ったの…僕…なの？》

悲しそうに話す。だろうな。まあ自分は無自覚なんだろうからな。

「ああ。気にするな。それでどうしたんだ？絆がなんちゃらかんちやらつてのはなんだ？」

《……………》

無言でボロボロになったステイツチが作った“繋がりのお守り”だ。

「……………なあ、“繋がりのお守り”があるから俺達は友達なのか？」

「レイト……………」

《……………》

無言。絆というものを教えてやるか。

「君は俺の事をどう思ってる？」

《……友達。》

あの時も…アクアにこれを貰ったのもあくまで絆が出来た後。おまけのようなもの。

「テラの言っていた事を思い出すんだ。多分テラの事だから、“絆は心で感じるんだ”みたいな事を言っていただろ？」

《でも…。》

はあ。じゃあこうするか。

「じゃあさ、俺達は友達やめるか。」

「れ、レイト…！」

ヴェンが怒りながら俺に言う。

《そう…だよな。僕みたいなのは…「友達はやめた。けど親友まではやめてないぜ？」…え？》

友達…友達より、切っても切れない。本当に大切な、悩みをぶつけ合い、本当に信頼できる仲間。

《親友…？》

「そう。親友だ。友達みたいなんじゃない、本当に心を許せる者。俺とお前は…親友だぜ？そんな“おまけ”で絆は切れないぜ？」

《……うん！僕とレイトは親友だ！！》

「ああ！親友だ！」

ステイツチの悩みはふっきれたみたいだ。

「あのさ……なんか解決したみたいだけど……俺にはどんな会話かわからないから……感動できないんだよなあ。」

一人、KYがいた。それ以外は問題なし。

試作品626号脱走！

やばー！！

「ヴェン！ステイツチ！ここを抜け出すぞ！」

《うん！》

「ああ！」

そしてヴェンは鎧をまとい、キーブレードに乗る。ステイツチはそこらの警備隊の船を盗み、俺はそのまま飛ぶ。

「ちいー！！しつこいんだよー！！」

剣を投げ、追ってくる警備隊みたいな船を破壊する。が、数が多い。しかもあの溶ける銃弾をうってくる。

「レイト！頼む！」

「ああ！お前ら！弾幕ってのはな、こつやって撃つんだよ！禁弾『漆黒の幻想』！！」

数多く、速い弾幕を撃つ。破壊が、やはり数が異常。しかも強敵とわかったのか、さらに船が追ってくる。数が一万を超えるであろう赤い警備隊の船がきた。

「ちい！！禁魔『辺りはとても暗くなる』増絶『重なりし絶望』！」
辺りを暗くし、剣を投げつけた。

「ヴェン！しつかり乗ってる！スティッチ！操作は俺がするからへんなのいじるなよ！」

「へ？うわあああ！！」

《あ、あれ！？船が勝手に動いてる！》

ヴェンのキープレード、スティッチの船を掴み、移動を開始。

暫く進み、なんとかふりきったようだ。が…俺は思ってもいなかった。これから、物凄くいたい思いすること。

ハイパードライブ、開始

「…………え？グハツ！！スティッチ！なにやったあああああ！！！」

《ヴェエエェン！レイトオオオオオ　　。　　》

「おんどれステイツチ！覚えてるおおおお………」

ステイツチがなにかをいじったせいで、俺はステイツチの船に飛ばされた。

俺、どうしよう。目茶苦茶痛い。

（ヴェントウス side）

…俺、どうなるの？

一人、この空間に残された俺。レイトがこれからどうなるのみたいなことを思ってるみたいだけど俺の方がどうなるの？

…え？俺の出番、これで終わり？え！？まさかオチを担当するために！？

え！？もうちょっと話させてくれ

ネバーランド・ピーター・パン（前書き）

うん：今回は少し無理矢理感があるような…では、どうぞ。今回は新しい世界です。

ネバーランド・ピーター・パン

ちい、まいったまいった。

俺こと岸帛零斗は、あのステイツチの乗っていた船の何かに巻き込まれてへんなところに飛ばされた。かなりヴェンと距離が離れた。

今現在、とりあえずてきとうに異空の回路をさまよっている。ん？ 次の世界か？

さて、次はどんな世界かね？ そういえば…俺、エラクウスに何を言われて世界をまわっているんだっけか？… 忘れた。まあ、この世界を見物したらいったん旅立ちの地に戻るかな。

こうして、俺は次の世界へと向かった。

〈ヴェントウス side〉

レイトがどっか飛んでいってしまったって着いたのがこの世界。そこで俺は、二人の子供に出会った。俺は子供じゃないからな！

その二人の子供は、熊の着ぐるみを着ているのと、狐の着ぐるみを着ている。二人から話しを聞くと、二人は流れ星がこの世界で落ちたらしい。それで二人はその流れ星を探している。俺もそれに同行させてもらってる。

暫く進むと、木そのもので出来た家…というより秘密基地みたいな

ものがあつた。

すると今度は上から何かの鳴き声が聞こえた。

「ピーター・パン！」

子供二人は鳴き声が聞こえたところに話す。

すると上から葉で出来たのかな？緑の服、オレンジの髪、そして腰には小さなナイフを着けている俺と同じ年みたいなピーター・パンと呼ばれた人が来た。

飛びながら。

「誰だこいつらは？見ない顔だな。」

ん？こいつ“ら”？俺の他に誰かいるのか？

「俺、ヴェントウス。ヴェンって呼んでくれ。」

「ふ〜ん…そして君は？」

俺の横の何かに話す。

「俺は岸帛零斗だ。零斗と呼んでくれ。」

隣にはレイトが…レイト！？

（零斗side）

ふう。出てきた場所が森のなか。

森を出ようと歩いていたらヴェンを発見し、こっそりとヴェンの隣に立つ。

オレンジ髪の少年、さつき子供がピーター・パンとか言ってたな。そいつが奇妙な鳴き声を出して降りてきた。

「俺、ヴェントウス。ヴェンって呼んでくれ。」

ふうん。俺と同じ、空を飛ぶ力がこいつにはあるのかな？

そしてピーター・パンとやらが次は俺の名前を聞いてきた。

「俺は岸帛零斗。零斗と呼んでくれ。」

「レイト？不思議な名前だなあ。」

「レイト!?!」

ピーター・パンとやらは俺の名前に不思議がり、ヴェンは驚いている。

「あれ？二人は知り合いかい？」

「ああ。というかレイト！なんでどっか行っちゃうんだよ！」

ピーター・パンの問いにヴェンが答える。答えた後、俺に激怒？してきた。無視無視。

「気をつけ！」

ピーター・パンは子供達の前に立ち、部隊の隊長みたいに言う。

「お前達、海賊のお宝は欲しくないか？」

「海賊のお宝!？」

「欲しい！」

海賊のお宝か。ピーター・パンは宝石探してもするのか、子供二人に問う。子供二人は興味を示したり、欲しいと欲をそのまま出したりと反応だった。

「フック船長がお宝を隠しているところを見たんだ。それを横取りしてやるうじゃないか！」

どうやらこの少年は結構大胆な事を考えているらしい。海賊本隊を襲撃するつもりだろう。それにしても海賊も海賊だ。何故船に運ばないのだろうか。隠してあるお宝をまた隠してどうするのか。意味不明だな。

「面白そう！」

「行こう 行こう」

駄目だ。こいつら、頭の中が好奇心しかないのか？海賊と戦う事になり、命の危険があるのにも関わらず、子供は遊び感覚みたいな感じで着いていこうとしている。

「いてっ！」

「いてっ！」

そこで小さい、それは手のひらサイズの小さな小さな羽をはやした女の子が子供二人を蹴った。

「テイク、どうしたんだよ？」

テイクと呼ばれた小さな…よく見たら妖精か。こんな小さな妖精は初めて見た。とにかく、小さな妖精がピーター・パンを止める。何かを訴えているが、この距離からじゃ聞こえない。

「みんなで流れ星を探しに行く途中だったんだ。」

ヴェンが説明をする。

「海賊のお宝の方がずっと楽しいよ。」

もう我慢の限界だ。ピーター・パン、死ぬつもりか？

「なあ、ピーター・パンでいいか？そして危ないぞ？相手は海賊だぞ？それ相手に君は多勢に無勢で突っ込み、更に遊び半分、いや遊びで海賊と殺り合う気か？死ぬぞ？」

真剣に俺は話す。そうだろ？海賊って、三人しかいないのにそれを海賊だから多勢に突っ込みに行くって普通は自殺行為だぞ？あ、俺は平気だ。まず船ごとアボーン出来るから。

「え？あ、そうか。君たちはフック船長を知らないのか。フック船長相手なら遊びで充分さ。」

…読めた。こいつ、一回ばかりじゃない。何回も何回もそいつにお世話になっているんだな。襲われれば返り討ちにしているんだろうな。

「わかった。俺からは何も言わない。さて、その…ティンクとか言うやつ、君はどうするんだ？」

そしてティンクとやらが寄ってくる。

《私？私は流れ星を探しに行くわ。あと、ティンクじゃなくてティンカー・ベルよ。》

「分かった。んじゃティンカー・ベル、宜しくな。」

につこりと微笑む。第一印象超大切。何故毎回こうするかというと、そっちの方が優しい系に見えるしな。あと敵意もないことを俺なりに示している。あと、小さい子だとなおさらだ。

《…ノノよ、宜しくノノあと、私の事はティンクで良いわ。別に貴方の事が気になるわけじゃないんだからね！ノノノ》

…隠しツンデレか？ま、いいか。普通に接すればツンは発動しないだろう。

「……まさかティンクと話せるやつがいたなんて…。」

「レイト…やつぱりお前は規格外だな。」

ヴェンとピーター・パンはそれぞれの反応を示す。あとヴェン。規格外は承知の上だが、俺から言えばお前は弱すぎるんだよ。

「で、ティンクはどうするって?」

ピーター・パンが聞いてくる。

「ティンクはそのまま流れ星探索を続行させるらしいぞ。あ、俺は流れ星とやらに行く。海賊の宝つつつても、金貨に宝石だろ?」

「あ、俺もレイトと一緒に行く。」

ヴェンがついでの反応をする。

「そうか。なら仕方ないな。あ、それとピーター・パンじゃ呼びづらいならピーターでいいよ。じゃあ!」

「「待つてよ!」」

…ピーターグループはピーターを先頭にし、飛んでいった。

「さてと。ティンク、改めて宜しくな。」

《よ、宜しく…／／／》

こちらもティンクを先頭に出発した。

しかしなんだろうな。海賊のお宝の方が面白いイベントがおきそうな感じがしたんだが…流れ星も気になる。ただの流れ星ではなさそ

うらしいな。

逃走自慢のフック（前書き）

今回は短い…と思います。すみません。では、ご覧ください。

逃走自慢のフック

《でねでね、その時…》

はあ。あ、どうも。零斗です。

テインクことティンカー・ベルはよく喋る。さっきからずっと話し相手をしている。

《…ていう事があった…ちょっとレイト、聞いている？》

「あ、ああ。聞いているよ。テインク。しかし、流れ星っていったい何処に？」

《あ、そろそろ着くわよ。ここらへん。》

そこでテインクの話し相手（強制）をしていたらついた。その場所はテントらしきものがはられていたり、トーテムポールらしきものもあった。

「うわ！お前、いきなりとまるな！」

ヴェンがいきなりとまる。なんなんだよ。

「…あれはミツキーの“星のカケラ”？」

そこでヴェンが示した物。それは確かに名前通り星の形をしている。が、かけてはいない。一見、オモチャみたいだが、ヴェンの台詞を聞く限りなにかある。

《あれなに！？ちょっと見てくるわね！》

「あ、こら！危ないぞティンク！」

後を追うように走る。だが…

「フフフフ…。」

ティンクは誰かに捕まった。右手にティンクは捕まれている。左手が失われている。もう一人はそいつについてきている感じた。身長が小さい身長で鼻がでかいおじさん。

「流れ星に思わぬおまけがついてきたぞ！」

ティンクを掴んでいるやつが言う。

「…お前がフックとやらか？さあ、ティンクを離せ。」

剣を出現させ、構える。同時にヴェンもキープレードを構える。

「そうだ。私がフックだ。お前達はピーター・パンに伝えておけ！ティンカー・ベルを返してほしいければ、人魚の入り江まで来いと…。」

そこでフックの台詞は止まった。いや、とめた。

「…ティンクを離せと言っているのだが？」

剣を首につきつけているからだ。

「死にたいのか？さあ、死にたくなければ離せ……！！」

剣を首に突きつけていて、殺気を全開に放った刹那、フックは人間ではない程の速さでちっこいおじさんをつれて逃げた。

「待て！」

「逃がすか！」

上がヴェン、下が俺。後を追おうとするが、ここでアンヴァースが出現。

「邪魔だ！！」

剣とキーブレードを構え、アンヴァースと戦闘に入った。

〈ヴェントウス side〉

ピーター・パンが言ったたフック船長って言う奴がティンカー・ベルを拐っていった。

後を追おうとしたけどアンヴァースに邪魔された。

けれどこれはある意味いい機会。あのレイトに強さを認めて貰えるかもしれない。

〈妄想〉

「どうだ！これが俺の力だ！どうだった？レイト？」

「……ヴェン、お前こんなに強かったんだな。これはマスターとしてやっていけるんじゃないか？」

「いや褒めすぎだよ。／＼流石に照れるよ。／＼／」

「いやいや、お前は強いよ。今からエラクウスの所行って頼んでみるよ。マスター・ヴェントウス。」

〈妄想終了〉

えへへ レイトに認めて貰えればマスターも認めて貰えるかもな

「…なにやってんだ？お前。」

〈零斗side〉

ヴェンがなんかを妄想しているのか、ふぬけた顔をしている。まったく、これではマスターになれるかな？マスターたるもの、油断は禁物って教わっていないのか？戦いの基本だぞ？

「いくぞ！」

ヴェンがいきなり真面目な顔になる。まともに戦うのだろう。しかし表情の変化が激しい奴だな。

あの四本足の雑魚アンヴァースが6匹。余裕だな。

「邪魔だぞ？」

弾幕で瞬殺。1秒ともかからずに倒した。

「ちょ！レイト！俺にも戦わせろよ！」

ヴェンはそんなに好戦的だったか？キープレードを逆手に再び構えるヴェン。

今度はトータムポールのようなアンヴァースが3体。あとゴリラみたいなアンヴァースが3体だ。

「ヴェン、半分でやろう。ヴェンはどっち「こっちだ！」：いつから好戦的になった？」

ヴェンはゴリラみたいなアンヴァースのところに駆ける。まあ、いか。

トータムポールみたいなアンヴァース。三色で、赤、青、黄色となっている。

「……………！？」

アンヴァースは同時に炎、氷、雷の魔法を俺に目掛けて放たれた。即座に防御魔法『リフレク』で防ぐ。

「…成る程。ある意味ゴリラより強敵かもな。」

赤が炎、青が氷、黄色が雷と、色で魔法を分けているのだな。

「…んじゃ新技出すか。」

これは氷魔法の上級。たしかアクアがなんとなく話してくれた気がした。私にはちよつと難しいのよねえと。

「……凍りつけ、アンヴァースよ。『ダイヤモンドダスト』!!！」

アンヴァースのいた場所は凍り付けにされた。そりゃ反応できないか。すこし時間がかかるが、それは問題ないだろうな。相手は魔法に特化。避けるのは無理みたいだった。

「打ち碎ける！アンヴァース!!！」

剣で一振り。氷は粉々になり、アンヴァースともども砕いた。

一方ヴェンは…

「やあ!!くらえ!!！」

これでもかという程の速さ。そして威力も前とは比べ物にならない威力。

「とどめだ!!！」

キープレードを地面に叩きつける。するとあたりが光につつまれた。そして光がおさまった時にはもうアンヴァースは消滅していた。

「レイト！どうだった！？マスターになれそう！？」

ヴェンはこれでマスターになれるだろうと俺に聞いてくる。

「ああ。戦闘に関しては文句なし。だが好戦的な面を直せばもう完璧なキープレードマスターだ。」

これはこれで褒めている。さらにアドバイスマで言ったんだ。だが何故かヴェンはがっかりしている。いや何を期待していた？

「まあ。いいか。とにかく、俺はフックを追う。ヴェンはピーターにこの事を伝えてくれ。」

「わかった！」

そしてレイトは駆け出した。フックは…あのドクロの形をした岩に行ったな。

空を飛び、フックを追った。

テラの闇（前書き）

風邪って嫌ですね。僕、病気に非常になりにくいんですけど、病気になった時の苦しみが半端ないんですよ。更に体温が低い方なので、37.0度で微熱なんですよ。普通…ですよ？おかしくないですよ？知り合いに聞いたらその程度が微熱！？って驚かれましたけど！とにかく…頭が…くるくる回って…うん、とにかくご覧ください。

テラの闇

ちい！何処にいる！

俺こと岸帛零斗は海を飛び、ティンクを拐ったフックを追っている。ドクロの形をした岩に行っただと思うが、速い。速すぎるだろ。多分もうドクロの岩についているであろう。

空を飛ぶアンヴァースをほぼ無視し、とにかくドクロに飛ぶ。岩は省略しよう。

しかし雑魚だから大丈夫だよな？あのクラゲのようなアンヴァース。大量によくいるアンヴァース。まあ、平気だろう。

暫く飛び続け、ドクロ岩に到着した。中にいたのはピーターと着ぐるみらしきものを着た子供たち。そしてピーターは誰かと交戦中。相手は…

「…テラ？」

ピーターは若干押されぎみか。少々手加減している。拮抗している。と見せかけ、戦いをしている最中で問いかけ、か。

「はあああ！！」

まず大きさが違うからな。武器はテラはどちらかという大剣と考えていいだろう。だが、話しは変わるがフックがない。多分見落としたのか。まあ、まずはあれを收拾するか。

ピーターのナイフとテラのキープレードが衝突する時、

ガキイイイン！

「レイト！？」

中央に入り、双剣でテラとピーターの攻撃を防ぐ。

「テラ！何故戦いに発展したかは分からないが、こいつは味方だ！」

「レイト！お前も光りを奪う気か！？」

光り？何の事だ？

「光りがなんちゃらかはしらんが、ピーターはフックとかいう奴の宝箱を盗むという命知らずの遊びをしていただけだ。」

「な！？では俺が守っていたのは！」

「ああ。海賊が求めるお宝さんさ。」

「…そうか。」

テラはキープレードに込めていた力を抜け、戦意がない事を示す。ピーターもナイフをしまった。

「すまない。君とは戦う理由が無かった。」

「いいさ。僕も久々に楽しめたし。」

「いやピーター。こいつは手加減してたぜ。」

「……………え？」

ピーターが固まった。なにやら凄くがっかりみたいなの。

「ま、まあ元気出せ。そういえばフックがティンクを拐ったぞ？」

「なんだって!?!」

「それで、今現在俺はティンクを捜索中。ピーターは向こうを。俺はここ周辺を調べる。」

「わかった!」

そしてピーターは飛び去った。そして、着ぐるみを着た子供達はなにやら宝箱を放置状態だ。

「テラ、お前誰に騙された？」

「ん？一人は右手が無く、「ああフックだ。」ん？どうしたレイト」?

「いや、違う。テラを騙した奴に心当たり大有りだってことだ。暫くここにいるか。多分フックはここにくるだろう。宝箱もあるしな。」

そしてその時…

「うわあああ！！」

「うわあ！うわあ！」

二人が出口からこっちに向かってきた。いや、逃げてきた。後ろには…

「アンヴァース！」

あのクラゲの群れのようなアンヴァース。疲れるね。

「テラ、お前は旅をしてどこまで強くなったかな？第二の師匠であり親友である俺が見てやるぜ？」

アンヴァースは俺たちを囲み、もうこの空間のほぼ全てがアンヴァースだ。

「レイト、驚くなよ。最初に会った時のように弱くないぞ。」

俺は双剣を構え直す。テラはキープレードを出現させる。

…テラの心から闇が…強大な闇が感じられる。やはりあのラストの戦いのようにテラはゼアノートに…なにされるのだったけ？

零斗は一応、本当はかなり薄いが知識はある…。ただ知識がほぼ皆無+400年以上昔のこと故、キャラが少し知ってる程度。

とにかくテラは今、俺の親友だ。テラが闇に堕ちようが、俺はテラの友であり続ける！

「いくぞ！テラ！」

「ああ。レイト。」

「「弾幕勝負開催だ！」」

…テラさん。俺の台詞を真似しないで…。まあ、いいか。

「まずは一手！禁弾『漆黒の幻想』！！」

「大地よ…『クエイク』！」

俺は弾幕、テラは地面から岩をつき出す魔法。まあいいコンビネーションだ。

「流石テラだ！じゃあ、次いくぞ！」

（テラ side）

…レイトには言っていないが、俺の心の闇が膨らんでいるのがわかる。だが、レイトには言えない。

だがレイトと会った時、心が暖かくなった。ああ、やっぱり俺がなんだかんで一番求めていたのは強さなどではなく、友なんだと。

「次、いくぞ。禁忌『レーヴァテイン』！」

レイトはあの炎をまとった剣で大きく振るう。

「うおおおおー！」

俺もレイトの真似をしてみようと、あくまで真似だがキーブレードに炎をまとわせ、振るう。

「うぐ！？ちい！」

！？レイト！？

レイトは油断したのか、アンヴァースの攻撃をくらう。

「はあ！」

レイトの周囲のアンヴァースめがけて“闇の”弾を放つ。

「！？ テラ……」

レイトに……失望されてしまうのか？マスター・エラクウスは言っていた。闇は滅ぶべきと。レイトもマスター・エラクウスにいる。失望されるな……。だが……

「凄いなテラ！！お前どうやってそれ出したんだ！？」

予想外。完全に予想外だった。レイトは、闇に堕ちた俺を失望するんじゃない、寧ろ褒め、そして親友のまままで接した。

「いや、いいね！んじゃやるか！増絶『重なりし絶望』！」

レイトは剣を投げ、その剣が増えていき、アンヴァースを撃退した。

「……………」

アンヴァースは退治出来た。だが、何故レイトは怒るなりしない？

「テラ！お前やるな！ただの猪かと思ったが、やるな！」

ちょ…レイト、案外酷い事を言うな。

「…俺は闇に堕ちたんだぞ？」

「??？」

レイトは俺の言葉に首を傾げる。まるで、闇に堕ちた。だからなんだと言わんばかりに。

レイトのとった行動に過剰反応してしまい、レイトの胸ぐらを掴んでしまった。

「どうしてレイトは何も言わないんだ！闇に堕ちたんだぞ！！」

「……………」

沈黙。そしてレイトは口を開く。

「…だからなんだ？」

「何??」

レイトの目は非常に優しい目だった。暖かく、包み込んでくれる光のよつば。

「世界はね、光と闇で出来ているんだ。心も。光だけのやつもいれ

「闇だけのやつもいる。闇は強大。だけど、その力をどう使うかだけだ。」

「…説得力がある。」

「闇に堕ちても光を支えたければそうすればいい。俺の戦う理由は、世界を救うためじゃない。友達を救うため。」

友を…救うため？

「例え闇に堕ちてもテラはテラだ。変わらないだろ？」

「…ぐ！目が熱くなる…。」

「…な。テラ。一人で抱え込むな。例え闇に堕ちても友達である事は変わらないぞ。」

「うぐ…ぐ…う…」

静かに泣いた。声を殺し、本当に泣いた。そして俺は決めた。この力は…友のために使う事を。

〈零斗side〉

アンヴァースを撃退した後、テラに胸ぐらをつかまれながら問われ、そしてテラは泣いた。いや、いいんだが胸ぐらをつかんだまま、更に鳴き声が苦しんでるように聞こえる。俺は気にしないぞ！

暫くして、テラは泣き止み胸ぐらを掴んでた手を離した。はぁ、苦しかった。

「すまないレイト。」

「気にするな。」

テラの心は闇だが、目は確かな光を感じた。

さて…

「凄いや！あんな化け物を倒しちゃうなんて！」

化け物…確かに化け物だが…。着ぐるみを着た子供が話しかける。

「なあ、君達宝箱はどうしたんだ？」

「……。」

沈黙。それは無くした事を意味する。

「だったら、自分達の宝物を入れればいいさ。」

これを提案したのはテラ。

「テラ、いい考えだな。んじゃ、宝箱を回収しな。」

二人は頷き、宝箱だった空箱は二人が回収するところだったが…

「フックか。」

二つの氣が感じられた。それは間違いなくフック。

「二人とも。隠れてる。フックが来るぞ。」

二人は岩に隠れる。俺は…空中にでも浮いてるか。

「テラ、対応は任せたぞ。」

「わかった。」

そして空中に浮き、様子を見る。フックがテラと話しをしていると何かはテラに渡された。ティンクか。

一瞬にしてフックの背後に行き、肩を掴む。

「なんだ…今忙しい…。」

「やあ フック船長 ティンクを返してくれると嬉しいな」

満面の笑みで言ってやった。フックは肩をブルブルと震わせる。

《レイト!》

ティンクも脱出出来たみたいだ。

「このままでは…!」

「なんだ?このままでは?何?」

《ふん！私を拐った事を後悔しなさい！》

途中でなにかの音が…

「…この音は…！ぎゃあああああ！」

…ワニでした。トラウマがあるのかな？

「さて、ティンク。俺はそろそろ行くから。テラ、行こう。」

《え？》

ティンクは悲しそうにこちらを見る。まあ、そうだな。なんつうんだろう。ムズムズする。

「大丈夫。また戻ってくるぞ。」

ティンクは顔の目の前に飛んできて、言い放つ。

《や、約束だからね！べ、別にあんたがいなくなって寂しいとかじゃないんだからね！／＼／＼嘘ついたらその目玉を蹴っ飛ばすわよ！》

ははははは…ティンク怖い。

「んじゃ、行くか！」

「ああ！」

そして俺達はこの世界から去った。

なんか…予感がする。嫌な予感が…。この先、皆が離れ離れになっ
てしまつような…。

旅立ちの地・ヴェンの追求、テラの決意（前書き）

このシーン、個人的にはかなり好きです。今回は自分なりに結構自信があります。では、ご覧ください。

旅立ちの地：ヴェンの追求、テラの決意

俺こと岸帛零斗は異空の回路をテラと共に移動中。俺は旅立ちの地に帰ることに、テラは…どうすんのかわからん。

「ん？ヴェン？」

少し遠いが前にヴェンがいた。何かを求めている様だが…なんだ？

「マスター・ゼアノート！」

「おわ！？」

テラがいきなり叫びだした。いったいなんなんだ？

「すまない、レイト。俺は寄るところがある。」

なにやら急ぎのようだな。

「わかった。んじゃ、ヴェンは俺が追う。」

「わかった。」

そしてテラは軌道を変え、俺の逆方向に飛んでいった。

さて…

ヴェンを追おう。

〈ヴェントウス side〉

…マスター、いや、ゼアノートは言っていた。俺とヴァニタスが戦う事で、ブレードは完成する。ブレードってなんなんだよ…。

俺はそれを知りたい。マスター・エラクウスもそのブレードの事で俺を“閉じ込めていた”んだ。マスター・エラクウスは…マスターは…まだ修行が足りないなんて言っつて、いつも…いつも…！

知りたい真実を求めるたびに苛立ちが…。

そして俺は旅立ちの地、マスター・エラクウスがいる場所へと向かった。

〈エラクウス side〉

…やはり心配だ。

私が行きたいところだが、ここを離れるわけにもいかんし…だが、もしテラとアクア、レイトの身に何かあれば…私は耐えられたものではない。…レイトは心配無用か？

やはり一番心配なのは、ブレードの誕生…。

ブレード、はキー、またはカイとも読む。ブレードをめぐる多くのキーブレード使いが戦った。ブレード、それは世界をも

滅ぼしかねない危険なカギ。それをめぐり多くのキーブレード使いが戦った戦争を、キーブレード戦争と言う。ブレードとは、完全な光と完全な闇が衝突することで生まれる。その完全な光の心がヴェントウスにあてはまる。

ゼアノート…闇に堕ちたキーブレードマスター。ゼアノートはかつて、ただブレードの誕生におこる事を知るためだけにブレードを誕生させ、世界を危機に追いやろうとした。もうあきらめたと思っていたが、やはりゼアノートはまだ狙っている。

…外へでも出よう。

そして扉を開け、階段の下にはヴェントウスがいた。

…良かった。どっと安心感がわき、急いで階段の下へ下りた。

「ヴェントウス一人か？アクアと一緒にでは？」

ヴェントウスは俯いている。そうとう苦労したのか、恐かったのか。ヴェントウスのもとへいき、ヴェントウスと視線を合わせる。が、私は思いもよらなかった。これからおこる事を。

「いやあ、しかしよく戻ってきた。お前が旅立つにはまだ早い。もつとこの地で修行を積んで「閉じ込めるのか？」…何？」

安心感が全て不安に変わる。

「…そうやって俺をこの世界に閉じ込めているんだな！！」

ヴェントウスは鋭い目付きで私を睨んだ。まさか…知ってしまった

のか…？

立ち上がり、知っていない事を祈りながら、ヴェントウスに聞く。

「…何を聞いた？」

だが、その祈りは無効だった。

「俺が ブレードになる… ブレードって何だよ…！」

…知ってしまった。

「やはりゼアノート、諦めていなかったか…。」

そう、やはりあの時とめておけば良かったのだ。

〈回想〉

玉座の間にて、私はゼアノートを呼び止めた。

「待て！ゼアノート！お前は禁断の領域に踏み入ろうとしている…
何故 ブレードを求めるのだ！！全ての世界が闇に覆われ、無に返
すぞ！」

ゼアノートは足を止める。

「…わずかに伝わる ブレードとキーブレード戦争の伝説…かつて
世界は闇に覆われ、そこから新たな光を見出した。キーブレード戦
争はその言い伝えの一節…破壊の後に創造があるようにキーブレイ

ド戦争の後に何があるのか…我らもまた伝説通りに光を見出せる。光に相応しい生命なのか…私はそれを確かめたいのだ。」

ふざけている。世界を無に返してでも知りたいというのか。

「ブレードの完成こそ、キーブレード戦争の扉を開く鍵となる。」

「お前は自らの興味のために世界を試すと言うのか？世界を一旦闇に覆うなど許されんぞ！」

「ならば闇の中にこそ創造があるのだ。…我ら皆、暗闇からこの光の世界に産み落とされるではないか。」

「それは詭弁だ！」

そしてゼアノートは無視し、また再び足を進める。

…消すしかない。

「言っても分からなければ…！」

私のキーブレードを出現させる。

「力づくで止めるまでだ！」

キーブレードを構え、ゼアノートに駆ける。ゼアノートもキーブレードを出現させる。だがそのキーブレードは闇に溢れていた。

「はああ…！」

「ガッ！ゲッ！」

闇の弾が放たれ、顔にかする。わずかだが、その僅かな力にも確かに打撃は感じられ、膝をつく。

「…その力…闇に堕ちたかゼアノート！」

「…私に構うな。」

そしてゼアノートは去っていった。

〈回想終了〉

「…ゼアノート、あの時お前を止められなかった我が過ち、ここでたださせてもらう。」

…ここで取るべき行動、それはヴェントウスを消すのみ。私の弟子を消す…本当に嫌だ。だが…

キーブレードを出現させる。

「！？ マスター…何を！？」

ヴェントウスが後ずさる。…すまない、ヴェントウス。

「…ブレードは世界に存在してはならぬもの。ゼアノートの真意を知った以上、ここで封じなければならん！」

魔力をこめる。手が震える…だが…

「…許せヴェン、お前は存在してはならんだ!！」

そして放出させる。光の鎖が現れる。それはヴェントウスのもとへと飛んでいく。が…

「ヴェン!！」

二つの人物により防がれた。その人物は…

「なに!！」

「マスター!何をする気です!！」

「エラクウス!正気か!！」

…テラとレイトだった。

〈零斗side〉

俺はヴェンとエラクウスの会話を見ていた。が、エラクウスが封印する呪文なのか、ヴェンに魔法をはなつ。それをついさっき現れたテラとともに防ぐ。

「テラ!レイト!命令だ、そこを退け!！」

「嫌です!！」

テラは断固として拒否。

「師の言うことが聞けぬか！」

「残念だが俺は師匠と弟子の関係ではないんでね。…断る。」

「何故お前らは私の心を理解出来ぬのだ…我が言葉に耳を貸さぬと
言うなれば…」

エラクウスの目には…涙がこぼれていた。

「お前らもヴェントウスと共に封じるまでだ…てあ！」

エラクウスは駆け、俺たちに攻撃する。俺はレーヴァティンを出現
させ、エラクウスの攻撃を防ぐ。

「エラクウス、正気なのか？お前は…そんな最低な野郎だったのか
！？」

「すまん…もう戻れんのだ…。私だってこの様な事はしたくない。
お前、いや、貴様にはわからぬだろう。師をもった事のない貴様に
…私の…心など！」

…そうか。

「もういいレイト！テラ！俺は…」「言うな！」「…。」

俺とともにテラもヴェンの発言に反対。

右手に風の魔法を左手にこめ、そしてエラクウスを後ろにおすよう

に軽い魔法をはなつ。

「ぐー！」

「テラ！ヴェンを！」

「わかった！」

テラはヴェンをつかみ、そして背後に異空の回路を出す。その中にヴェンを投げる。痛そうだったが、我慢してくれ。

「…私も本気でいこう。キープレードマスターとして…お前らを封じる！」

そしてエラクウスは鎧を纏わせる。その鎧は、三つの角のようなもの。所謂、光と太陽を示しているような鎧だった。多分これは全ての力を解放、さらに魔力で自分の体がボロボロになるのを承知の上で全ての力を底上げしていた。これは…テラでは勝てないな。今の状態で俺より少し弱い…いや互角か？力は俺が上だが、魔力はエラクウスが上。

「…マスターだろうと関係ない。」

闇の力を解放させたテラ。

「この力…友のために使う…！」

「闇に堕ちたかテラ！」

そして全ての力が底上げ、更に俺とほぼ互角のエラクウス対俺と闇

の力を解放したテラとの戦いが始まる。

マスター・エラクス（前書き）

ははは…エラクスさんバグ化した…。ではどうぞ。

マスター・エラクウス

…殺気。

エラクウスからは確かなる殺気が感じられる。

俺こと岸帛零斗はテラとともにヴェンを救出。エラクウスは全ての力を底上げし、対峙している。俺とほぼ互角。力は俺、魔力はエラクウス。魔力で底上げしているのに魔力が上がるのはどうかと思うが…代わりに体がボロボロになるのか。

「…ふん！」

「…！？」

エラクウスはキーブレードを突く。その瞬間、一瞬にして後ろに移動。速い！そしてエラクウスの通ったあとだろ。地面がえぐれている。一発が強力だ！

こんな力を隠していたのか？それ程の覚悟と決意だろ。

そしてエラクウスの背中には魔方陣のようなものがある。

「はあああ！」

「！？ 待て！テラ！」

テラは後ろを振り返り、そしてキーブレードをエラクウスに振る。が、吹っ飛ばされたのは…

「うわあああ!?!」

テラだった。魔方陣に攻撃したら反動が自分に帰ってくるのだろう。

テラはなんとか踏みとどまり、体制をたてなおす。さて…

エラクウス…許さないぜ? マスターのくせに弟子にキーブレードを向けるとはな。そして…

「お前は俺の友を消そうとした!」

レーヴァティンをエラクウスに振るう。が…

「今の私なら見えるぞ! 我が本当の力、思い知るがいい!!」

「おらあああああああああ!!!!!!」

エラクウスは俺の攻撃に“応戦”している。若干俺の方が力は上だが魔力はあちらが上。あの状態になれば…なんとかなるのだが…。因みにあの状態とはザックスと戦った時のように能力解放みたいな状態の事。

…全ての攻撃を弾き、さらに向こうも攻撃。激しい攻防戦。響き渡るはキーブレードと剣を交える音。金属音が響き渡る。

「おらあ!」

「ぐー!」

が倒れる程ではなかった。…なんだこのエラクウスは…バグキャラか？

「…やはりレイトはレイトか。強い。だが…ふん！」

「「!??!」」

エラクウスはまたあの光の鎖を出す。そして俺達の動きを封じている。

「はああああ……………」

なんかヤバい…大量の魔力を使っているのか？エラクウスの体から光が…。

「終わりだあ!!！」

!?まずい!

エラクウスからは極太のレーザーが放たれた。だが…く!ヤバい…ヤバい!

ドクン!!

いる…時もあるのだ！うむ！ツッコミはいらん！ではさらば！

…ん？今誰かに体が乗っ取られていた気がしたが…。

「ぐわあああー！」

マスター…！

マスターとレイトとの勝負はレイトの勝ち。マスターの放った光は打ち消され、レイトの放った黒いレーザーが勝った。

「……キープレードマスターとして…お前らを消す！」

マスター…もうあれです。正気に戻ってください。

「はっ！やってみるよ三下！」

レイト…どうしたんだ？

鎖は消え、動けるようになった。俺も…とにかく戦わなくては！

「…終わりだな。勝負はついた。」

「…ふん！諦めたかレイト！」

光がレイトに放たれる。俺は闇の力でレイトの前へ行き、光を防いだ。

「何！？」

「はあ！」

俺のキープブレードの一閃でエラクウスは吹っ飛ぶ。レイトの攻撃でマスターの鎧は鎧の役割を果たしていない状態になっていた。そこに俺の一閃。マスターの鎧は粉々になり、そして胸をおさえ膝をつけて苦しんでいるマスターがいた。

…一気に罪悪感と悲しみが…そして後悔も…。

〈零斗side〉

…理性が…危なかった。エラクウスどころか、ここ全ても消すところだった。テラの一閃でエラクウスは膝をついた。

「ゆ、許してくださいマスター…俺はただ…ヴェンを守りたかっただけなんです…。」

テラはキープブレードをしまい、エラクウスに歩み寄る。

「いや、いいのだ…許せテラ…お前の心に闇をすまわせてしまったのは私かもしれない…こうして私自身も…お前達にキープブレードを向けてしまうとはな…。」

エラクウス…。

「気にするな。俺達は友達だ。例え戦う事になろうとも友である事は変わりはない…と思う。」

「…レイト。」

テラが俺の名を呟く。いや何故？当たり前前の事を言ったただけだ。その時…

「…我が心も闇に…ぐわっ!？」

エラクウスが何かを言おうとした時、エラクウスの背後から闇の何かが当たる。攻撃？だが誰からのだ？

「エラクウス…エラクウス!」

エラクウスにかけより、倒れる身体を支えようとするが…俺に触れる前に…エラクウスの身体が消滅した。

「…嘘だろ？」

残ったのはエラクウスの使っていたキーブレードのみだ。

「…マスター・エラクウス…!」

テラは地面に手をつき、泣いた。…誰が…エラクウスを…。

なあ、エラクウス…嘘だよな？弟子を残して逝くなよ…まだ二人、マスターになってないんだぞ？なあ…なあ…エラクウス…エラクウス…!

「…マスター・テラよ。」

この声は…

「お前が許しを請う必要は無い。エラクウスは、お前の友に手をかけようとしたのだ。」

…ゼアノート！

「貴様…ゼアノート！やはりやりやがったな！」

「…レイトか。危険視はしていたがやはり邪魔となった…が、利用というものはしてみるものだな。」

「貴様！！！」

レーヴァテインを持つ手に力を込める。

「…テラよ。お前の成長には目を見張るものがある。だが…まだ足りない。怒りの感情を解き放て…心を闇に委ねるのだ！」

「…どういう意味だ！」

テラは立ち上がり、キープレードを出現させる。

「…わからんか。ならば来るがいい。我らキープレード使いの運命を刻みし場所、キープレード墓場へ！」

ゼアノートもキープレードを出現させる。

「お前はそこで、ヴェントウスとアクアの最期を見届け、闇に堕ちるのだ…！」

ゼアノートはキープレードから闇を上空に放つ。それは巨大な弾となり、テラ、ヴェン、アクア、エラクウスとの思い出の地を壊していく。

「もうお前達に帰る場所はない！」

「ゼアノート！」

ゼアノートは闇の回路…だったか？それを開き、その中に入り闇に消えた。

…壊れていく。俺を迎え入れてくれた場所が…。友を誓った世界が…。

テラは先にこの世界を抜け出し、キープレード墓場へと向かった。

…俺の下に落ちている物を見る。キープレード…エラクウスの使っていたキープレードがある。

「…エラクウス。」

そのキープレードを取る。ふん…これがエラクウスのキープレードか。光の力を重視。扱いは案外難しい部類に入るが、扱い慣れればかなり強力な力を発揮する。重さは軽くもなければ重くもない。リーチも長い。一撃の威力も、魔力、早さも万能的だ。…なる程な“理解”した。

「……よつと！」

キープレードを地面に突き刺す。

「エラクウス。お前の弟子、俺が救ってやるよ。お前の弟子は俺の弟子でもある存在だからな。…友としてでもな。」

そして俺はこの世界を去った。さて、キープレード墓場へと向かう。ゼアノート…貴様だけは許さない！

と案外かっこいい台詞を吐いたのはいいが…

「…そう言えば、キープレード墓場って何処だ？」

…やってしまった俺であった。

キーブレード墓場…イレギュラーとして…（前書き）

シッコミはいらん！

現実逃避です！

上手くないかainんですよ。シリアス？シーンが。ではご覧ください。

キーブレード墓場：イレギュラーとして…

…ふう。ここがキーブレード墓場。なんとかたどり着いた。

俺こと岸帛零斗はなんとかキーブレード墓場らしき場所へとたどり着いた。何故それが分かるかと？それは…目の前にはキーブレード使いという強力な力を持つ者が戦ったと見られる跡がある。

そこにあるのは岩、岩…辺りが茶色い。そして巨大なクレーターが多数ある。

「…最悪だな。」

ここで数多くのキーブレード使いが死んだ。嫌になるな。ただ一つの武器を我が物にしようとして。

「…俺はこの世界では本来存在しない者…イレギュラーだ。だが…」
右手を前に出し、レーヴァティンを出現させる。この剣に誓おう。

「…ヴェン、テラ、アクア。お前らは…俺が守る。イレギュラーだが、これは俺なりの覚悟だ。」

…イレギュラー、か。嫌だな。本来存在しない者か。だが…

「…親友である事は変わらない。そうだよな…皆。」

剣を消滅させて足を進める。さて…皆を救いに行くか。

暫く進むと大量のキーブレイドが刺さっている場所へと辿り着く。
その先に、ヴェン、アクア、テラと集まっていた。

「…レイト？」

「ああ、アクア。…エラクウスは死んだ。」

「…ええ。知ってる。」

皆俯いてしまった。テラは後悔、アクアとヴェンは悲しみ。

「…テラ。後悔するな。俺達は間違った事はしていない。例えブレイドの誕生の条件だとしてもヴェン親友だ。親友を守るために戦ったんだ。」

「レイト…それでは俺達がマスターと戦い消した事が正しいって言うのか!?!」

胸ぐらをつかみ、テラは俺を問い詰める。

「……俺も後悔してる。だけど…こうでもしなくちゃ…もたない…。」

「

「…………。」

胸ぐらを掴んでる手をそつとどかす。

「テラ…悔しいのはお前だけじゃないんだ！！俺だつて…俺だつたな！エラクウスを友として見ていた！！そいつが目の前で消えた！！…すまん。」

頭に血が上ってしまった。はぁ。

「…皆、それで頼みたい事があるんだ。俺を…消してくれ。」

「…ヴェン…。」

ヴェンの発言。確かにヴェンさえ消えればすべては終わる。だが…

「…歯くいしばれ！！」

「グハッ！！」

俺がヴェンを殴る。この音は辺りに響き、ヴェンは倒れる。

「…いいか。二度と消してくれという台詞を吐くな。いいな。」

これまでではない怒気でヴェンを睨み付ける。

「…………。」

「…返答が欲しいか？いいだろう。その俺からの返答はふざけるな

だ。お前が死んで喜ぶ奴がいるか？いたとしても俺は泣くだろっな。そして自分の身も消しにかかるだろっな。」

〈アクア side〉

レイトが珍しく、いや初めて怒った。私達に優しい笑みをくれていたレイトが怒った。

後悔。けれど後悔しても何もかわらない。そうは知っても後悔してしまっ。

そしてヴェンのあの発言でレイトはヴェンを殴った。力強く、辺りに響きわたるような力で。

今回のレイトの二つ二つの言葉には覚悟と決意が感じられる。私達を守るうと。その守るうとしていた者が自分を消してくれなんて言ったら怒るだろっ。当然だけれど、守られるというのが少し気に入らない。

レイト…今度は私にも守らせてよ。ヴェン、テラ、そして…レイト。

〈ヴェントウス side〉

俺はレイトに殴られた。何故殴られたのかわからない。

俺さえ消えればすべてが終わるのに…。

レイトは俺にこのような事を言っていた。お前が消えるなら俺も消える。

…なんだかこの言葉が深く心に響いた。

…けれど、これは俺の覚悟なんだ。俺の闇、ヴァニタスを倒す。それが駄目なら…

〈テラ side〉

ついレイトに怒ってしまった。レイトの言葉を聞いた時、本当に怒ってしまった。マスターと戦った事が正しい。友を守るとは言え、マスターにキーブレードを向け、さらには消した。なのにそれは正しい事だと…。友を守るために戦った。それは正しかったのだと自分でわかっている。だが…我が師…我が父が死んだのだ。俺達が消したと言っても良い。問い詰めた時レイトはこう言った。

もたない。

レイトも俺と同じ心境だった。なのに…！

ヴェンを殴った時も…本当に友を守ろうと…その決意が感じられた。

ゼアノート…何が狙いかは分からないが、俺は貴様を倒す！この闇の力…友のために有り！

（零斗side）

ヴェンに手を貸し、ヴェンを立たせる。

…二つの闇の力が感じられる。一つはゼアノート。そしてもう一つは…闇しか感じられない誰かだ。多分そいつが ブレード誕生の条件の一つなのだろう。

「…ゼアノートか。あともう一つは誰だ？」

「ヴァニタス…。」

俺の呟きにヴェンが答える。あれがヴァニタス。仮面をつけている少年。

「…キープレード使いでは無いが、乱入させてもらおうか。キープレード使いの戦いに。」

レーヴァティンを右手に出現させる。キープレード使って皆強いよな。不完全だが切り札である剣を構える。

「…やるぞ。ヴェン、テラ、アクア。」

「おっ。」

「ああ。」

「ええ。」

そして俺達の戦いが始まった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9496t/>

キングダムハーツ～剣の御遣い?の戦士～

2011年10月13日10時04分発行